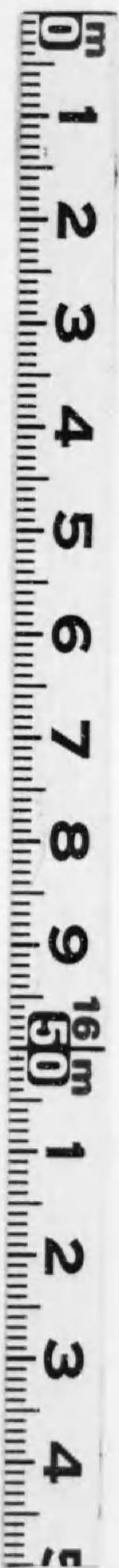


506

103



始



6.12.9

説でまふど水



506-103



何處
まで

徳田秋聲著

大正
11. 5. 15
内交



ま

下

徳
田
秋
聲

✕

誘惑

一

葛代が初めて東京の土を踏んだのは、彼女が漸く女に成りかけた十六の秋であつた。彼女の生涯が、始んどぐうたらに近い平凡愚劣なもので——と云つても彼女に取つてはそれが極めて自然な、或は野性的なその時々の本能の導くがまゝに、まるで一株の蔓草が荆棘や雑草のなかを潜つて、無目的に這ひ擴がつて行くと同じで、少しも虚偽や悪氣のないものではあらうが——あつたとほりに、東京へ出てくるについても、新しい時代の空氣を多少でも吸つたことのある若い女がもつてゐるやうな、都會生活の憧憬が格別あつたわけではなかつた。たゞ北の方の海に近い町で、聯隊へ食料品などを納れて細々暮してゐた父が貧しかつた上に、女の子が四人もあつたところから、結婚する前に自然家を離れて、自分で働かなければならなかつた。

北國の町では、南に續いた淡蒼い森嚴な山の姿が、晴れわたつた空にくつきり眺められ、町を流れる川の瀬に初冬を思はせるやうな水蒸氣が、朝晩に立罩めてゐた。葛代は學校を止めてから、裁

縫の稽古に通つたりなどしてゐたが、東京へ出ると決つてからは、何となく慌忙しい不安な氣持で、毎日その仕度に忙しかつた。そこは色町に近いところで、町で名高い料理屋などがあつたが、彼女のまだ幼かつた頃、父もさう言つたやうな稼業をして、賑やかに暮してゐたのであつた。今は裏町の方へ引込んで、ひっそりした生計を立てゝゐたが、一番上の腹ちがひの兄が、父を扶けて今の商賣に働いてゐるのであつた。葛代は東京に嫁いてゐる、これも母ちがひの姉を手寄つて上京することになつてゐた。

或天氣の好い朝夙く、葛代は昨夜兄が荷造した大きな行李や信玄袋のやうなものと一緒に、一臺の俥に乗つて、町のステイションへ着いたが、兄と小さい妹たち二人に送られて、東京直行の汽車で、町を離れたときには、悲しいうちにも、何となく解放されたやうな心安さを感じないではゐられなかつた。主に兄の働きによつて生活してゐた彼女は、母を通して來る一種の不快な壓迫を感じさせられてゐた上に、生活も可也不自由であつたからであつた。彼女は若い女がほしがるやうな頭髮のものや着物などについては、何一つ満足に買つて貰ふことができなかった。のみならず寧ろ早熟に近い體が發達してくるにつれて、兄や親と一緒に狭い家に起伏してゐるのが、ひどく鬱陶しく氣窮りに

思はれた。で、彼女は、始終義理の母や妹たちのために働いてゐなければならぬ兄の不満から来る、母の氣兼ねや氣苦勞を思ふと、一日も早くゆつくり手足を伸してゐられるやうな、廣い世のなかへ泳ぎだして行かなければならぬ欲求に迫られてゐた。

汽車は町を離れると、直に廣い野原へ出た。野はどこも彼處も、稻が黄色く重い穂を垂れて、しつとり朝露にぬれてゐた。絨を通したやうな秋の日が、耀かしく照りわたつてゐた。暗碧な北の海が、野のはづれに白い波を立てゝゐるのが見えたりした。と思ふと、汽車はまた山蔭の村から村へと走つていつた。山畑には色づいた柿が枝もたわゝに熟つてゐた。

汽車が山國の高原地へと差かゝつた時分には、彼女は快い眠に誘はれて、袋の上に突伏して夢と幻の境にあつた。昨夜おそくまで襦袢の襟をつけたり、帯をくけたりしてゐたのであつた。

ふと目がさめると、彼女は異つた山の姿や桑畑などにうつとり見入つてゐた。

二

最初汽車が町を離れて、二驛目あたりで少し氣が落着いた時分、「あゝあの人に乗つてゐる」と、

ちよつと不思議な懐かしさを感じただけで、格別氣にも留めずにゐたのであつたが、今日がさめてみると、彼は始終自分の方を注視してゐたらしく、便所へ行くため彼女の前を通りすがりに嫣然笑つて、「東京へ？」と訊く男があつた。彼は町で呉服屋をしてゐる家の二男か三男かで、五つ六つ年上ではあつたが、姉同士が友達であつたところから、幼い折には善く往來をして、飯事をしたことなどがあつた。二三年前主人が死んでから店を畳んで、何處か在方へ引込んだと云ふ話であつたが、果樹などの多いその庭で、李だの巴旦杏だのを、木登りをしてゐる彼から貰つたことなどを、葛代はよく記憶してゐた。

葛代も嫣然して「え」と應へた。

「獨り？」

「え。」葛代は頷いた。

「何處へ行くんです。」

「牛込の姉さんのところへ。」

「さう。ちやちやうど好い。僕も牛込だから一緒に行つて上げよう。」

六
そして彼は、「僕病氣でね……暫く田舎に歸つてみました」と言加へて、自分の席へ復つたのであつたが、ネルの單衣ひんえに小倉の袴はかまを穿きいてるところを見ると、彼は學校へでも入まつてゐるらしかつた。とにかく彼女は伴つれの出來たことを幾分心強く感じた。

短い秋の日は、もう前橋あたりで暮れて、野山の姿が悲しげな暮色のうちに裏まれ、水に浸つたやうな灯の影が、ちらほら見えてゐた。高原をおりて來た汽車は廣い平野をひた走りに走つてゐた。汽車が上野の構内へ入つたとき、蔦代は何となく胸がわく／＼したが、例の男がバスケットを一つ提げて、傍へ寄つて來て、信玄袋をもつてくれたりなどした。そして一緒に改札口を出ると、俵を備つてくれた。

「僕のところへも遊びにおいでなさい。僕は……」と、彼は名刺を一枚出して、所番地を書入れて、別れぎわに蔦代に渡した。

都會の町は、火の町かと思はれるくらゐ明るかつた。人波をわけて、電車のレールを突切るとき、蔦代は胸がはらく／＼したが、でもそんなに驚きもしなかつた。同じやうな町を幾箇いくつとなく曲つた。薄暗い靜かな町を通るかと思ふと、また車や人間のこたすた返してゐる騒々しい電車通へ出たりし

た。橋や坂をも幾箇となく登つたり降りたりした。そして頭腦かみづかが少しぼんやりした時分に、或町の曲角で「さよなら！」と云ふ聲を耳にした限り彼の俵は見えなくなつた。

姉の家は靜かな裏町にあつた。木立や板塀などの多いところで、些ちよとした門構への見すばらしいな平家がそれであつた。蔦代はいくらか幻滅を感じたが、玄關口へ現はれた姉の聲を聞くと、急に含涙なみだぐしいやうな氣持になつた。

臺所たいしよつゞきの六疊ばかりの茶の室で、蔦代は久しぶりで姉の顔を見た。姉は父の先妻の姉にあたる人を頼たのつて、五六年前に横濱へ出て來たのであつたが、今の良人をもつことになつた事情については、蔦代は何にも知らなかつた。

奥の室で姉に添乳そにちをされてゐた三つばかりの女の子が寢衣ねいのまゝ起出して來て、不思議さうに蔦代の顔を眺めてゐたが、姉はその間に彼女のために晩飯の支度に臺所で何かしてゐた。すると其處へ紺地の背廣せいひろを着た姉の良人が勤め先から歸つて來て、晚酌ばんしやくが初まつた。

蔦代はその晩、姉と一緒に通りを見に出たが、姉は彼女のために下駄くだや頭髪かみのものなどを買つてくれた。

十五六日ばかり葛代は子供のお守などして遊んでゐたが、間もなく義兄の勤めてゐる會社の上役だと云ふ、小石川の高臺にある或屋敷へ目見えにつれて行かれて、そこに落着くことになつた。そこは葛代の目には姉の家とは比較にならぬほどの立派さで、見たこともない洋館の應接室があつたり、繪にかいたやうな美しい庭などがあつた。他に勝手働きの女中が二人もあつて、葛代は來客に茶菓を運ぶとか、座敷や居間の掃除をするとか、貴重な什器や裝飾品に乾拭巾をかけるとか、主に奥向の用事に働くのであつたが、水弄りをしない代りに、野育ちの彼女としては可也氣骨の折れることばかりであつた。床の間の置物の位置が少し歪んでゐても、夫人から直に叱言を喰ふと云ふ風であつた。

主人は四十二三の酒好きな氣爽な人であつたが、蒼い顔をした夫人は陰氣で、女學校仕込のおそろしい儉約家であつた。葛代はこの婦人から、一枚のオムラアトを二度に使ふことや、ワイシャツの古でエプロンを作ることなどを厳しく教へられた。外に始終日蔭ものゝやうに取扱はれてゐる

主人の繼母だと云ふ六十弱の人の好い隠居さまと、食客のやうに遇はれて、始終ぼろ靴ばかり穿されてゐる主人の甥の中學生が一人あつた。隠居さまも、甥も奥さまの前にはちり／＼してゐた。でも、葛代は氣に入られて、此奥さまから時々半襟や小片のやうな物を頂戴した。毎月の給銀もちやんと奥さまが預ることになつてゐた。

葛代は給銀のたまるのを、切めてもの楽しみに、この鬱陶しい家庭で、毎月々々氣のつまるやうな事ばかりさせられてゐた。そして三四ヶ月もたつと、夫人の氣分の悪い時などは、代つて主人に洋服を着せたり、紙入や手帛の出入をしたりなどした。そして其時分には晩酌の酌をすることにも、可成氣が利いて來たし、田舎丸出しであつた様子も、いつか都會會馴がして、着物の着こなしや帯の締め方もいくらかお上品らしくなつて來た。彼女は生來手足がすんなりして居る上に、癖のない毛がたつぷりして、長い採揚が仇つぽく見せ、微笑するとき暗い目眦に溢れるやうな愛嬌を湛へるのであつた。細かい齒並も綺麗であつた。勿論色も白かつたが眉だけは較薄かつた。するうち彼女はもう十七になつた。規則正しい生活をしてゐるせいか、健康は田舎にゐたときよりも優れて、滑らかな皮膚の色もつやく／＼してゐた。して細りした體にどこと言はれず肉をもつて、様子がひどく女々し

て来た。それは自分にも惱しいほどの快さであつた。勿論主人の目にも、その單純な處女美が異様に映らない筈はなかつた。

葛代は毎晩のやうに、酒のお酌をさせられたが、とき／＼臺所の方へ逃げ出さずにはゐられなかつた。

「おい／＼、お薦は何うした。」彼は陰氣な夫人に傍にすわつてゐられたのでは、折角の酒も舌に苦いといつた風で、夫人に訊ねた。

「は、只今ちよつと……」と、夫人は四角張つた口調で、「貴方が餘りお薦々々と仰しやるものですから、恥かしがつて來ないんでございますわ。」

「そんな奴があるものか。己があの子を何うしやうといふ譯ぢやなし、お前が苦い顔をして頑張つてゐるから、可怕がつて寄つかないんだ。」

夫人はそれに語を返すことも知らなかつた。

「お薦をこゝへおよこし。こゝへ來てお酌をするようにさう言ふんだ。」お銚子の替りを運んで來た女中に、彼は吩咐した。

「はい」と、女中は笑ひながら引退つた。

四

そんなやうな事が時々あつて、葛代は主人に愛されることは強ち厭な氣持ではなかつたが、羞かしいのと夫人に悪いやうな氣がしたのとで、成る可くその機會を避けるやうにしてゐた。

するうち寂しい正月が過ぎておそろしい寒い二月になつた。雪國の町の正月は、外へ出られなければ出られないまゝに、近所同士往來をして、炬燵の傍などで懶惰な面白い遊びもあるのであつたが、東京の、殊に堅くるしい夫人の家庭では、閑寂閑としてカルタ一つ取らなかつた。床の間の盆梅の匂も寒さうだつたし、三箇日の雜煮も一向物足りなかつた。たゞ二月に入つてから一週間ばかり主人夫婦が温泉へ行つた留守に、ちよつと一日姉の家へ歸つて食べるものをたらふく喰べたり、外で羽子を突いたりしたが、切めてもの樂みであつた。「こんな時にでも遊ばなければ、私遣り切れやしない。」葛代は日暮になつたところで歸りを促す姉に言つた。

葛代は奥さまに頂いたじみな半襟を惜氣もなく姉に持つて來たり、子供に玩具を買つたりしたが、

一日こゝで羽を伸してゐると、隠氣くさい屋敷へ歸るのが厭になつた。それに今日來た目的の一つとしてあすこは餘り居辛いから、もつと氣のせい／＼するやうな賑やかな奉公口があつたならばと、それを姉に相談してみたかつたのであつたが、あの家には義理もあるし、預けておけば屹度益になる屋敷だと信じ切つてる姉の前に、つひそれを言出す機會がなかつた。

「わたし何だか歸るのが厭で……。急立てるやうに姉が食べさせる晩飯の箸を措くと同時に、葛代は惱ましげな目で子供を眺めてゐながら呟いた。

「何うしてさ。」姉は不思議さうに訊いた。

「何うしてつてこともないけれど、私何だか厭なのよ。」

そして葛代は含涙しい目をして口元に寂しい微笑をたゞへた。

葛代はこの頃主人から善く、「お前の體は實に好い體だ」とか「お前の毛はほんとうに好い」とか「お前の手はほんとうに美しい」とか言はれた。「お前のお酌でない、酒もうまく飲めない」と言つてお酌を強ひたり「お前はもう十七になつたのだな。もう徐々にお嫁に行けるね。己が好いお婿さんを世話してやらうと思ふが、お前は何んなのがいいかね」とか言つて擲擲つたりした。そして酒

に酔つた時、夫人のゐない處で、不意に笑談らしく彼女を羽交締にしたりした。温泉から歸つてくると、屹度また然ういふ事が屢々あるだらうと思はれたが、それよりも夫人の氣分で支配されてゐる家庭の空氣が、放肆に育つた彼女に堪へがたい壓迫を感じさせた。

で、姉が不機嫌な顔をして黙つてゐるので、彼女はそんな細々した話を口へ出しかねて、暫く餉臺の前にすわつてゐたが、實は今日來るとき、若しかすると此限り來ないことになるかも知れないと思つて、ちよつと荷物の始末をして來たくらゐであつたが、それも何だか駄目のやうに思はれて心細かつた。

「葛ちやんは何うしてそんなことを言ふか知らないけれど、あのお宅なんか葛ちやんの益になる處だと思ふがね。そんな我儘を言はないで、今日はまあ早くお歸り。お留守中なら尙ほのことぢやないか。兄さんが歸ると叱られるから、餘り遅くならないうちにお出でなさいよ。」

そして姉は其處を離れて、水口へ出て何か働きはじめた。

葛代は爲方なしに姉の家を出たが、氣が進まなかつたので、歸りに一寸あの男の處へ寄る氣になつて、ふと鶴卷町の方へ足を向けた。

野田といふ其男の宿が直き知れた。一寸した安ッぽい文房具や紙など商ふ家の二階に間借をして殆んど自炊同様に生活してゐるらしかつたが、其處へ坐つたゞけでも葛代は何となしに安易な氣持になつた。看れば彼は柔かい白毛布などを敷いて、病氣でおくれたノートを寫してゐた。

「何を勉強なさるの」葛代はこの間からのことを好い加減に話して聞かせてから、机の上に目をやつた。

野田はにや／＼笑つてゐた。褐色の、ちよつと愛くるしい目であつたが、鼻が夷^{ひんや}げて脣が厚かつた。

「何を勉強するたつて、僕なんか駄目さ。親父が死んで學資がないから。」彼は、さう言つてそこにあつた菓子袋の底に三つ四つ残つてゐる餡^{あん}麴^{もく}を侷^くめた。

「餡麴私大好きなの。私貴方に何にもお土産をもつて來なくて悪かつたけれど……。」葛代はさう言つて、ちよつと紅い顔をした。誰にでも狎^{なれ}々しく彼女は口を利く方であつた。

「葛代さんは何しに東京へ出たの。學校？」葛代は顔を紅くし俯むいたが、羞恥心がさう強い方ではないと見えて、大して照れもしなかつた。そして、「私も學校へ入りたいと思ひますけれど、女ちや苦學もできやしないわ。」

「ちややつぱりお嫁入の支度かね。」

「私お嫁になんか行きたくもないけれど、好い着物や何か欲しいと思ふの。」

「それあ若い女は誰でも然うだけれども、あの邊の女は殊にさうだね。それで十の七八まで然う云ふ稼ぎに出てくると云ふ話だ。その爲には貞操を賣る奴も多いんださうだ。」

「さう！」葛代は空虚な聲で應へたが、その意味は分明^{はつ}しなかつたにしろ臙^{やう}げには感づけた。

「私眞當のことをお話すれば、小石川の方に、あれからずつと居たんですけれど、其家が厭で／＼爲方がないの。」

そして彼女は夫人の嚴しいことや、食物の稀薄^{ひはく}なことなどを、年にしては割合に細々と話した。

「それあ好い家には、好い家なんだけれど、何うしても私の氣風に適はないんだと思ふわ。でも兄さんの知つた家だから、出るわけに行かないでせう。ほんとに困つてしまふのよ。」

「屋敷勤めが辛いんだね。」

葛代は寂しい微笑を浮べた。

「ちやお金になるところを、一つ周旋しようか。」野田は咬るやうな口吻で言った。

葛代ははつとした。別にはつきり然う思つてゐる譯ではなかつた。たゞ美しく着飾つた東京の若い女の姿などに目移りのしてゐたのは事實であつた。それに自分の顔容が、人の心を惹着けるだけの愛らしさをもつてゐることも、反射的に意識されてゐた。拭掃除や飯のお給仕をして無漸々々日を送るのは詰らないと云ふ氣がしてゐた。勿論彼女は勉強さへすれば學校でもちよつと成績の好い方であつたので、東京へ來てからも、遂で女學生の姿などを見ると、惱ましい美望の情を禁じ得なかつた。しかし學校を止めてから、もう二年にもなるし、小石川の夫人型の先生に何か堅苦るしくて乾燥な、自分の現在の生活とは別に大した交渉もなささうな學課などを教はるために、今更役所のやうな校門を潜つて、堅い机や腰掛に坐る氣もしなかつた。彼女は田舎にゐた時でさへ、近所の若い男などを人知れず心に選んで、獨りで甘い懊惱に耽る年頃であつた。時としては、自分に好い感じをもつてゐるらしい二三の誰も彼もが、皆好いた人のやうにさへ、柔かい彼女の胸を咬つた。

野田なども戀しいとは思へなかつたが、懐かしいに違ひないのであつた。

六

葛代はこの男にでも相談したら何か好い方法があるかも知れないと、そんな漠然とした期待を寄せながら彼を尋ねたのであつたが、野田にも別に是と云ふ好い智慧もなかつた。

「ぢや、電話の交換手にでもなつたら……。」野田は自分に倚りかゝつて來た彼女の前途について、彼らしい意見を述べた。

「厭だわ、交換手なんか……。」葛代は目を曇らせた。

「まさか葛代さんに、カフェの女給を勧める譯にいかないからね、それになか／＼忙しいから。」
「カフェつて何ですか。忙しくて氣樂な處だつたら……。」

「氣樂は氣樂だらうが、數限らない男に接する商賣だから。その男のなかには、可怕しい色魔もあるからね。折角東京へ來て墮落しちや詰らない。」

「墮落なんかしやしないけれど……。」葛代は可怖々々ながら、多少心が動いた。

「それならば、僕懇意な友人にカフェ通があるから、紹介しても可いよ。」
「どこのカフェです。」

「何處といつて、今別に當がある譯ぢやないんだが、その友人に訊いたら何うかなるだらうと思ふ。
大學生だがね。」

「さう」 葛代は驚きの目を敬てた。

「とにかく今夜はお歸んなさい。そのうち僕の方から通知するから。」

そして彼は葛代の現在の居所をノートの端へ書留めた。

「それぢや濟みませんけれど」と葛代はいくらか心持が明るくなつた。そして切手代などを置いて別れようとした。野田は剩錢がないからと其を押返したが、終ひに取つておくことにした。其上財布が悉皆缺乏してゐたところなので、少しばかり葛代は借りられて了つた。葛代は彼を信用し切つてゐた。

その晩小石川へ歸つたのは、十一時頃であつた、葛代は菓子を一袋土産に買つて歸つて、女中達の前へ出した。勿論彼女は誰にも可愛がられてゐたと同時に、美まれてゐた。そんな點では彼女も

可也幸福も誇も感じてゐたのではあつた。

葛代は毎日々々野田から通知の來るのを待つてゐた。もう主人夫婦も避寒旅行から歸つて毎時のやうに會社へも通へば、歸つて晩酌もやつた。

或日の午後、野田のところから郵便が來た。しかし其れが外の手紙と一つになつてゐたところで夫人の目に觸れた。勿論開封はされなかつたにしても、外出は許されなかつた。野田からは、好い口があるから、翌日の晩方來てみないかと言つて來たので、葛代は姉の家へ行きたいからと言つて、外出を願つたけれど駄目であつた。

「お前の兄さんから頼まれてゐるんですから、兄さんに訊いてみて好いと言つたら遣つて上げますよ。」物堅い夫人はさう言つて翌朝早速會社へ電話をかけた。そして其の結果葛代の品行が疑はれることになつた。葛代は主人に叱言を喰ふと同時に、夫人の監視から脱れることができなかつた。葛代はこの人達に何うしてそんな責任若しくは權利があるだらうと、不思議でならなかつたが、わざと落着いてゐた。

幾日か經つた或日の晩方、葛代が戸締るために二階へ上つて縁側へ出てゐると、そこから見下

二〇
される舞の外の往來の方で、口笛の音がふと耳についた。そして何気なく目をやると向側の煉瓦舞に寄り添つて野田が手招きしてゐるのに気がついた。葛代は戸締をすると密と隙を見て門の外へ行つた。そして野田と暫く立話をしてゐた。

七

葛代は小石川の家を出てから、一月ほど監視されてゐた姉の家にも居辛くなつて、到頭姉とも喧嘩して暫らく野田の宿に引かゝつてゐた。その頃には野田も文房其屋の二階を引拂つて、一人の友達と一緒に、高田の奥の方に、小さい家を一軒借りて、自炊生活をしてゐた。もう櫻の盛りであつた。明るい春の光のなかに、彼女はじつとしてゐられないやうな懊惱を感じつゝ、野田達の爲に何時か喰べものゝ世話などを餘儀なくされてゐた。そしてそれが體の自由を悦ぶ彼女に取つて結局幸ひであつた。姉の前は看護婦になると言つて出たのであつた。その時の思ひつきで、そんな氣持もあつたには違ひなかつた。それに彼女は野田とのなかを疑つてゐる姉に、別に辨解する必要をも感じなかつた。さう思はれてゐることを苦痛だとも恥だとも思はなかつた。勿論野田に戀をしてゐた

譯でもなかつた。たゞ氣易くしてゐられるのが好きであつた。一人の男は早稲田へ通つてゐたが、野田は神田の方へ行つてゐた。葛代は共同的に彼等の爲に飯をたいたり、味噌をすつたりしたが、彼等も葛代のために彼女の好きな果物や菓子や、外から買つて歸つたりした。時とすると、彼等は一緒に散歩に出かけたり、活動館へ入つたりした。

「何んなに好い處だらうと思つて來たら、ほんとうに東京といふ處は爲様のない處ね。私東京へ來て碌々おいしいお肴なぞ食べたことがない。」葛代はさう言つて場末の肴屋から皮包の切身を買つて來たりしたが、近所の鮓屋から鮓など取つて、夜分なぞよく三人で食べた。葛代は買喰をするのに金を惜しまなかつた。口腹の慾を充すのが、今のところ彼女に取つては此の上もない幸福であつた。

するうち田圃に蛙の聲を聞く頃になつた。慌忙しい晩春の氣分が時々憂鬱な彼女の氣分を咬り立てた。それに姉にあづけさせられた給銀の幾分を小遣ひとして持つてゐた少し許りの金も費つて了つたし、誰のためともなく、田舎から持つて來た羽織や帯のやうな物も、野田がどこかへもつて行つて、金に替へて來なければならなかつた事も度々であつた。

「國から爲替がくると、直き返すよ」野田は氣輕な調子でさう言つて、それを抱へて行つた。蔦代は行李の中が次ぎ／＼に寂しくなつて行くのを心細く思ひながらも、それを出してやつた。そしてそんな事が又不思議に淡い愛着を、野田に對して彼女は感ずるのであつた。野田は初め紹介すると言つてゐた大學生のことを吠にも出さなかつた。

「野田さん嘔吐きだから、私嫌ひよ。私を世話すると云ふ大學生の人は何うしたの。」極打解けたときに、蔦代は言出した。

野田はにや／＼笑つてゐた。

「何時でも連れて行くよ。話はしてあるんだ。」彼は言ひ／＼したが蔦代を彼に紹介することを不安に感じてゐるらしかつた。

それに夜分神田から歸つてくると、蔦代が一方の男の部屋に入つて話込んでゐたりなどするのを見て、野田が不快に感ずるらしい様子などが近頃彼女の心に反感を抱かせた。野田は好きであつても全部彼の所有になることは、誰にでも同じ好惡をもたないではゐられない蔦代の心を、可也窮屈なものにした。心安立で氣輕で、どこかづるい處のあるやうな野田も好きであつたが、何かに口の

重い素朴な一方の男も嫌ひではなかつた。

放肆な蔦代のゐることは、自分たちの生活に取つて何かに不利益なことが段々野田にも解つて來た。

八

久振で蔦代は野田と連立つて、初夏らしい懐かしさのする或暮れ方に町の方へ出て行つた。姉に逢ふのを怖れて、彼女は月光を厭ふ物のやうに、明るい感じのする神樂坂の方へも餘り出たことがなかつた。二人は江戸川で電車に乗つた。川縁の柳が大分青くなつてゐた。

本郷の或賑やかな十字街で電車をおりたが、縁日があるときみえて狭い人道の傍に、植木や何か出てゐた。爽かな夜の空氣に生氣づいたやうな人が群つてゐた。カンテラの油煙を立て、金魚屋が桶を並べてゐたりするのを、蔦代は物珍らしさうに眺めた。

醫科にゐると云ふその學生の下宿は、暗い裏通にあつたが、親しいなかだと見えて、女中に在否を確かめると野田は蔦代に合圖をしてづか／＼と上つて行つた。新田と云ふ醫學生は手摺のあたりに

青柳の枯葉の伸びた二階の部屋にゐたが、毛をちよつと長くした色の淺黒い、目の美しい、愛らしい口つきの男であつた。今御飯がすんだところだと見えて、溜塗のお膳が傍にあつて、洋食の殘骸などもあつた。

「君のことは野田から聞いてゐましたが、何んな處がいゝんですか。カフェがいゝんですか。」などと新田は口入屋のやうな口を利いたが、沈んだやうな優しい聲であつた。

葛代はこの男を一目見たときから、悉皆羞恥の心に封されてしまつて、硬くなつてゐた。

新田はそれから野田と低聲で何か話してゐたが、その意味は葛代にはよく解らなかつた。

「……あすも暫く行かんが、聞いて見よう。」新田はそんなことを言つてゐた。

「明日来てくれない。さうすれば僕訊いといて上げるから。」新田は葛代に言つたが、少し暗い表情をして、「何なら今夜一緒に行つても可いが、何うしますか？」

葛代にはその意味がよく解せなかつたが、そこは何でも此の界限にある洋食屋であるらしかつた。それで又來るのも大變だから、今夜のうちに聞いてみようと言ふことで、野田は學校があるので、葛代を新田に托しておいて歸つて行つた。葛代は何だか不安を感じたが新田と二人限になつたこと

を反つて好い僥倖のやうに思つた。今迄頼つてゐた野田が價值のないものに思はれた。

起居や口の利き方のぞんざいな女が來て、お膳を下げて行く頃には、新田はその洋食屋を當つてくると言つて、獨りで出て行つたが、残された葛代は、立つて縁側から暗い往來を眺めたり、本箱の上にある寫眞掛の寫眞を覗いたりした。若いハイカラ姿の女の寫眞であつたが、花なぞもつてゐる様子が、葛代には厭味に思はれた。

「誰の寫眞だらう！」葛代は自然に顔の熱して來るのを感じた。嫉妬の情が、どき／＼する胸に燃えてゐた。

新田は容易に歸らなかつた。葛代はしびれを切らして、待遠しい時間を、幾度となく手摺のところへ出て外を見た。

すると、十時を大分過ぎた頃に彼は漸と歸つて來た。

「一人で寂しかつた？」などと、彼は思ひ遣のある言葉をかけたが、酒に酔つてゐるらしかつた。

彼は「やれ／＼」といふやうに、机の前に坐つて聞いてみたけれど、今は一杯だから駄目だと言ふのであつた。

「外にも一寸心當りがない事もないが……何うします、今夜これから歸りまナカかす。」新田は訊いた。

九

新田は葛代が困惑の色を浮べて忸怩もくしてゐるのを氣の毒さうに、野田との關係などをそれとなく訊いてみたりした。葛代は野田と一緒にゐると、着物が無くされるから困るといふ意味を洩らした。

「ちや僕も淋しいんだから、君をこゝにおいてあげても可いけれど……僕この頃細君を無くして困つてゐるんです。」そして新田は思ひついたやうに本箱の上の寫真に目を遣りながら、「君はこの寫真を見た」と訊いた。

葛代は彼と目を見合せて紅い顔をしてゐた。

「好い女でせう。」新田はまた訊いた。

「え」と、葛代は低聲に應へた。

「僕この女と一年ばかり同棲してゐただけれど、事情があつてつい此頃別れてしまつた。」

そして彼はその女との戀愛關係について葛代に話した。その話では彼の女は先刻新田が訪ねていつたレストオランの女給仕であつたが、そのスタアと言はれて、本郷界隈ほんきょうの多くの學生達を惹ひつけてゐた。彼女は内氣でお上品で氣位が高かつたので、多くの讚美者のうちには、指環をくれたり、反物を贈つたりして、その歡心を買はうとしたものもあつたが、それ等には心が動かないでいつか自分との間に結婚の約束が成立つて、去年の今頃二人で世帯をもつことになつたが、新田の方では親から學資を減らされるし、女の方では又或華族の門番をしてゐる父が、後妻とぐるになつて彼女を喰ものにしやうとしてゐたので、到頭或金持の年寄の妾にやられることになつてしまつた。彼は今その居所さへ知ることが出来なかつた。

新田はまだ酔の残つてゐる目を輝かしながら、そんな話をして嘆息した。

「それで失戀の煩悶のために僕は、試験の準備もできないと云ふ始末で、甚い神經衰弱に罹つてゐるんです。」

葛代はひどく感傷的な氣分を誘發された。そしてその女のことを色々に想像してゐた。

「ところが君の體つきが、ちよいと僕のラブに似てゐるんだ。だから君に好い着ものをきせてもつ

とハイカラに作ったなら、きつと其女になるだらうと思ふんだよ。さつき野田と一緒に入つて来たとき、僕は何だか不思議なやうな気がしてならなかつたんだ。」

葛代は一層紅くなつた。

「君自身にはさう思はない？」

葛代は寂しい微笑を浮べてゐた。

「一年も一緒にゐたラブと別れるなんて、誰にしたつて随分辛いことに違ひないんだからね。君にはそんな経験はないんだらうと思ふけれど……でも今までに異性を慕つたことが一度くらゐはあるだらうね。」新田はさう言つて熱情的な目で葛代を凝視めた。

葛代は惱ましげに、其の視線を避けて、俛いてゐたが、胸がわく／＼してゐた。

新田は夜の更けるのにも気がつかない風で、熱情的な語調で、その女との甘い戀の追憶に耽つたり、彼友の境遇の不幸なことを悲しんだりしてゐたが、葛代は何だか胸が一杯になつて、我知らず眼を潤ほせてゐた。

「君が若し僕に同情してくれるならカフェなんか行かないで、僕と一緒にゐてくれないか？ 僕は

君をそんなところへ遣りたくはないんだ。僕ほんとうに淋しいんだから。」

葛代の惑亂した頭腦にはその意味がはつきり解らなかつたが、それと同時に新田の手が自分の手に觸れるかと思ふと、その瞬間熱した頬のあたりで、彼の熱い息さしを感じた。葛代は我しらず顔を背向けた。體の硬くなるのを覺えた。

陥 穿

三〇

直に葛代は下町の或家へやられた。それは河岸に近い通りから裏へ入った細い横町で、料理屋だの意気な格子造の家などの多い一區劃であつたが、何よりも裁縫を教はつておく必要があるからと云ふ新田の注意で、新田の處へ来る或女につれられて、行くことになつたのであつた。

葛代はそれまで一週間ばかり、野田のところへ歸へることもできずに、新田の下宿にゐたのであつた。恐ろしい最初の夜、彼女は時計が三時を打つ頃までも、遺潮のない哀しい思ひに耽りながら、蒲團のうへに坐つてゐた。新田の言ふことに偽りのないことは確かだと思はれたが、彼の行爲は憎まずにはゐられなかつた。スキツチが捻り返された時には、彼女は袂を顔に當て、突伏してゐた。そして其れから間もなく彼は深い眠に陥ちてしまつた。葛代は反感に潤んだ目で、相恰の變つたその寝顔を眺めた。彼は暑さうに蒲團を弾退けて、死んだやうになつてゐた。するうちに彼女も亦そこに突伏てうとくしたのであつたが、朝目がさめてみると、今まで経験したこともなかつた不思議

議な或飽滿と愛執が、悪夢から覺めたやうな彼女の心を、うつとり包んでゐた。

午前のうち、葛代は目眩しい日を厭ふやうに障子を締切つてゐたが、新田の歸りが待ちに待たれた。夕方になると、新田は彼女を誘つて散歩に出かけたが、彼が何喰はぬ顔をして、新しい麥稈を冠りながら、明いところを歩いてゐるのが葛代には可笑かつた。そんな優しい言葉をかけられたことのない葛代は、誰もやつぱり然うなのだらうかと思ふと、往來の人の一つ一つの顔にも、何時にない興味を感じた。

さうした毎日が續いた果に、葛代は悲しい思ひで彼と別れたのであつた。

その家は比較的小綺麗に暮してゐた。往來寄りの部屋に裁ち板などがおいてあつて、そこに女中ともつかず娘ともつかぬ二十一二の日本髪の女が、何うかすると仕事を擴げてゐたが、それは自分のものでらしい單衣物であつた。上り口の茶の間に上さんは坐り込んでゐたが、天井の低い二階に、葛代は荷物を置くことになつた。そこには狭い縁側に鏡臺などがおかれてあつた。

葛代は三つばかりの、孱弱さうな女の子を托けられて、遊ばせてやらなければならなかつた。玩具や食物に飽いてくると、負つて外へも連出した。

三一

日数がたつと、自分の朋輩だと知れた例の女は、時々お化粧をして、着物を着かへて出て行った。勿論それは来た晩から然うであつたが、お座敷だと云ふところから想像すると、藝者に違ひないと思はれた。

四五日たつた或雨のふる晩に、葛代はおしづと言はれる其女と、二階で枕を並べてゐるとき、ふと思ひもかけない暗示を與へられた。それは下の主人が何處へ行つてゐるかと思ふ疑問であつたがおしづは明白とは言はなかつた。

「あんた何にも知らないで来たの。随分暢氣ね。」おしづは冷笑つてゐた。

「ちや貴女は何うして此處へ来たの。」葛代は訊いた。

「私良人があつただけけれど、病氣で田舎へ歸つてしまつたのだから、爲方なしにこんな處へ来たんだけど、此頃田舎へ来いつて二度も三度も手紙が来るから、何うしようかと思つて……」そしておしづは溜息を吐いた。

三

聽て葛代が自分の運命に心づく時が来た。が、其時はもう遅かつた。信州の伊那産まれだとか云ふ上さんは、或る日廻つて来た反物屋から葛代に似合ひさうな明石の單衣だの、緞の帯だの、長襦袢だの然う言つたものを見立て、可也の金高の品物を、彼女のために買った。

「まあ、そんなものを……」葛代は何うだらうねと、單衣地を取あげて上さんが言ふので、紅くなつてしまつた。格別上等の品ではないやうだつたが、瀧縞のやうな其の柄が、彼女の心を唆らせた。

「若し氣に入つたら買つとき。お金は今でなくとも可いんですよ。」お上は事もなげに言ふのであつた。

葛代はこれを仕立て着るときのことを想像せずにはゐられなかつた。新田に見せたいやうな嫂嬢とした自分の姿が目描かれた。そんなやうな衣裳を着てゐる路上の若い令嬢の姿も浮んで来た。

「まあ心配しず私に委してお置き。若い時は二度とありやしないんだよ。私のやうなお婆さんになつてごらん、こんな派手なものを着ようたつて着られやしないんだがら。」お上は言つた。

そしてそんな順序で、葛代が吃驚するほどの金嵩のものが、そこに除けられた。

體の脂ぎつたやうな、角刈の若い反物屋は、巧くそれに調子を合してゐた。

三四

「ほんとに御様子が好くて入らつしやいますから、着物が引立ちます。何と言つても、御婦人はお作りですな。」彼は言つた。

葛代は困惑を感じながらも、それを断ることは矢張淋しかつた。まさかの時には、そつくり置いて行けば、それでも済むことだと自分を緩和する氣になつた。

それらの衣類が仕立てあがつて來たのは、間もなくであつた。襟袷は上さんよりも、寧ろおしづに急所を教はつたり、手傳つたりしてもらつて、左に右家で仕立てあげた。上さんがきつと似合ふから着てごらんと云ふので、葛代は御主人から何か大した頂戴ものでもしたやうに、「どうも濟みません」と、そこへ手を突いてお辭儀をしてから、彼女の目の前でそれ等の衣裳をつけてみた。肌觸りが頼りのないほど柔軟であつたが、何だか移りさうもないやうな負目を感じた。田舎で垢じみた木綿ものばかり着つけてゐた體には、餘りにけばくしすぎるやうな氣がした。

下締めをするときに上さんは背後へまはつて衿を直したり、裾を揃へたりした。そして背中のところ折皺を寄せて、それから帯をしめさせた。

「折角の着物も着こなし方で、一向引立たないものですからね。帯をさうくしや／＼にしちや駄目ぢやないか。」たゞでさへ目の少し釣あげた上さんは、眉根に皺をよせて、疍聲で言つた。總て葛代の流儀とちがつてゐた。どこが違つてゐるのか、分明とは解らなかつたが、何だか勝手がわからなかつた。

とにかく葛代は自分にも見違へるほど美しい姿になつた。

「馬士にも衣裳つてよく言つたもんだ。何のくらゐお品がよくなつたか知れやしない。」上さんは誰のお蔭だか、考へてごらんといふ風であつた。

不思議な愛着を、葛代はそれらの美しい衣裳に對して感じた。

「なくしさへしたければ、お嫁入の支度にもなるんだからね。堅氣の奉公なんかしてゐたんぢや十年たつたつて、そんな物は出來つこないんだよ。」

着物をたゞんでゐる葛代のしなやかな手容を眺めながら、上さんはさう言つて横になつて、乳房を子供にいちらせてゐた。葛代はその意味を深く考へようとしなかつた。

三五

すると其晩方、葛代がおしづと一緒に近所の洗湯せんたうから歸りがけに氷水などを飲んで来て、二階へあがつて汗ばんだ體に風を入れてゐると、成るだけ若い人と言つて所謂お座敷がかゝつて來た。上さんは二階の上り口へ顔を出して、それを取次ぎでもするやうな調子で、「誰か一人行つておくれ」と言つて目で自分の命令を葛代に傳へた。葛代は豫期してゐたことではあつたが、其事について眞實に深く考へて見たことはなかつた。不安と恐怖は感じながらも小遣などが自由につかへて、上さんから大切に取扱はれてゐるおしづの現在の幸福を思ふと、自分だけが除けものにされるのは不快であつた。それにそんな好奇心は彼女にも十分あつたには違ひないのであつたが、それと同じに新田の言葉も思ひ出さずにはゐられなかつた。きつと叱られるだらうと云ふ氣がした。葛代は紅い顔に困惑の色を浮べておしづと顔を見合してゐた。

「私他にお約束があるんだから、貴女行つてちやうだいね。」おしづは言つた。
葛代は寂しい微笑を浮べてゐた。

「さあ早くした方がいゝよ。何も思案することないぢやないか。お座敷へ出てお酒の酌をするくらい何でもないぢやないか。」上さんは促した。

葛代はやつぱり笑つてゐた。

「さあ何うするんです。」上さんは少し聲を尖らせて、「世話をやかせちや困るぢやないか、お蔭ぢやなつて、十四や五の子供ぢやあるまいし、書生さんと一緒にゐたくらゐなんだから、さう極りのゐるいこともない筈だよ。東京にはこの商賣をして、それで學校へ出てゐる女學生もあるんだし、お嫁入の支度をこしらへて立派な人の奥さんになつてゐる人だつてあるんだよ。それ些とは肩身も狭いか知れないけれど、二年も三年もやつてゐれば知らず、ほんの一時のことなら誰にも知れる氣遣ひはないんだよ。」

とにかく葛代は顔を作つて、着物を着替へさせられた。そして暗闇を目をつぶつて歩くやうな氣持で出て行つた。

よく自分に目をつけてゐた年取つた女中が彼女を迎へた。上方訛のある口の利き方で、神戸や大阪を渡りあるいた女だと云ふことは、葛代もおしづから聞いて知つてゐたが、上さんらしい顔の蒼

い、目の細い四十ばかりの瘦せた女も奥にゐた。それはちよつと氣味の悪いやうな陰氣な顔であつたが、でも氣分は陽氣で、大酒喰ひだといふことも、蔦代がそれを皮切にしてその後度々最眞にして呼ばれてゐるうちに解つて來た。それに主人も、そんな處の旦那とは思はれない、口髯など生した立派な男であつた。そして其が上さんに愛せられて、そこに坐ることになつたのだといふことも後で知れた。彼は恐らく辯護士の免狀を取そこねた法律家か、刑事のやうな種顔の人間であつたのだらうと想像されたが、誰も深いことは知らなかつた。

客は洋服著の三人連であつた。そして外に女一人、蔦代の目にもをかしいと思はれるほど、こつてりした毒々しい舊式な身装をして、俛きがちに坐りこんでゐた。客の種類が何であるかは、勿論蔦代にわかる氣遣ひもなかつた。そして顔を見ることもできないで、言はれるまゝにビールの壘を取あげて、彼等について廻つたのであつた。

「お嬢さんといふのは、君のことだね。成ほどこれはお嬢さんだ」誰かと言つてゐたやうであつた。「これあ素敵だ。堀出物だ。」そんな聲も耳に入つたやうであつた。

蔦代は何うかすると、酒の席が厭になつて、部屋を出て下へおりて來たが、新田のことが物悲し

く想ひ出された。

四

惱しい一月ほどの日がたつた。蔦代は色々の客のためにお酌などをさせられる度に、何時も新田のことが思出せてならなかつた。心が絶えず其の空へ飛んだ。で、或日の晩方隙を見つけて破女は浴衣がけで河岸の方から電車に乗つた。もうお盆時分だつたので、お中元など持つてゐる人もあつて、電車のなかは何となくさわ／＼してゐた。それにもう羅を着てゐる人などもあつて如何にも夏らしい感じのするのが、暫く閉ぢ籠つてゐた蔦代には氣持ちがよかつたが、それも今の特殊の境界にある自分の負目を反つて鮮明させるに過ぎなかつた。勿論あの上さんの人の悪いことは十分解つてゐても、それはそれとして其の好意を認めてゐたとほりに、自分の行爲についても同じやうな是認をもつてゐた。

三丁目で電車をおりると、あの暫くのあひだに新田と一緒に時々散歩して、すっかりお馴染になつてしまつた其の邊の店屋の有様などが、懐かしく眺められた。新田と一緒にゐるあひだ彼からは

別にこれと云ふものも買つてもらへなかつたが、たゞ一緒に食べたアイスクリームやブツデングの甘かつたことは忘れなかつた。そんな高貴なものを彼女は今迄口にすることはなかつた。その快い美味さが今でも舌のうへに残つてゐるやうであつた。

下宿では折ふし取次いでくれるものもゐなかつたので、葛代は何となく疎々しい氣持のするのを強ひて上つて行つたが、何だか話聲がするので、入口の脇の方へ身を寄せて、「新田さん？」とおづおづ聲をかけてみた。

話聲がぱつたり止んだ。そこで葛代は「私よ」と言つて、ひよいと顔を出した。

そんな豫感もちよつとないではなかつたが、まさかと思つて部屋の中を見ると、そこには新田と差向ひに、女學生風の女が、膝のうへに婦人雑誌のやうなものを擴げながら、脚を崩して坐つてゐるのが目についた。

「おやー」と思つて、葛代はその瞬間狼狽氣味で一步後へ身を退いたと同時に、印度人のやうな新田の目が彼女の姿を見たやうであつた。

葛代は胸が一時に波立つて來た。室内の女の横顔が、寫眞で想像してゐたほど、それ程美しくは

なかつたにしても、面影は確にそれであつた。そして刹那の印象で、それに氣がつくと、劇しい絶望と、嫉妬との交錯かつた遺る瀨ない悲しさが、一時に胸に込あげて來て何うにも支へることができなかつた。そして「何うしたの。入つてもいゝんだよ！」とか何とか云つた新田の聲が耳に入ると、急に切なくなつて、そこに泣き倒れてしまつたのであつた。

室内の女は吃驚した表情で、それを見てゐた。

「何うしたんだい葛代さん！」新田は平氣らしい調子で、「何か悲しいことでもあつたのかい」と訊いた。

葛代はさすがに聲は立てなかつたけれど、やつぱり泣いてゐた。

「何も泣くことなんかないぢやないか。君のゐる家が居辛いとでも言ふのかい」。新田はまだ宥めるやうに訊いた。

「何うなすつたの。」女は極りわるさうに、誰に訊くともなし言つてゐた。

「なに、この人は野田に紹介されて××軒へ住込みたい希望で僕のところへ來ただけけれど、満員だつたから、僕のちよいと知つた女の周旋で他に口を見つけて行つたのさ。」

そして彼は更に葛代に向つて、

「今晚はね、僕ちよつと差聞へがあるんだけれど——君そのうち又来るわけに行かない？」と優しく白々しく訊いた。

五

「入つてもいゝんだよ」など言つておきながら、やつぱり自分を邪魔にしてゐるんだと思ふと、葛代は餘り酷いと思つて悲しいよりも憤然としたが、悉皆新田を自分の所有にした顔をして、澄してゐるらしい女の態度を見ると、やつぱり蹴落されるやうな気がして怨を言ふことも出来なかつた。やがて彼女は辛うじて、幾分感情の激動を壓へることができた。そして「新田さん、貴方はこの間の言葉を忘れたのですか」と言ふ風に彼を見たが、新田がいら／＼しさうに、たゞ俛いてゐるので、取手端もなかつた。で、葛代は屈辱に堪へないと云ふ風で、つと身を起すと、そのまゝ段梯子の方へ行かうとしたが、足が鉛のやうに重かつた。

すると新田が部屋を出て、追従つて来て、彼女の肩へ手をかけながら、「君歸る？」と私語いた。

葛代はまた袂を顔に當て體をわな／＼かせた。

「眞實に濟まないけれど、そのうち又逢はう。君慍つた？」新田はまた宥めた。

葛代は何だか、胸が柱のやうに硬張つてくるのを感じた。これが野田なら「嘔吐き！」だとか、「私を嘔したんです」とか「覚えてらつしやい」とか言ひたいだけのことは言へるのであつたが、新田の前には何となく気がおけて、何にも言へなかつた。しかし彼女はもう泣かなかつた。あの女のことを知りたくてならなかつた。

「ぢや、私いつ來たらいゝんですの？」

「さう、何時つて分明日をきる譯にいかないが……僕の方から通知しよう、君忙しいんだらう。」新田は優しい言葉をかけた。

「いゝえ、だけれど彼處は随分ひどい家なのよ。」

「ひどいつて何う云ふ風なんだい。」

「わたし其事も貴方に相談しようと思つて、今晚漸と脱出して來たんですけれど……。」葛代はさう言つて、じつと新田の顔を見あげながら、「貴方随分ひどいわ。あの方始終來てゐるんだわ。」

「僕！ いや然ういふわけぢやないんだよ。あれは今夜初めて訪ねて来たんだが、君がゐちや少し都合のわるいことがあるから、今夜はまあ歸つてくれたまへ。近いうち僕の方で機會を作らう。」

「眞實なの」

「眞實だとも」と、新田は暗い表情をしたが、「しかし君あの家氣に入らない？」

「え……、それあお上さんは親切ですけれど……貴方知らないですか。」

「僕は先方のことは何にも知らないよ。君が着物をほしがるから、若し然ういふやうな處があるならと思つて、あの女に周旋を頼んだんだ。」

「それは著物はできるけれど……」そして葛代は窘澁の色を浮べながら、酒客の前へなぞ出ることになつた事情を話した。

「ちや、君はさう云ふことをやつてるんだね、合意的に！」新田は少し驚いた表情で反問した。

「でも、爲方がなかつたんですもの。」葛代はおどく應へた。

「合意上なら、それあ爲方がないがね、僕はその事について責任をもつことは出来ない。君自身の判断に委すより外ない。」新田は較尖がつた聲で言つて、「とにかく今夜は歸りたまへ。」

葛代はまた悲しくなつた。

「ちや僕の言ふことは判つたね。」

「え……ですけれど……。」葛代はまだ言ひたいことが澤山あつたけれど、新田が案外にも機嫌を損じたらしいので、長いことは話もできなかつた。

葛代はすこ／＼そこを出たが、新田の氣持を解しかねて、心が暗かつた。

六

逐攘はれんばかりにして、葛代は下宿を出たが、何う考へてみても新田の言つたことが腑におちなかつた。ほんとうに自分を愛してゐてくれるやうにも思はれたが、逆も自分などが割込むことの出来ない親密な關係が、あの女とのなかに今でも續いてゐて、自分の事などはさう深く思つてくれでゐる譯ではないのだと云ふ氣も頻りにした。

「新田さんは眞實に好い人なただけれど……」と、葛代は思つても見たが、やつぱり口惜しかつた。何故あの時、思ふ存分言つてやることができなかつたか。あれ程逢ひたくて／＼爲方のなかつた新

田に逢ひながら、其の思ひも傳へることが出来なくて、悄々あすこを出てしまつたのか。さう思ふと、重い足が自然に止つて前へ進まなかつた。宵の町は静かで懶かつた。下宿の多いその一區劃も今は學生たちがゐないので、何處も閑寂してゐた。葛代は狭いその町を少し歩いては、また後戻りした。あの女がいつまで新田の部屋に居るだらうかと、それが氣にかゝつた。新田があつた女と何んな風に話をしてゐるかど心配でたまらなかつた。自分に話しかけたよりも以上に、甘い優しい言葉をかけてゐるに違ひないと思はれた。自分との約束を、あの女に知られては都合がわるいのに違ひないのだと思つた。自分が今少しちゃんとした身装をして、口も立派に利ける年頃の女だつたら、あの時あんな風に泣伏してなぞゐないで、あの女の面前で何もかも浚け出してやつたものを、それが出来なかつたのは、やつぱり自分が弱いからだと思はれた。勿論そこに氣がつかなかつた譯ではなかつたが、然うしたら、新田との關係も此限になつて、永久に逢ふ機會が失はれてしまふだらうと云ふ氣がした。

とにかくあの女がいつまで居るかを見届けなければ逆も此儘歸られないやうな氣がしたので、葛代はまた後へ戻つて、下宿のちよつと手前にある質屋の黒い板塀の蔭に身を寄せて、二階の様子を

伺つてゐた。勿論新田の部屋は塀ごしに往來へ臨んでゐたので、この頃ではもう悉皆濃密な青い桐の枝葉の繁つた其の廊下の手摺を見上げることができるのであつたが、薄暗い電燈の光の漾つた室内の様子などは、少しも判らなかつた。葛代はしばらく息のつまるやうな熱心さで、こちらから上を眺めてゐたが、終ひに悟かしくなつて、足が自然に前へ出ていつた。涼しい浮づいたやうな女の話聲が、やがて下まで洩れて來た。そして其がアルトなら、それと同時に聞々に聞える新田の聲はテノルと云ふ風に、睦しげな話聲が交錯して、葛代の耳に堪へがたい美望と嫉妬とを喰つた。新田をも憎いと思つたが、女に對する憎悪は一層はげしかつた。

「人の氣も知らないで、ほんとうに口惜しい。」葛代は思つた。戀と嫉妬の惱みを、今はじめて経験したのだと云ふ氣がした。

すると其時豆のはじけるやうな女の笑ひ聲が、静かな夜の空氣をふと揺すつて、四下に反響して來たと思ふと、女は座を立つて、手摺ぎわへ姿を現はして來たので、葛代は泡を喰つて急いで片蔭へ身を潜めた。

どこかの時計が懶い音を立て、九時をうつた。葛代は別にもや／＼する胸が和いだわけではなか

つたけれど、何といふことなし涙も乾いて、今夜は諦めて歸るより外はないと云ふ氣になつてゐた。
で爲方なしそろ／＼其處を離れて、賑やかな通りの方へ出て來た

家へ歸ると、上さんは下で子供と一緒に寝てゐたが、おしづはお座敷だとみえて、何處にも姿が
みえなかつた。葛代は寂しい二階へあがつて、暫くぼんやりしてゐたが、誰か好きな人からお座敷
がかゝつてくれば可いと心に念じた。

七

葛代は今、悄然歸つて來て、「お上さん只今。遅くなつて済みません」と下で挨拶したときに、留
守中に二軒も三軒もから口のかゝつて來たことを不足さうに上さんから話されたのであつたが、新
田のために劇しい凌辱を感じさせられてゐた彼女の空虚な心には、さう云ふ風に、田舎丸出しの自
分などを呼んでくれる客のあるのが、何となく有難いやうな氣がするのであつた。それはおしづも
相當に口がかゝつて來るには違ひなかつたが、まだ碌々笑談口一つ利くこともできなければ、酒の對
手などにも一向氣がきかず、帯をしめるのにも、顔を作るのにも、まだ都會の女らしい修練のない自

分などが、單に幼だとか若いとかいふ點で、不思議に方々から口のかゝつて來るのが慘めな生立を
もつてゐる彼女としては、此上ない感謝であつた。殊に今夜はその感じが深かつた。勿論それは女
に饑えた男の汚い要求であり、好奇心であるとは思はれたが、それにしても其等の男は、みな相當
に身分のある中流階級の人達で、普通では狎々しい口一つ利くことも出來ないやうな紳士達であ
つた。

葛代は上さんから、口のかゝつてゐた家の名前を聞くと、大抵今夜自分を呼んでくれた客の判断
がつくやうであつた。その中には一寸好いたらしいと思ふ様子の好い會社員などもあつたし、異邦
人もあつて、それを外したことが何となく残念に思はれた、異邦人と言つたところで、それは矢張
同じ黄色人種の仲間で、不自由ながらに日常の用事に事缺けないだけの日本語を操ることくらゐは
知つてゐた。それに此の異國人は、金の點で日本人より優れてゐたのみならず、東京語を自由に使
ふことができなくてまだ國訛のとれない葛代に取つては、東京の色々の女や、都會生活に通じてゐ
ると思はれる人達よりも、何かに氣がおけなくて何のくらゐ氣樂だか知れなかつた。おしづなどに
言はせると、心持や何かの違つたそんな異國人に接するのは、金づくではできない厭なことなのだ

さうだが、蔦代には格別さうは感じられなかつた。

五〇

「わたし支那人の方が正直で親切で可いわ。それあ楊さんなんか、それこそ眞實に親切なのよ。」蔦代は或晩おしづと客の噂をしたときに、そんな事を平氣で口にしたくらゐであつた。それは彼女の正直な告白であつた。衆が何うして支那の學生を嫌ふだらうと、不思議でならない位であつた。

おしづの歸つたのは十一時頃であつたが、それまでに蔦代も新しい口がかゝつて、ちよつと座敷へ出て來たのであつた。客は日本橋あたりの問屋筋の若い衆らしかつたが、商人は何となく好かなかつた。

蔦代はおしづと二階で顔を合したところで、何によらず祕密にしておくことのできない性分として、今夜新田のところの女の來てゐたことを口惜しさうに口へ出した。或醫學生と、こゝへ來るまでの一週間を下宿で暮した事だけは、いつかも話したのであつたが、二人の戀愛關係は、さすがに氣はづかしくて言へなかつた。

「ちや矢張その人と關係があつたのね。」おしづは言つた。

蔦代はそれについて、少し詳しく話した。

「あんたが瞞されたんだわよ。」おしづはまた言つた。「つまり貴女を幼とみて、翫弄にしたのさ。」

「え、わたしも然う思つてるわ。」蔦代は目を潤ませた。

「私ならその場で素破ぬいて散々脂を絞つてやるんだけど……。」

「でも、その人は好い人なのよ。」蔦代はそのことは口惜しいが、男を憎む氣にはやつぱりなれなかつた。

その晩蔦代はおしづの智慧をかりて新田に恨みたらぐの長い手紙を書いた。

八

蔦代は少し懐ろ都合の好くなつた時に、始終氣にかゝつてゐた質物の始末をしておかうと思つて或日鶴巻町に野田を訪ねた。それには野田に訊いてみたら、新田のことが判るだらうといふ氣もあつて、二度ばかり自分から出した手紙に對して新田が熟んだとも潰れたとも返辭をしてくれないのが癪に觸つてもゐたし、氣にかゝつてもゐた。瞞されたのなら瞞されたで存分怨を言つてやらなければ氣がすまなかつたが、自分に負目もあるので、獨りで打突かつて行くのも不安であつた。で、

五一

野田に逢つて訊いたら、何か様子が知れるだらうと思つた。

野田は友達が暑中休暇で田舎へ歸つてしまつたので、上り口の四疊と奥の六疊とを一人で占領して相變らず自炊生活をやつてゐるらしかつた。臺所や何かゞひどく荒れてゐた。

「葛代さんに行かれてしまつたんで、家がすつかり荒れてしまつたよ。」野田はさう言つて笑つてゐたが、遠からず家を仕舞ふだらうと思はれた。

「それで葛代さんはあれから何うしたの。」野田は軟かもものなど着て、滅切様子の好くなつた葛代の姿を眺めながら訊いた。

「野田さん随分ひどいわ。」葛代は顔を紅くして、袂から巻苜を出して、マッチで火を點け、煙を口へ啣みながら言つた。

「何うして？」と野田は不思議さうに訊いた。

「わたし新田さんの紹介で大變なところへ遣られてしまつたわ。」

「大變なところつて、何んなどかさ。」さう言ふ野田には格別悦けてゐるらしい様子もなかつた。

野田の話によると、彼は新田とさう深い間柄ではなかつた。學校も違ふし、郷里もまるで方角違

ひであつたが、或友人が病氣をしたとき、新田の厄介になつたことがあつて、自分も神経衰弱の藥などを彼から恵まれ、何かに便宜を得た關係から一ト頃彼の生活に觸れたのであつた。それが女給仕をしてゐたと云ふ經歷づきの美人と同棲してゐた前後のことだと云ふのであつた。

「あの人私に結婚しろと言つたのよ。」葛代は目を曇ませながら言つた。

「そして葛代さんが、それを承諾したのか。」

「あの方がほんとうに結婚してくれる心だと思つたから、私承諾したんですわ。」

「それぢや何うして、そんな處へ行つたんだ。客の座敷へ出されるやうな家へ。」

「お金になつて着物ができるさうだから、暫く行つてみたら可いだらうつて、新田さんが言ふから……私も白痴だつたんですけれど……それあ其れに違ひないんだから、新田さんを怨むところはな

いんですけれど、私あの人の方がわからないのよ。」

「まさか新田が君を瞞すつもりぢやなかつたらうがね。」野田も腑におちないと云ふ風であつた。

「おしづさんは……私の今居る家の友達なのよ。そのおしづさんが皆な共謀になつて、私をあんな處へ入れたと言ふんですけれど……私貴方を疑やしないわ。」

野田は困惑の色を浮べてゐたが、「ちや早くそこを脱ければいゝぢやないか。」

「え……」と、蔦代は口に含んだ葎の煙を吐きながら、「それも考へてゐるんですけど、でも着物ができるでせう。お美味しいものも食べられるから、お屋敷奉公なんかしてるより好いとも思ふの。」

野田はまじく彼女の顔を見たが、氣の毒さうに目を伏せた。

「姉さんは知つてゐるの。」

「あゝ姉さん！」と、蔦代は遽に暗い惱ましげな表情になりながら深い溜息をついた。

九

蔦代は野田に逢つたら、新田に關する自分の話を聴いてもらつて彼の判断を仰ぐと同時に、自分に同情もしてもらひ、事によつたら新田に談判もしてもらはうと思つたのであつたが、來てみると何だか拍子ぬけがしたやうで、一向詰らなかつた。それは野田といふ男が何事も面倒くさい問題を作らないやうな風に生れついてゐるからであつた。その癖蔦代が手もなく今の境界に陥ちて行つたことに就いては、可也頭腦を惱ましてゐるらしかつた。

「蔦代さん、姉さんが何といふか、一應意見を聴いてみたら何うだね。」

「それあ叱られるに決つてるぢやありませんか。それでなくてさへ随分口喧ましい人ですもの。」蔦代は寂しい微笑を浮べて、「そんなこと訊かれるもんですか。」

「判つたら何うする積りなんだ。」

「判つたら判つたときだわ。姉さんの御厄介にさへならなけあ、それで可いぢやないの。」蔦代は少し可怕的目をして見せた。

「けど蔦代さん、さう言ふもんぢやないんだよ。そんな事は決して好いことぢやないんだからね。僕は新田と關係したことなどは、必ずしも咎めようとは思はない。それだつて決して好い事とは思はないけれど、蔦代さんが新田を好いたんなら爲方がない。しかし蔦代さんの今爲てゐることは、それとは全然意味の異つた、愧づべきこと怖るべきこと、憎むべきことでさへあるんだからね。」

「でも、もう爲方がないぢやないの。」

「悪い事と氣がついたら、今からだつて遅くはない。早く足を洗つて、何處か堅氣の家へ住込んだ

方が可いよ。」

五六

「堅氣の家だつて、それあ随分厭なことがあつてよ。私小石川の家のこと話さなかつた？」

「けど、そんな家ばかりはないよ。」

「さう」 蔦代は不思議さうに彼を見た。そして目元に微笑をたゞへながら、少し紅くなつて、「でも私をあんなところへ入れたのは、新田さんでせう。新田さんの處へ連れて行つたのは貴方ぢやありませんか。」

「新田の意嚮はよく解らんが、新田だつてまさかそんな積りで、君をその女に紹介したんぢやあるまいと思ふね。」

「私もう何うでもいゝの。」 蔦代は持前の粘着づよさのあるどこか剛情らしい聲で言つて、「新田さんが私を彼處へやつたんだと思へば、腹も立つけれど諦めることも出来るのよ。私あの人ほんとうに憎らしいと思ふけれど、やつぱり好きなのよ。」

野田は憫れた顔をした。

それから蔦代は野田につれられて、辨天町の或質屋へ行つて、帯や羽織や袴などを三四點請出す

と、そこから俵を僦つて眞直に歸らうとしたが、やつぱり姉のことが氣にかゝつた。今まで居所も知らさずにあつたことが、何んなに彼女を怒らせ、心配させたか知れないと思ふと、その瞬間堪へがたい自責の念に苦しめられた。勿論田舎の家へは、ちよつと居所だけは知らしておいたのであつたが、同時に姉には内密にしておいてもらうやうに、堅く言つてやつたのであつた。

蔦代は然し、姉に逢ふことを然う怖れはしなかつた。そして少し許り子供への土産を買つてから其の方へ俵を向けさせた。もう九時過ぎであつた。

姉は妹の姿を見ると、「まあ、お化が來たよ。」と言つて、まじく其の顔を凝視めてゐた。

大變な變化が自分の身に生じてゐることを、蔦代は一層痛切に感じた。彼女は急に悲しくなつた。

十

「私もつと早くに來ようと思つたんですけれど……」と、蔦代は案外平氣らしい顔で、姉の顔をわざと眞向に見たが、姉はひどく不機嫌な表情で、肩にまつはる子供を煩さうに、世帯簍れのしたやうな、骨張つた硬い顔を背向けてゐた。

五七

葛代は氣味わるくもあつたが、かうした貧乏世帯のなかに埋れていつ白粉一つ着けたこともない彼女の寂しさを慇懃おぼんすにはゐられなかつた。なまじいお嫁になんぞ行つて世帯持になつたゞけに、一生面白い目を見ることもできないのだと思はれた。それに又一日家に閉籠つてゐて、何彼と氣忙しい思ひをしながら子供にかまけてゐる妻一人を、彼女の良人がそれ程に大事にしてゐるか何うかも疑問であつた。勿論義兄は品行方正だと思はれるが、外へ出れば何處で何をしてゐるか知れたものぢやないと思はれた。物質上に何不足のない小石川の屋敷の夫人にしたところで、その點では同じ事だと思はれた。自分のところへ肉を獵りに來る男のなかにさへ、坊ちゃんや嬢ちゃんが、もう好い加減な年になつてゐる人も鮮くはなかつた。姉なども、そんな事を聴いたら、慙うしてほんやりして家の番ばかりしてはゐられないだらうと云ふ氣がした。

姉が黙つてゐるので、葛代の方からまた口を利いた。

「今ゐる家は、それあ忙しいの。それに照ちやんと同じ年くらゐの坊ちゃんがあるんでせう。随分世話がやけるのよ。だから私來よう／＼と思ひながら、つひ／＼御無沙汰してしまつたんです。」
そして葛代は人形や毬を取出しながら、「松ちやん／＼、好いものを買つて來てよ。そうらね」と

目の前へ差出した。

「たとひ何處にゐるにしても、居所くらゐ知らしてくれなくちや困るぢやありませんか。」姉は少し氣が解けて來て、「一體どこに居るんです。」

「日本橋の方なんですけどもね。」葛代は紅くまくなつた。

「商家ですか。」

「さうでもないんですけども……私何する家かよく知らないの。」

「誰の世話で、そんな處へ行つたんです。」

葛代はその事について、汽車で一緒になつたことなど、野田について少しばかり好い加減な説明をした。

「それなら其で可いけれど……そんな書生さんの世話にならなくたつて……野田の順ちゃんなら間違ひもないでせうがね。身元引請は誰がしてくれたの。」

「そんなもの入りやしなかつたわ、別に……。」葛代は何の氣もなしに言つたが、どきりとした。でも、何にかまふものかと思つた。

「そんなもの入るの」と、葛代は反問したが、隙を見せまいとするやうに、「わたし彼處は眞の腰掛のつもりよ。そのうち野田さんのお友達の大學生に頼んで、カフェの女給仕に入れてもらふつもりなの。それあお金になるんですて。」と、出任せを言つた。

「カフェですて。お止しなさい、そんな事。家の義兄さんはそんな事大嫌ひですよ。葛ちゃんがあんなぼんやりだから誰かに瞞されやしないかつて、大變心配してゐたんだよ。」

「さう」と、葛代は暗い目に寂しい微笑の影をたゞへた。

葛代は姉の側にゐるのが、窮痛でならなかつた。見も知らぬ人のなかへ混りこんで、放肆にふるまつてゐる今の生活の幸福さが思はれた。で、義兄が歸らないうちにと思つて、やがてそこ／＼に其處を切揚げた。

隣 邦 人

一

その晩はそれでお茶を濁して居所も知らさず歸つて來たが、姉の方から田舎へ手紙のついでに葛代の近況について何か言つてやつたものとみえて、一月ほどしてから、姉の方から話があるから一度來いと言つて、葉書を寄越した。

葛代はその頃は、もう色々の客にも接して大分お座敷馴れがしてゐた。生活は放縱になつてゐたし可也我儘にもなつてゐた。勿論彼女は一應は氣爽で、金銭上のことなどについても、上さんの好きになつてはゐたが、それと同時にお座敷の嗜好みをしたり、自分をちやほやする家へ、客を啣へ込んで行つたりして上さんにお尻が來たりした。それに朋輩のおしづは、田舎の良人が、少し健康を恢復したところで、再び上京したについて、世帯をもつのだとか言つて、足を洗つてしまつたので、葛代は一層忙しくなつてゐた。初め自分のやうな山出が、何うしてさう賣れるかについて、不思議な幸運を怪しんでゐたのであつたが、それも狎れてしまふと、自信を募らせるばかりであつた。

葛代が一番自由を感じるのには、この頃特にもしげ／＼逢ふ機会のある楊さんといふ支那人に呼ばれる時であつた。彼は北の方の相當な商人の子息らしかつたが、音楽が好きであつた。それに彼等の友達は大抵誰でもさうであつたが、愛情が深くて親切であつた。多少虐げられて怒るやうなことがあつても、後から直に彼女の機嫌を取ることと努めると云ふ風であつた。言葉に自由でないことが東京の都會情調を解し得ない葛代に取つて、反つて都合がよかつた。

楊さんは神田の下宿にゐたので、口をかけられてゐた家を通して呼出しがかゝつて來ると、葛代は俾てよく出向いて行つた。そして其は大抵夜遅くであつたが、行けば二日も三日も止められるやうな事が多かつた。

或る日葛代は楊さんから暮方に口がかゝつて來たのを幸ひに早くから家を出て、のび／＼なつて居た姉の家へちよつと顔を出した。すると此前にも姉から追窮されたことではあつたが、今度は幾分感づいてゐるやうな風で一層突つ込んで詰問されるのであつた、葛代のある界限が、そんな場所だといふことを、義兄が知つてゐるらしかつた。で、葛代も瞞だまされて着物がほしさに上さんの言ひなり次第になつたのだと告白してしまつた。

「葛ちゃん、それを止めないなら、今日きり家へ來ちや可けませんよ。」姉はさう言つて極めつけた。

「そのことを言はれた時には義兄さんに私極りがわるくて、顔から火が出るやうでしたよ。でもまさか葛ちゃんが、そんな馬鹿な真似をする氣遣ひはないんですから、呼んでよく訊いてみますと言つておいたんですよ。カフェやお茶屋の女中さんなら着物でも拵へるつもりで入るのも爲方がないけれど、そんな後暗いことだけはお止めなさい。そんな事が若し田舎へでも聞えたら、何うしようと思ふのさ。」

もう十月の初めのことで、葛代は何かひどく大人ぶつた柄がらの切立のお召の單衣ものに、帯も二二三の女でも締めさうなものをしてゐた。姉はじろ／＼それを見てゐたが、葛代は姉の意見には、直に返事もしないで、姉の語氣が少し軟いところで、中古ちゆうこのその帯の出所などを話した。

「わたし其のうち、誰か一人の奥さんになるかも知れないのよ。だから、こんなじみな物を友達から買ったんですの。先のために好いようにと思つて。私いつ迄こんなことをしてゐる積りぢやないのよ姉さん。それあ然うですとも。私そんな白痴ぢやないわよ。だけれど、私これ餘りじみだから

姉さんに上げてほしいと思つてゐますのよ。」

姉は呆れた顔をしてゐた。

二

蔦代は姉と喧嘩して——勿論氣前を見せて帯をおいて來たので、姉の氣分を緩和することはできなかったのはあつたが、別れてしまふとそれも何だか惜くなつて、何故あんな輕卒なことをしたかと悔いた。

「そんな物を蔦ちゃんに貰つちや、義兄さんに叱られます。持つて歸つた方がいゝですよ。」

姉はさう言つて、見て見ぬふりをしてゐたが、何うせ若いものは慾がないからとでも思つてゐるやうに、強ひて押返しもしないのであつた。蔦代は伊達巻一つになつて、勿論コートを着てゐたので、そのまま其處を出てしまつた。

「いゝわ〜、欲しけれあ幾本でも儲へられるんだから。」蔦代は思つた。

楊さんと親しくなつてから彼女の身のまはりも大分豊富になつてゐた。指環もお嬢さんらしい高

彫のが出來たし、コオトも拵へてもらつた。楊さんは疑りぶかくて容易に彼女の言ふことを取あげない癖があつたが、少し拗てみせると、直後から欲しがつてゐるものを買つて持つて來て彼女の機嫌を取るのであつた。それは後で氣の毒になるほど氣が弱いのであつた。

「だから私あなた好きよ。」蔦代はさう言つて彼に媚びたが、決して楊さんを好いてゐる譯ではなかつた。

その晩も歸りがけに、楊さんの下宿へ寄つたが、正直で氣の短い楊さんは時間がおそくなつたと言つて、機嫌を損じてゐた。その上帯をしめてゐないのを見て、眼の色をかへた。

「私牛込の姉さんとこへ用事があつて行つて來たんですの。貴方にいつか話したでせう、私の姉さん。」

「あゝ、牛込の姉さん、それを私聴くことありました。しかし貴女は帯を何うしたですか。私のところへ來るとき、きつと締める約束ありましたでせう。」楊さんは飛出た眼球を光らしてゐた。

「ですから、私あの帯を姉さんにおいて來たんぢやありませんか。姉さんが私が貴女と一緒にゐることを知つて大變腹を立て、私に意見をしたでせう。私爲方がないから帯をおいて來てしまつた

楊さんは痛く失望の色を浮べた。そして自分が親切でわざ／＼買ったものを、さうも思ひきりよく姉さんにくれてしまふ理由はない。それは誰か御國のお客に取られてしまったのであらうと、血眼になつて蔦代を詰問した。お國の男にきつと情夫があるのだらうと追窮した。若しさうでなければ、その證據にあの帯を姉から取返してこいと言つて眼に陵かどを立て、一刻に彼女を責めた。

「私あんな帯なら、日本人のお客にいくらでも拵へてもらひますわ。貴女のやゝな吝けちな人私嫌ひ。あの帯がそんなに惜しいなら、明朝にでも拵つて来てよ。眞實だわ、貴方一人がお客ぢやないことよ。」蔦代は癡然ひびとした顔をして、能辯に言つた。

「私貴方から、これから何にも拵へてもらひません。私姉さんの機嫌を取つておかないと、この商賣がしてゐられないから……若しも姉さんが私がこの商賣をしてゐることを、田舎のお父さんやお母さんに知らしてやつてごらんなさい。それこそ大變ぢやありませんか。私姉の口妨ぎにあの帯をおいて来たんです。貴方が人の氣も知らないで、そんなに私を苛いぢめるのなら、私もう貴方のところへ来ないことよ。お氣の毒さまですが、外にお客は澤山あることよ。貴方の御國の人でも私の國の人

でも。」

楊さんは終ひに折れてしまつた。

「あなた怒つては可けません。私を誤解しては困ります。」彼はさう言つて、今度は極力蔦代を宥めにかゝるのであつた。

三

蔦代が強くと出ると、楊さんは何時でも直ぐ折れてしまつて、今度は一生懸命彼女の機嫌を取るのであつた。そして然うなると蔦代も氣持が柔いで、何時もするやうに楊さんにピアノを教はつたり又は碁をうつことや字を書くことを教はつたりした。蔦代は字のことだけは楊さんが日本人の誰よりも法式に適つてゐるやうに思はれた。それに楊さんは假名も巧かつた。

「私手紙だけはよく書きたいと思ふわ。貴方の奥さんになるとき字が書けなくては困りますからね。」蔦代は幼稚な嬉しがらせを言つた。

勿論楊さんは彼女の心を見定めたらうへならば、故郷の父の許しを得て、結婚するつもりなのだが、

支那で暮すことができるか何うかと、眞面目に心配してゐるらしかつた。そして彼は自分の國の自然の大きくて美しいことや、如何にも古都らしい北京の町の狀、生活状態の豊富なことを話した。北京に近い彼の家には、奴婢なども多く使つてゐて、若しも蔦代が彼の新婦として行つてくれるならば、何んなに大事にされるか知れないと熱心に話した。それに日本に歸らうと思へば僅かの日で何時でも自由に歸れるし、若し自分が官途について、外交官にでもなるやうなことになるならば、東京に住ふことも出来るのだといふのであつた。しかし夫には、先決問題としてびつたり此の商賣を止めて、堅氣になる必要があるのだから、いづれ來年の暑中休暇に歸省したをり、父や母とも相談して、蔦代の體を引取ることにする積りだけれど、彼女にその意志がないらしく思へるのが不安だと言つて、溜息を吐いてゐた。

蔦代は空想に咬られずにはゐなかつたが、楊さんの友人などに聞いたところでは、彼の家は代々堅い商人で、彼女との結婚などは迎も望めないことらしかつた。で、また彼等の仲間の或者は、楊さんが多分な學資を取寄せて、蔦代に感溺しきつてゐる彼のこの頃の生活について、氣を揉んでゐる連中もあつた。彼等の目は、楊さんが蔦代を思つてゐるやうに蔦代が眞實に楊さんを愛してゐる

か否かについて、それとなく目を睜つてゐるらしかつた。

勿論蔦代が媚を賣るのは、楊さん一人に限つたことではなかつた。彼の周圍に集まつて來る、王だの李だの秦だのと云ふ友人たちにも蔦代は楊さんと同じやうな狎々しさで——寧ろそれ以上に自由な氣持で遇つてゐる者すらあつた。

「わたし貴方の下宿へ遊びに行つても可いでせう。」蔦代は初めて逢つた男にも、そんな風に話した。「わたし貴方好き。あなた日本人よりか餘程好い男だわ。」蔦代は顔を赧めながら平氣で言つて、神經質な楊さんの感情を、わざと挑發するのであつた。

「貴女浮氣いけません。私貴女と手切ります」楊さんは友達の歸つたあとで、さう言つて怒つた。

「私貴女に著物買つてあげました。コオトも帯も作りました。あなた私の親切わかりません。貴女薄情です。我邦の婦人みな貞淑です。御國の婦人信用できません。」彼は目の色が變つた。

「信用しない、それ好いです。」蔦代も負けてはゐなかつた。「私みんな貴方に返します。帯もコオトも入りません。男の癖に嫉妬やく人私嫌ひです。」

そして二人は眞劍になつて下らなく争つた。

葛代はぶり／＼して歸つたが、二三日たつと又彼から極つて口がかゝつて來た。

四

その頃葛代のところへ、時々通つて來る一人の老人があつて、或家で彼女は座敷へ呼ばれてゐた。官吏あがりの、甚くお上品な六十近い年輩の人で、相當な金持らしかつた。初めて呼ばれたときには恚う云ふむづかしい顔をした老人が、何うしてこんな處へ紛れこんで來たかと、葛代は不思議でならなかつた。

「堅氣のお嬢さまのつもりでね。」その家の例の無氣味な狐のやうな細い目をした上さんは、さう言つて、葛代を二階へあげた。勿論それは初めてのお客に出るときの慣用語ではあつたが、その時上さんから又更めて特別に言はれたのであつた。

この年取つた紳士は、いつでも白い口髯を綺麗に刈り込んで、彼女にお父さんのやうな嚴格な顔をしてゐたが、心から彼女を愛してくれた。そして彼女の身のうへなどについて、色々掘つて訊いた。葛代は姉さんが一人で東京にゐるが、碌々世話もしてくれないが、この近所に知つた人がある

ので、そこの世話になつてゐるうちに、恚ういふところへ呼ばれることになつたのだと言つたきりで勿論深いことは話さなかつた。

その家の上さんは、この老人が來ると、きつと二階へあがつて來て、酒のお酌をしながら、機嫌を取つた。

「旦那はお前さんが、お死去になつたお嬢さんに肖てゐると仰しやるんだよ。女學校をお出なすつて結構なお縁組ができようと云ふその間にさ、ほんとうに何といふ間がわるいでございませう。折角それだけに御丹精なさいましたのにね。」お上さんはさう言つて、自分でも葛代に酌をさせて飲んでゐた。

葛代は硬くなつて、たゞ笑つてゐるきりであつた。

老人は別に大して酒も飲まなかつた。そして斯うしてゐても如何にも寂しさうであつた。

「どうも可けんもので、十九にもなつてゐたものだから、色々のものが澤山残つてゐる。机の抽斗のこゝに日記があるかと思へば、一方には友達から來た手紙がある。嫁入支度もぼつ／＼用意してゐたので、簞笥のなかには著物も一杯つまつてゐる。そこにも此處にもあれの手の迹、體につけた

ものが目につくといふ譯で、何うにも遣切れない。」さう言つて老人は寂しく笑つてゐた。

「勿論わしは十五年も前に家内を亡くしたが、たとひ外に女をおけばとて、兄や他のために家へ入れることはしなかつたし、不自由も怵へて來たのだが、それはそれで諦めがつく。格別さう寂しいとも思はなかつたものだ。ところが年取つてから若いものに行かれるといふことは、寔に辛いもので、この年になつて、ほんとうに寂しいと云ふことを感じたよ。」

老人はさういふ述懐をしてゐたが、死んだその娘の支度が、箆箆に腐るほどあるのだらうと思ふと、葛代は何だか自分の物を人に褻られでもしないかと云ふやうな不安を感じるのであつた。この老人の娘ならきつと美しいお嬢さんであつたらうと、彼女は想像した。たとひ夭折をしたにしても、そんな豊富な家に育つて、衣裳なぞ着飾つてゐた十九年の生活は、随分幸福なものだと思はれた。たとひ一年でも二年でも、そんな生活ができるなら何を我慢してもいゝと思はれた。

しかしこの老人と差向ひでゐることは、やつぱり氣窮りで厭であつた。

「何うだ、わしの家へ來てくれる氣はないか。家が厭なら、どこぞ外においてもいゝ。私の家には誰れもゐない。死んだ娘の弟が一人に女中が二人ゐるきりだ。」老人はそんなことを言つてゐた。長

男たち若い夫婦は、東京で別に世帯をもつてゐるらしかつた。

葛代はやつぱり唯笑つてゐるより外はなかつた。

町に灯のつく頃、さすがに人目を怖れるとみえて、老人は私と裏木戸から出て行つた。

五

葛代がその老人のことから、居る家のお上さんと氣拙くなつて、同じ区内のもつと繁華な土地へ行くことになつたのは、もう冬のことであつた。そこは客種が好いと云ふ話であつた。實際またそれに違ひないのであつたであらうが、所々渡りあるいて肉體も氣持も荒みきつたやうな、それこそ本來さういふ風に育つて來たかと思はれる凄い女などもあつて、葛代は若し長くそこにゐたならば自分の落ちて行く運命が何であるかを、まご／＼見せつけられるであらう驚きと恐怖を感じた。然うでなくとも、彼女は種類の女の置屋や、また客を呼んでくれる家の女主などに、中間甘い汁を吸はれてまで彼等のために血や肉を喰はれてゐるやうな今の境涯をばか／＼しく思つてゐたので、それよりも自分に女王か何かのやうな讚美と愛情を捧げてくれる楊さんのところへ行つた方が何ん

なに幸福だか知れないと思つてゐた。そして其れには同じやうに自分を愛してゐる例の老人の言つたことも考慮に入れない譯にかなかつた。

しかしこの老人の世話になることになると、中間に立つてゐる上さんが、好い儲けに有つくことになる譯なので、其はいくら説勧められても、詰らないと云ふ氣もした。勿論老人と或商科出の其總領の家庭の空氣は、逆も自分の生活に堪へるものではなさうに思はれた。それで名儀は小間使として住込むのだと云ふのであつたが、何だかが氣進まなかつた。

「あのお爺さんが死んだら、お前さんが受取れるやうに、保険をつけておいてくれると言ふから可いぢやないか。あの老人がいつまで生きられるのですか。精々五年か十年、事によるともつと早くお芽出たくなつてしまはないとも限らないんだよ。」狐顔の上さんは言つた。居る家の上さんに取つては彼女を引こぬかれることは餘り悦ばしいことでもなかつたが、狐顔の旦那が町内の幅利であるところから、それは何うしても機嫌を取つておかなければならなかつた。楊さんの方へとなれば留學生の身のうへで、何にもならないことは判り切つてゐた。

勿論蔦代は何方へも行きたくはなかつた。楊さんと一緒になれば支那へ行かなければならぬか

も知れないし、老人のところへ行けば、行儀や言葉づかひをもお品ぶつて、厭らしい彼のために、何んなことでもしなければならなかつた。蔦代は、今のところやつぱり現在の境遇にゐるより外な位と思つた。で、しつこく言ふその癖金貸などをしてゐる處から、金の切れ放れのよくない老人の座敷を持前の剛情に忌避してから、上さんと二人の機嫌を損じたのと、新しい女を獵つて、それから其へと移つて行く、大抵數に限度のある客にも飽かれて來たので、思ひ立つて河岸を替へることにしたのであつた。彼女の仲間は誰に限らず、そんな風に、あちこち萍草のやうに移り動くのであつた。それに蔦代の場合では、支那人を好く嫉妬から、ひどい喧嘩をして別れたきりになつてゐる楊さんのところへも居所だけでも知らさう／＼と思ひながら、つひ疎々しくなつてしまつてゐた。狐顔の上さんが、老人に金主をしてもらつてゐるところから、そんな周旋をもするのだと云ふことを、蔦代はこゝへ來てから、初めて仲間の一人に聞いた。

六

その年も暮れて、正月から二月へかけて、蔦代はちよつと閑になつたし、特に何時でもそんな時

分には然うなのだが、警戒が嚴重になつて、この種の商賣をしてゐる家は、多く山の手、逐ひこくられてしまつたりしたところから、葛代はまた楊さんの方へ渡りをつけることになつた。勿論今の場所へ移つて來てからも、或家の廊下でふと彼に逢つて、彼が他の女を相手にしてゐることを知つて何となく氣を悪くした。その相手の女を知つてゐるだけに、尙更氣持がよくなかつた。

「ほんとうに貴方は薄情ね」など、葛代は媚びるやうに怨を言つたが、彼女は彼と仲違ひをしたのも、實は何かにつけて彼のしつこいのが煩くなつたからなので、久し振で逢つてみると、あれほど親切にしてくれる人を何うしてあんなに邪慳にしたかと云ふ氣が出た。葛代は一度昵みになつたものならどんな男でも憎みはしなかつた。戀や愛のない男にも、彼女は打算的に絶えず一種の懐かしさと好意を感じてゐた。たゞそれに濃淡があるだけであつた。彼女の生育つた北方の婦人に共通な性格を、葛代は餘計にもつてゐた。

で、少し警戒の緩和されるまでと思つて、葛代が全く楊さんの下宿へ居つくことになつたのは、三月の中頃であつたが、浮々と暮してゐるうちに日がたつて、始終楊さんを憤らせながらも、ちよいと足がぬけないやうな事情になつてゐた。それは自分にさう熱中してゐる彼を、傍觀者の彼の友

達に對しても、さうは出來なくなつてしまつたからで、それに此の夏の休暇に國へ歸りさへすれば、送金の方もつと増額をしてもらへる筈だし、親たちの誤解さへ解ければ行く／＼結婚することもできると云ふので、楊さんは、全力を盡して、彼女の決心を固めさせようとしてゐた。そして熱心に字を教へたり、ピアノを弾かせたりするのであつたが、葛代は音樂の興味が更にならないのが、飽足りなく思はれた。字の方はまだしも幾許か習ふ氣があつたが、それも楊さんが意ふほどの熱心はなかつた。

その界限の料理屋へ二人はよく行つた。そして葛代は蓮の實や西瓜の種を咬むことだの、薬くさい酒を飲むことに慣らされた。淺草へも時々遊びにいかなければ承知しなかつた。これと云ふ贅澤の趣味を解してゐるわけではなかつたが、買喰ひや何かに、絶えず金が浪費された。そして楊さんの月の僅かな送金が、重にそれらの濫費にあてられるところから、下宿にも可也な下宿料がたましまつたし、友達仲間にも負債ができた。で、楊さんは自然に本を外へ持出さなければならなかつたし、葛代も指輪を擔保に置いて金の融通を謀つたり、着物を質へ入れて芝居や活動を見に行つたりした。さうでもしなければ、迎も日が送れなかつたのではあつたが、不自由がちに育つた彼女に

取つては、それが唯一の享樂であつた。そして其の結果、楊さんは暑中休暇のまだ來ないうちに金策のために國へ歸らなければならなかつた。

で、五月の初に、彼は旅費を工面して、東京を立つことになつた。

「わたくし必ず金もつて歸ります。貴女何も心配することないです。一月の忍耐です。一月こゝにゐて下さい。私宿の上さんに頼んでおきました。お上さん親切です。」楊さんはそんな風に言つて聞かせた。

「その代りお金どつさりよ、可いですか。時計も買つてきて頂戴よ、指輪もよ、きつとよ。」葛代は言つた。

「宜しいです。そんなこと何でもないです。」

そして楊さんは幾枚もの封筒に自分の宛名と所書をしたのを、葛代に残して行つた。

七

楊さんが堅い約束をして東京を立つてから、葛代はお上さんの監督のもとに、二室借りてある彼の

の部屋に淋しく暮してゐた。王だの龍だの二三の友人に送られて、楊さんは新橋から立つたのであつたが、汽車に乗つてからも、彼は留守中のことをくどくどと葛代に言遣して、纏綿の情の残つた長い握手をしながら別れを惜むのであつた。

「お土産をどつさり、きつとよ。」と葛代は繰返し言つたが、楊さんは目を曇ませてゐたとほりに、彼女も自然に涙がにじんだ。そして其時は少しも自分を疑つてゐない楊さんの眞實に動かされて、何んなことがあつても、楊さんの歸るまでは謹慎してゐなければならぬと考へてゐた。日本人のうち唯の一人でも、楊さんのやうな幼々しい純粹な愛情を自分に灑いでくれるものがあらうとは思へなかつた。それに楊さんの尤も怖れてゐるのは彼女が王や李や龍と云ふやうな彼の友達を近づけることであつた。勿論彼等は楊に比べては、まだ若かつた。そして不斷は楊さんを年長として尊敬を拂つてゐた。

葛代は楊さんの残して行つた小使で、その當座約やかに暮してゐた。彼女の好きな王さんたちも餘り彼女の傍へは寄つてこなかつたが、日がたつに従つて、陰氣な下宿にばかりも閉ぢ籠つてゐられなくなつて、夕方なぞ散歩のついでに、何うかするとふらりと彼等の下宿を訪ねるのであつた。

そして部屋で棋を打つたり、一緒に飯を食ひに行つたりした。蔦代の下宿は、或る荒れた大きな劇場の裏手にあつた。そして部屋から汚い樂屋の一部が眺められるやうな地位にあつたが、その薄暗い部屋に閉ぢ籠つてゐることは、今まで賑やかな下町に暮しなれた彼女に取つては、何うかすると堪へられない苦痛であつた。

するうち一月ほどの日が、直にたつてしまつた。楊さんからは二三度手紙が来て、一度などは金も少しは送つて來たのであつたが、彼の希望は思つたほど容易く達せられさうになかつた。彼と蔦代との關係が、彼の親達の耳へも入つてゐたのは勿論だが、蔦代が花柳の巷ちまたにゐる賣色の女だといふことが寧ろ實際よりも誇張されて傳はつてゐた。

蔦代は別にそれに失望はしなかつた。楊さんと一緒になることに最初からさう多くの望みをおいてゐた譯でもなかつたし、遠い先々のことを考へる必要も感じてゐなかつた。楊さんが日本の女の氣持も知らないで何處までも自分がついて行くものだと思つてゐるのも可笑かつたが、自分のやうな不檢束ふしだな女を、彼の國としては相當な地位にある彼の夫人として、生涯一緒に暮さうとでも思つてゐるらしい彼の幼こ々しい心持にも、全く信賴することができなかつた。たゞ言ふがまゝに着物や

何かを拵へてくれたり、何んな我儘をでも通してくれるのが、今の彼女に取つてその日／＼の氣分の紛らしとなるだけであつた。

五月雨の季節に入つてから、蔦代は毎日々々鬱陶うつろしい日を送つてゐた。廣い荒れた下宿には三四人の學生がゐるだけで、蔦代はさすがに其等の下宿人に顔を見られるのが厭で、時々根津の方にゐる、以前の同じ仲間の友達の一人が遊びに來たり、宿の上さんの部屋へ來たときなどに、鮎あなや何かを取つて、世間話に耽るほかは、何もすることがなかつた。

「楊さんも、あれ限りちつともお金を送つてくれなくて何うしたんでせう。」蔦代は楊さんの消息を氣にしてゐる宿の上さんに言ふのであつた。

「お金さへ送つてくれるなら、あの人に歸つて貰はなくつたつて可いんですけれど。」蔦代はさう言つて伊達卷姿で机に倚りかゝつて小説を讀んでゐた。

暴 雨 風

八二

或時葛代は同じ日本人の話相手がほしくつて、今まで自分を最良にしてくれた男のなかゝら、誰か一人二人呼んでみようと思つたが、可憎住所が不明であつたり、又は支那人と一緒にゐることを知られたくなかつたりして、結局は野田にでも来てもらはうかと思ひついた。必ずしも野田が自分に愛情があり自分が野田に愛情があると云ふ譯ではなかつたけれど、不思議な因縁で東京へ出て来てから、幼馴染の彼に最も多く親しい感じをもつことのできたのも事實であつたし、姉にさへ打明けなかつた事をも、何によらず浚け出して相談したのもあつた。それにも拘らず二人の間には始終並行線のやうな距離が保たれてゐた。野田には少しもそんな気分がなかつたであらうか。野田が自分の目に慣れすぎてゐたゝめに、反つて平凡に看過してしまつたのではなかつたであらうか。新田に酷い目に逢されてから、葛代の心が今まで何の氣もつかずにゐた野田の心に背いてゐたやうな自分の心なさを、何となく悔てゐたのであつたが、座敷が忙しいので、そんな微妙な問題など考へてゐる餘裕がなかつた。

「こゝへあの人を呼んでみよう。」葛代は半は好奇心の心に動かされて、ふと彼に手紙を書く氣になつたのであつた。

勿論王や龍などゝ云ふ人だちを相手にしてゐれば、その日その日が浮々と面白く送られないことはなかつたし、楊さんからの送金がないので、慾張の宿の上さんと共同で遣りさへすれば、こゝの宿でも彼等を客に呼んで、金を取ることは何でもないことであつたし、上さんも其となくそれを希望してゐるやうにも見えたのであつたが、それにしても楊さんと日頃往來してゐない彼の國の學生でない、都合が悪いと思はれた。で、彼女は一番好いてゐる王さんに、始終惱ましい思ひを懷きながら、わざとそんな風を見せないやうにしてゐた。それに王さんは彼等のなかの最年少者であつた。學校の成績も優れてゐると云ふ評判だつたし、風采も日本の貴族のやうに美しかつた。

「わたし王さんが一番好きなんだけれど、貴方にそんな事をしちや、お國の親御さんや何かに濟まないでせう。」葛代は彼を見るたびに飛立つやうな懐かしさを感じながらも、それは彼の美しさと幼々しさを嘆美する餘りの憧れであつたともいへるので、卑しい氣持は彼に對して寧ろ慚ぢられた。

王さんはたゞ笑つてゐたが、彼も亦支那人的な空虚な讚美の目を以つて異國の女を眺めてゐるに過ぎなかつた。それでなくとも葛代は餘り美しい異性と關係することを好まなかつた。新田に懲りたからだと云ふわけではなかつた。自分を知つてゐる彼女の放縱性と物質上の慾望とが、好き自由に自分の意志に左右されるやうな種類の男にのみ接近せしめた。

野田は何と思つたか、或晩ふらりと此の陰氣な下宿の廣い玄關に現はれた。彼は神田へ語學の稽古に通つてゐたが、その頃は内職などやつて、相當な生活費を得てゐるらしかつた。

葛代は派手な中形の浴衣ゆかたのうへに、お召の袷羽織などを着て、先へ立つて自分の薄暗い部屋へ案内した。

「貴方のところを一度お尋ねしようと思つたんですけれど貴方の學校がこの近所でせう。だから來ていただければと思つて、手紙差上げましたの。」

野田は机や本箱などの學生の部屋らしい四邊を見廻しながら、「何うしてこんな處にゐるの。」と訊いた。

二

葛代はしほくした目元に、例の融けるやうな微笑を湛へて、茶盆を引寄せてお茶の支度をしながら、それには答へないで、

「私貴方に御馳走して上げませうと思つて、」

「僕に御馳走？」

「何がいゝでせうか。貴方の大好きなもの。」葛代は擲擻かつかふやうな目をした。

「あの商賣はもう止めたのかね。こゝには何う云ふ事情で居るのかね。」

すると葛代は急に思ひ出したやうに、「私貴方にお目にかゝつたらば聽いてみようと思つてゐたんですけれど、私こんな田舎もので、迎もちゃんとした日本の人の奥さんなぞなれないでせう。あの商賣は、それあ好み商賣なだけれど」と、野田が顰蹙しんじゆくしてゐるのも平氣で「それも此頃は喧しくやいばて駄目なものですから、こんな處へ來てゐるんですけれど、……」

そして葛代はお茶を茶托に載せて彼の前に置いた。

「こゝに何をしてゐるんだ。誰か學生とでも同棲してゐるのかね。それとも何か人の妾にでもなつたんぢやないかね。」野田はまた不安さうに訊いた。

「何でもいゝわよ。」葛代は顔を紅くしたが、「わたし日本人嫌ぢやないけれど口喧しいから厭だ」野田は苦笑した。そして其と同時に、その周囲の道具などから、彼女の今の境遇が何であるかをその刹那に嗅ぎつけることができるやうな氣がした。

「支那人の妾にでもなつてゐるんぢやないか。」野田はにや／＼しながら彼女の目を凝視めて、「きつと然うだな」といふ表情をした。

「支那人だつて介意やしないわ。親切にしてくれる人だつたら。それあ……支那人は、それこそ親切だわ。」

「ぢや矢張さうだね。」

「その人は私を夫人にする積りなんですけれど、それあ私も何うするか解らないわ。」

野田は惘れた顔をしてゐた。

「姉さんは承知かね。」

「姉さんなんか何うでも可いちやないの。」と、葛代は眉をしかめて、「私姉さんなぞのお世話にならないから可いわ。」

「そして其の支那人はこゝにゐるの。」

「いゝえ、今國へ歸つてゐるの。だから、私一人で淋しくて爲様がないから、貴方を呼んだの。」

「しかしそんなことをしてゐて、結局何うするつもりだね。いつ迄こんな暗い生活を續けてゐても爲様がないだらうね。」野田は嘆息するやうに言つた。

「いゝわよ、貴方にそんな心配してもらはなくとも。支那へ行つて暮さうと、踏つて死なうと……私死なうと思つてゐるわ。困つたときは死んでしまへば其限ぢやありませんか。親や兄弟に迷惑のかからないやうに。」

「さうは行かないよ。何かさう云ふ乗鉢になる動機があれば、それも止むを得ない事かも知れんけれど、君には別にさう云ふ原因もなしに、好い着物を着たいとか何とかいふ事のためにだね……。」

「いゝわよ／＼」と、葛代は片意地らしく打消して、「私貴方の厄介にならないから可いわよ。」

「怒りやしないわよ。わたし怒つたことなんかありやしないのよ。たとひ何んなことがあつても、それに野田さんの親切も私知つてゐるのよ。」

野田は何と言ふこともなし氣の毒になつて來た。たとひ自分の生活について、まるきり無反省であなるにしても、彼女の素質や惨めな生立や、最近の徑路を考へると、憎む氣にはれないのであつた。

三

葛代は野田から忠告じみたことを言はれても、別に腹も立たなかつたが、野田が心配してゐるほどに悲しい自分の現在だとは決して思へなかつた。勿論新田には欺かれ、姉には聲懸されたけれど、自分を愛してくれる者、讚美する者が世間通る處に充ちてゐるのだと云ふ自信があつた。數にも入らない一莖の野の花を、何うして人がそんなに注目してくれるかと不思議なくらゐであつた。それには自分は未だ年が少い。前途にはまだ／＼幸福な運命が待つてゐてくれる。野田さんが少し自分を侮蔑しすぎてゐるのだと、さうも思はれた。

「貴方が私のことを心配して下さるのは、それあり難いには有難いとは思つてゐますわ。だけど、私自分のことを、そんなに心配してゐやしないことよ。」葛代は暫くしてから、やゝ思ひ返した風で言ふのであつた。

「いや、僕だつて書生の身のうへで、人のことに喙を出す分際ぢやないんだがね。」野田も笑つて、「それに其の支那人と葛代さんの間に深い理解があつて、お互に許してゐるものならそれも可いだらうよ。たゞ僕に聴かれるとなると、ちよつと考へるね。それも其本人に直接逢つてみなけあ解らないことだけれど。」

「そんな難かしいこと解らないわ。だけど、楊さんは——楊さんといふのよ。楊さんはそれあ好人なのよ。私を愛し切つてゐるのよ。だけど、あの人が學校を出てお國へ歸ることになれば、私も支那へ連れて行かれるかも知れないのよ。だから困るの。」

「それあ大變な話ぢやないか。」野田は苦笑を浮べて、「その男は實際そんな事を考へてるのかね。」
「それこそ大眞面目でさう言つてゐるわ。」

「それあ可笑しいな。餘つ程惚れてると見えるね。しかし其は考へものだよ。そんな支那人などの

言ふことを信じなくとも……無論その男は眞面目なだらうけれど、そんな自由が許されてゐると思はれないぢやないか。それにそんな遠い處の全然風俗習慣の違ふ國へ嫁かたづいて行つて、いくら無頓着な蔦代さんでも、一生が幸福であり得よう理由がないぢやないか。支那は古い國で、しかも相當の資産家だらうから、尙更禮儀や何かと嚴重だらうからね。勿論どんな境遇にでも順應して行けるだらうけれど、それも適宜の自由が許されてゐる場合のことなんだからね。しかも其は何よりも蔦代さんに必要なものなんだ。」

「それあ然うだわ。私舅や小姑に氣兼ねるくらゐなら死んだ方がいゝわ。」

「それぢや迎むかひも駄目ぢやないか。」

「だから私まだ決めてる譯ぢやないの。決める必要もないのよ。私貴方に御馳走しようと思つてお呼びしたんですから。貴方ビール飲まない。」

「飲んでも可いがね。僕も金はあるよ。」

「お金なんか可いのよ。私この頃そんなに貧乏ぢやないことよ。お小遣ひぐらゐ貸してあげてよ。」
「そんなに有福なんかね。」

「有福ぢやないけど、締る必要がないんですから。どうせ支那のお金ですもの。」

「俺もこの頃は、些ちとは好いんだ。今だつたら蔦代さんが、こんな事にならないうちに何うか仕様もあつたんだがね。新田をまさかあんな奴とは思はなかつたから。蔦代さんも少し輕卒過ぎたね。」

「あの人何うして？」

「知らない」

「私今なら、散々言つてやるんだけど、あの時分は眞實ほんたうに幼こだつたから。」

「今でも思ひ出すかね。」

「だけど、私あんな人嫌ひ。いやに好い男ぶつてさ。野田さんの方が餘程好いわ。私この頃さう思ふの。」

野田はにや／＼笑つてゐた。

四

野田は飲食をしたあとで、少し疲れて眩に頭をもたせて横になつてゐた。蔦代もビールを二三杯

飲んで紅くなつてゐた。彼女は食べ荒した食器やお膳のやうなものを自身で外へ運んだり、野田に枕を出してやつたりしたが、野田はわづか暫く逢はなかつたうちに、悉皆彼女の男擦れしてゐることを恐ろしく感じた。勿論初めから人に狎れ易い女ではあつたが、貞操を一筋の帯ほどにも尊重しないやうな氣持は、一つは最初の不幸な動機のためだと思はれた。新田にその責任がある。そして新田に紹介した自分にも一半の責任がないとは言へないと野田は思つた。

蔦代は野田と飲食してゐる間にも、窓の外へ来て口笛を吹いてゐる一人の若い男の方へ顔を出して、決して蓮葉ではなかつたが、浮氣っぽい調子で何か話してゐた。

「お客さまですか。それなら可いです。用事ないです。」その男はそんな事を言つてゐた。

「わし國の人です。」蔦代は言つてゐた。そして、「暫く見えませんでしたね。私何うなすつたかと心配してゐました。」と、さも懐かしさうな言葉をかけるのであつた。

その男が窓先を去つたあとで「あの人好い男よ」と、蔦代はうわくした調子で野田に言ふのであつた。

野田はこの女の不斷の生活を暗示されるやうな氣がして、不快であつたが憎む氣にはなれなかつ

た。

「何うなしたの。」蔦代はそのまゝ彼の枕頭へ膝を擦寄せて溜息を吐くやうに言つた。

「お酒に酔つて苦しいんですか。」蔦代は野田の髪を撫てゐた。

「いや、別に苦しくはないが……君はあゝ云ふ連中とばかり交際してゐるんだね。先刻來た支那人と。」と、野田は見上げるやうにして言つた。

「何うして？」蔦代は紅い顔をして訊いた。

「あの連中は違つた國へ來て、女に渴いてゐるからちやほや言つて寄つて來るんだらうが、そんな事をしてゐると困るぢやないかな。自分で可恐しいとは思はないかね。」野田は寂しい微笑を浮かべながら呟いてゐたが、「僕は小さい時分から知つてゐるだけに、蔦代さんがさう云ふ風になつて行くのを傍觀してゐられないやうな氣がするんだよ。眞實に餘計なことかも知れないけれど。」

「私も何だか兄さんのやうな氣がしてゐるのよ。貴方のお家で世帯事をして、私があなたのお嫁さんになつた事があるぢやないの。」

野田は咽喉で笑つた。

「あの時分から、蔦代さんはそんな顔をしてゐたね。」

「私あの時分は、貴方を大變に大きい人のやうに思つてゐたけれど、今となると貴方なぞ若い方だわ。」

「僕にも少し力があると、蔦代さんを今の境涯から救つてしまふけれど、蔦代さんには僕の氣持なんか解るまいな。」

「それあ貴方は親切だわ。」蔦代は甘えるやうに言つて、「ぢや私貴方の奥さんにならうか知ら。」

「いや、さう云ふ意味ぢやなしに。僕はそんなことを言つてゐるんぢやないが。」

「ぢや何うすれば可いの。だつて可いぢやないの。」

野田は蔦代の膝が自分の頭に觸れてることを感じて、淡い焦燥しさを感じたが、別にわざとらしくそれを避けやうともしなかつた。

その晩彼は通りまで蔦代に送られて歸つた。あゝなつては何うしやうもないといふ氣がしてゐた。

五

野田はその後も、一二度やつて來たが、彼はもう絶望的態度でその上意見がましいことを言ふだけ野暮だと思つてゐるらしかつた。唯だ楊さんとの成行次第で、彼女の運命が何ういふ風に展開して行くかに、多少の興味が繋つてゐるらしかつた。そしてその模様によつてはまた相談に乗つても可いと云ふ風であつた。

處で或晩、彼女が二三人の支那人に取巻かれてゐるところを、その部屋で彼に見出された。それはもう大分後のことであつたが、彼等は格別楊さんの友人でもないらしかつた。勿論王でも李でもなかつた。

「色々の支那人を知つてゐるんだな。」と、野田は惘れた顔をしてゐたが、蔦代は國の人だと言つて彼を彼等に紹介した。

野田は好奇心を唆られて、色々のことを訊いたが、別にこれと云ふ話もなかつた。彼等はみんな單純で平凡な學生であるに過ぎなかつた。

彼等は碁をうつてから蔦代を連れてぞろ／＼外へ出た。そして野田をも誘つて、賑やかな通りにある支那料理屋へ押上つて行つた。彼等は蔦代に言はれて、野田を御馳走するのであつた。二三の料理と紅焼鯉などがそこへ現はれたが、彼等は酒に酔うてくると、唄を謳つたり、拳を打つたりして騒ぐのであつた。その表情や聲調には、感傷的な寂しい影が隠せなかつた。愚かな蔦代が一種の誇をもつて、浮いた調子で彼等に取巻かれながら、好い氣になつてゐるのも、野田には言ふばかりない淋しい氣分を與へたらしかつた。

蔦代はその頃唯うか／＼と楊さんの歸つてくるのを待つてばかりもゐられないやうな氣がした。そして何時かしら慾に目の晦んだ宿の上さんと相談のうへで、二階の一室で一人二人の、成るだけ楊さんと係はりのないやうな彼等異邦人を惹着けてゐた。その中には宋さんといふ、年の若い南方人などがあつてしげ／＼通つて來てゐた。

或晩野田が學校へ出かけに寄つて、いつもの彼女の部屋で話をしてゐると、何處からか細い口笛の音が空洞のやうな宿の夜の空氣に傳はつて來て、それと同時に蔦代はふと聽耳を聳だてながら部屋を出て行かうとした。「あなた此處にじつとしてらつしやい」とでも言ふやうな調子で。

野田はもう歸らうと思つてゐたところなので、急に身を起して出ようとする、蔦代は軽い狼狽の色を現はして、「なぜお歸りなさるの。」と、彼を咎めた。

すると其の瞬間、廊下のあなたに、苺を燻らしながら立つてゐる一人の若者の姿が、ちらと野田の目に映つた。

「もつと遊んでいらつしやいね。いゝぢやありませんか。あの人ぢき歸りますから。」そして蔦代は急いでその男の方へ近づいて行つたが、やがて前二階の方へあがつて行つたのであつた。

宗さんは紺の詰襟を着た、顔にぼろ／＼のある二十二三の青年であつたが、蔦代に導かれて二階の部屋へ上ると、いつにない不愉快な顔をしてゐた。

「今晚おそかつたですね。」蔦代は支那人じみた口の利方をした。何時の頃からか、支那人口調が、東京語に熟しない彼女の口に、より容易く乗移つてゐた。

宋さんは惱ましげに苦笑してゐたが、どこか落着かない風であつた。

蔦代はもう二三度この男と、この部屋で逢つてゐた。彼は決して楊さんのやうな金持の子息ではなかつたが、外の下宿で知合になつて、それから蔦代の狎々しい調子に惹着けられて、こゝへも竊

と来るやうになつたのであつた。

六

ところで、それに慣れてしまつて、餘りに平氣になり過ぎたために或夜意外の椿事が彼女と宋さんの身のうへに起つたのである。勿論葛代にしても宿の上さんにしても相當の警戒は怠らないつもりではあつたし、人の目に觸れないやうに、其場所を一室だけ隔離した前二階の部屋に決めてあつたのであつたが、それが反つて彼等の不運の原因となつたのであつた。その部屋のなか、向側の家から好く見えたからである。

角袖の男が二人ばかり、とにかく葛代のその密室へ夜深に闖入して來た。彼等は前側の家の密告によつて、時々時刻を計つて、そこに潜伏して二階の様子を窺つた果に、到頭或機會を見澄して、いきなり宿の戸を叩いたのである。そして戸が開いたところで、どやどやと前二階へ突進したのである。そして葛代と上さんとは、その場から引張られていつたのである。

宋さんはいふと——此の哀れた異邦人は甚だ惨めであつた。彼は筋骨の逞いそれらの闖入者に

よつて、歪み曲るほど頬桁をしたたか打擲かれ、足蹴にさへされ、そして此上ない侮辱の辭を浴びせかけられたのである。

「この野郎、何の勉強に日本へ來てゐるのだ。」といつた風で彼等は口汚く罵つた。

「貴様の學校は何處か。」彼等は罪囚のやうに頬をおさへて片隅に縮まつてゐる異邦人を詰問した。「貴様のやうな不良留學生が、この邊の風儀を亂してあるくんだ。貴様の名前は何といふか。」

宋さんは無論だが葛代も眞實吃驚してしまつた。彼女は打たれも罵られもしなかつたのであるが宋さんの虐待されてゐるのを見ると、吐が立つた。宋さんの爲てゐることが、そんなに彼等の侮辱に値することであらうか。宋さんを打つかはりに、なぜ自分を打たないのかと、何事にも不檢束な彼女もさすがに憤懣を感じないではゐられなかつた。若しこの纖弱い異邦人の體に怪我でもさせたら、何うするのだらうと、はら／＼した。しかし何うすることも出来なかつた。

宋さんが逐はれるやうにして、そこを去つてから、葛代と上さんは彼等に同行して、可恐しいところへ連れて行かれ、そして一應役人の取調を受けたところで、暗いところへ投込まれた。勿論彼女は自分の仲間がそんな處へ打込まれたことを、屢々咄いてゐた。しかし自分だけには、そんな不

運は、決して見舞つてこないものか何かのやうに思つてゐた。しかしかうなつてみると、自分の浅果敢であつたことが直に悔いられた。引立てられる時、彼女は静かに着換をして、小遣ひなども懐ろにして出て行つたのであつたが、所長か、或は其の下役かとおもはれる四十弱がの男は、彼女の人懐つこい愛嬌の深い様子を見ると、さう酷くは責めもしなかつた。そして更またまつたではなしに、まるで優しい先生が生徒にでも對するやうな、にこ／＼した顔をして、彼方の傍へ寄つて、あの異邦人との關係を聞きなどした。のみならず蔦代の心持次第では、どんな寛大な處置でも取られるのだからと色々の特殊な意味を暗示するのであつた。結局彼女の愛嬌ある美貌と、懐ろにした小遣ひとが、彼女を救ふについて相當に役立つたのであつた。

「あすこは左かに右引拂はんと可かんね。君もそんなことをしてゐちや、段々墮落するばかりだから何とか方針をかへたら可いだらう。僕がまた個人として相談に乗つてあげる場合もあらうと思ふから、そのうち一度遊びに來ちや何うかね。」彼はそんな風に言つて、わづか二日ばかりで、三日の晩にはもう解放してくれたのであつた。

七

其そののみならず其後の總てが苦々しいことばかりであつた。

蔦代は自分の分の科料は左かに右か、上さんの分をも自分が工面しなければならぬほど、上さんの手前が苦しかつたので、上さんより大分前に釋放された彼女は、其の金を宋さんに假りる積りであつたが、宋さんの持つてゐるだけでは足りなかつたので、根津の方かにゐる友達に相談して、着物を質入したりして、漸おとそれを持つて行くことができた。それに蔦代はもう下宿の人達に顔を見られるのも厭いやだつたし、宋さんの宿では又女の同棲を許さないのので、楊さんの歸るまでと云ふ積りで、一時根津にゐる友達の家かに足だけ止めることにした。

その家もまた下町から逐おこくられて來た仲間の一人で、下宿と云つても、學生を收容するやうな部屋は一つもなかつた。蔦代はその暗いざら／＼した氣分が厭で、居るにたへなかつたのであつたが、お房といふ其の友達が楊さんとも能く知つてゐるので、多少慰めることができた。勿論彼女は今度のことでは懲こ々としてゐた。今更堅氣な奉公などする氣には何うしてもなれなかつたにしても、

同じ物質のために働くにしても、あんな方法ではとても駄目だと思つた。

それに或日彼女は、楊さんが歸つてゐるか否かを見るために、元の下宿を訪ねたり、宋さんにも未だしみじみ逢つて話をしない處から、彼をも訪ねてみようと思つて神田の方へ出向いて行つた序に、自宅に遊びに来いとあれば親しく言つてくれた、部長の佐久間の家へも行つてみようと思つてゐなかつたし、宋さんは宿を引越してゐて逢へなかつた。

佐久間の家は、ちよつと紳士風の門構への二階であつた。可也暑くなつた時分のこと、彼は浴衣がけで、二階の部屋で彼女を引見したが、細君らしい三十四五の比較的人馴のした氣の爽い婦人がお茶をもつて来て、お愛相をしてくれた。蔦代は何だか自分を輕蔑する様子は少しもなく普通のお客のやうに待遇してくれるのが濟まないやうな氣がした。そして顔はくしゃくして醜いが、氣立のいゝ女だと思つた。佐久間も職掌以外では眞實好人だと思はれた。勿論蔦代には悪人といふのは抽象的には考へられないことはなかつたにしても、現實では誰をもさう云ふ風に考へることはできなかつた。自分を欺いた新田にしても、憎むべき人間だとは、決して思へなかつた。

佐久間の意見では、もうあんな危険なことは悉皆罷めた方が可いと言ふのであつた。第一自分の血肉を削つて、中間者の喰物になるのは馬鹿げてゐるではないかといふのであつた。

「それよりか誰か——それあ君が支那人が好きだといふのなら支那人でもいゝ。金のありさうな奴を掴まへて、どこか一戸借りてゐたら可いぢやないか。」

「私もどうしようかと思つてゐるんですけど……」そして蔦代は何にも知らぬ宋さんを何うしてあんな酷い目に逢はしたのだらうと、其場のことを不満さうに話した。

「私腹が立ちましたわ。あの人に何もそんな罪がある譯ぢやないぢやありませんか。」

佐久間はたゞ笑つてゐた。

「君はまた何うしてさう支那人を好くのかね。あんな豚くさい人間が何處が好いのかね。金があるからかね。あの宋といふ男は金持ちなんだらうね。」

「あの人別にお金持といふことないですけど、それでも好い家の坊ちゃんですわ。」

「さうだらう。外國へ留學させるくらゐだからな。」佐久間は暗い目で彼女を凝視めながら、「君の顔をまた支那人が好くとみえるね。成程君の顔は支那人向かも知れないな。」

其時蔦代は佐久間に、ちよつと厭味な言葉と素振とを見せつけられたのであつたが、別に何のこともなく其處を出たのであつた。勿論そんな事は、それから以後彼がそんな職を罷めてからも、彼女との交渉のつゞいてゐるあひだ、時々働きかけられた事であつたが、蔦代は何だかきびがわるくて、何うしても受入れる氣にはならなかつた。勿論二人の交渉は、そんな異性間の心持以外寧ろそれよりか悪い動機で續いたのであつた。そして其は、蔦代が宋さんと同棲することになつてから、一層の親密を加へて來たのであつた。

楊さんが歸つて來たのは、八月の初旬頃のことであつたが、それまで蔦代は時々宋さんに逢つたりなどして、不自由ながらもとにかく根津の方に暮してゐた。楊さんの歸つたことが、傳はりくして蔦代の耳に入つたとき彼女は何だかそんな約束をした時分の氣分が、すつかり薄くなつてゐるやうに思へたし、楊さんに濟まないやうな氣もしてゐたのであつたが、其には多少の辯解すべき理由も口實もあつたので、或晩その古巢の下宿を訪ねた。

あの時分も然うであつたには違ひないが、下宿へ行つてみると甚い寂れ方であつた。どの部屋もどの部屋も閑寂してゐた。楊さんはちやうど出かけてゐたので、蔦代は舊れた部屋で、上さんと暫く話してゐた。子供を抱へた上さんは一ト頃からみると又一層寢れてゐた。そしてあんな事があつてから悉皆人氣がおちたと零してゐた。早晚この家も人手に渡りさうだと云ふことであつた。

「楊さんにあの時の事など話さないでちやうだいよ。」蔦代は、格別それを深く氣にもしてゐないやうな安易な調子で言つた。

「それあ然うですとも。私の口からは言ふ氣遣ひはないんだけど、こんな事は知れやすいものですからね。」

そんな話をしてゐる處へ、楊さんが歸つて來たのであつた。彼は牛込の友人のところへ行つてゐたと云ふのであつた。

「到頭また貴方に歸つてもらへたわ、私どんなに待遠しかつたか。人の氣も知らないで随分ゆつくりだつたぢやありませんか。お國の人は氣が長いから私嫌ひよ。」蔦代は彼の顔を見ると、いきなり浴びせかけた。別に自分の弱點を分明意識してゐたわけではなかつたが、幾分脅し氣味であつた。

すると楊さんが閉口して、へたく／＼謝罪るかと思ひのほか、彼はひどく佛頂面をしてゐた。その目は暗鬱に激み、顔面の筋肉は硬ばつてゐた。

「あなた今どこにゐるです。貴女何うしてここにゐないです。」彼は先づ詰問した。蕙代は意外だといふ顔をしたが怕れなかつた。

「だつてお金ないでせう。私下宿料澤山たまりました。貴方お金送らなかつたぢやありませんか。」蕙代は笑ひながら言つた。どんな怒つた場合にも彼女は笑顔を放さなかつた。笑ひの神が始終彼女の腋を擦つてゐるやうに見えるのであつた。

「金送りました。たしかに送りました。貴女の當分の小遣には差間へることないやうに、私心配しました。」

「わたしの贅澤なこと貴方知つてゐるでせう。」

蕙代は云つた。非常に贅澤だと自分でさう思つてゐた。

「それ知つてゐるです。ですけども、此處にゐられない事決してありません。私みんな聞きました。貴女嘔吐きです。あなた私の約束守ること出来ませんでした。私の顔汚してしまひました。貴

女多勢我邦の人と關係しました。」楊さんは眞紅に怒つて、口早に言ふのであつた。

九

蕙代は「失敗つたー」といふ氣が初めて痛切に起つて來た。楊さんの正直なことも、怒りつぽい事も十分知つてゐながら、自分は餘りに無思慮なことをしてしまつたと彼女はその瞬間思つたのであつたが、しかし矢張何うにかなると云ふ自己安易があつた。

「そんな事、あなた何處から聞いて來ました。誰がそんな事言ひました。」蕙代はその場合にも顔を紅くしただけで、やつぱり眞劍にはなれなかつた。

楊さんは目を丸くして、蕙代を凝視めるばかりであつた。

「私事實聞きました。私友達みんな知つてゐるです。我國の人だちに、私はづかしいです。國の兩親に申譯ないです。」楊さんは目に涙を浮べてゐた。

「貴方そんなに怒ることないわ。それあ私だつて苦しまぎれに爲たことなんぢやありませんか。私

心から好んでした事ぢやないのよ。それも多勢なんて、それこそ嘘よ、ねえ、お上さん。お上さんが何よりの證人だわ。」蔦代は助を求めるやうに言つた。

「楊さん、どうぞ勘忍してあげて下さい。私もついてゐて、悪かつたか知れませんが、それは又色々都合もあつたんですからね。」

楊さんはちよつと困惑の色を見せながらも、感情は和げることが出来なかつた。

「私失望しました。私大變困るです。わたし貴女にお土産どつさり持つて來ました。指環も二つ靴のなかにあるです。反物もあるです、私歸りおそくなりましたが、それには色々家の事情がありました。私大變心配しました。貴女それ知つてゐる筈です。貴女人情ないです。」

「ぢや、あなた何うしても私を許してくれないの。」

「私友達の顔立たないですから……」

「ぢや可いわ。もう貴方にお願ひしないわよ。」蔦代も怒りだした。

「わたし悪いと思ふから、謝罪つてるのに、貴方がその氣なら、私だつて何にもいらないわ。指環なんか、お松さんにでも誰にでやると可いわ。」

「それ私自由です。」

そんな争ひをしてゐる處へ、彼の同胞が二人やつて來て、いきなり部屋へ入つて來て、まるで謀し合せてでもあつたかのやうに、此場の光景に冷笑の目を注いだ。そして三人のあひだに彼等本國の言葉が口早に取交されると、楊さんは彼等に促されでもしたやうに、上さんに向つて、

「私下宿替ります。これから直ぐ行きます。私はづかしいですから、此處に居ることできません。」

そして彼は此の二三日の勘定書をもつてくるやうに、上さんに言ふのであつた。それと同時に引越に俾をも頼んだ。

彼等三人は、蔦代に取合はうともしなかつた。蔦代も何にも言はずに、不機嫌な顔で、そこに打坐つたきりであつた。彼等は連に何かしやべりながら次の室へ入つて荷物の整理に取かゝつた。勿論それには可也の時間がかゝつた。そして上さんや蔦代も、いくらか手傳つたのではあつたが、要するに雙方の不味い氣持は、逆も釋けさうもなかつた。

荷造りをするのに手間が取れて、つい夜もおそくなつてしまつた。それにピアノなどもあるのでそんな物は翌朝にすることにした。

「大きに御厄介でした。」楊さんはさう言つて、上さんと蔦代に挨拶した。他の二人は敵對態度を取るやうに黙つて出ていつた。

「是は是として、またお遊びにいらつしやいよ。」と上さんは言つた。

楊さんは牛込へ越すのだといふのであつた。

そして其きりであつた。

同居

一

その夏の末に、蔦代は宋さんとしばらく赤坂に潜んでゐたことがあつたが、野田の處へ行けばまた意見をされるだらうし、他に遊びに行くところもなかつたので、蔦代は時々自分に好意をもつてゐる佐久間の家へ遊びに行つた。彼女は自分に利益であらうと不利益であらうと、眞實の好意であらうと阿諛であらうと、そんなことには多くの省察を拂ふことはできなかつた。甘い言葉をかけてくれるものの方へ、誰によらず氣が向いて行つた。彼女は彼女なりにもつてゐる自分の誇を傷つけるやうなもの好まなかつた。

佐久間の上さんは、ちよつと絲道があいてゐたところから、佐久間も顔に似合はない好い聲を出して、唄を謳ふことを知つてゐた。で、蔦代にも何か弾いてみないかとか、謳つてみないかとか言つて唆かした。

「何かやれさうぢやないか。え一つやつて聞かしてくれないかね。君の方の人はみんな追分節が巧

いぢやないか。」佐久間はそんな風に言つた。不思議に彼は酒は餘り飲まなかつたが、さう云ふ藝事は好きらしく見えるのであつた。

葛代は赤面した。實際彼女は何にも出来ないものであつた。

「私何にもできませんわ。」

「そんな事ないでせう。何かおやりなさいよ。」人の好きさうな細君も勧めた。

彼等は二階で涼んでゐるのであつたが、葛代はもう度々やつて来て、細君とも懇意になつてゐた。それに裁縫嫌ひな葛代は、着物の仕立直しなどを、この細君の處へ持込んでゐた。細君はそんな細かいことを、何彼と相談に乗つて世話をやいてくれたが、葛代が金銭上のことに淡泊といふよりは、寧ろ不檢束ふしだまなのを勿體ないやうに思つた。

「支那人でなしに、日本の人を御亭主におもちなさいよ。私がお世話しますよ。」などと彼女は親切に言つてくれたが、葛代はそれには餘り耳を傾けなかつた。勿論彼女も、餘り長く支那人にばかり係合かひりつてはゐられないやうな氣はしてゐたのであつた。今の宗にしたところで、當分の繋ぎに爲方なし喰着くわくいてゐるので彼等同胞先輩が宗さんのために、彼女を引放さうとしてゐることも、明かで

あつた。あの事件以來、彼等の或者はみんな葛代を警戒してゐるのも事實であつた。何かおそろしい莫連者もれんしやでもあるかのやうに、葛代が彼等の目に映つてゐるらしかつた。

「そんな事を言つたつて駄目だよ。葛代さんは支那人が好きなんだから。」

「さうですかね。」

「支那人にはまた好い男がゐるからね。南京男色男なんきやうしきやうつて、昔からさう言ふぢやないか。」佐久間は葛代の機嫌を取るやうに言つた。そして、「葛代さん、あんた花はやらんかね。」

「お花ですか。」と、葛代は紅い顔をして、「花なら時々やつたことありますわ。ですけども私いくらやつても解らないんです。」

「何なにに勝負事は運まわさ。大して上手下手はないさ。一年ばかりやつて見ようぢやないか。」

「家ではみんなが下手の横好きなんですよ。」

そして細君が下から花札をもつて來た。色んな道具が揃つてゐて札も二組もあつた。

「家ぢや札がいくらでもあるんですよ。」細君はさう言つて、そこへ坐蒲團ざぶたんをおいて、札や石いしを打まけるのであつた。

「どれ葛代さんのお手並を一つ拜見しようかな。」などと、彼は大きな手で札を混交しながら、「何うだ、阿母さんが手がすいてるやうなら、お入りになりませんかつて訊いてこい。花は多勢の方が面白。」

やがて下から佐久間の母親も上つて来て、そこへ坐つた。

二

佐久間の隠居は、九州邊の士族階級か何かの出だともみえて、男のやうなぎどこちない辯を使つてゐたが、碎けたところもあつて、酒でも飲ませれば此も唄の一つぐらゐ謳つて燥ぎさうな氣樂らしところをもつてゐたが、その隠居も加はつて、花が靜かに引かれたのであつた。

葛代は下町の方で、少しは札を手にしたこともあつたが、かいなでの素人で石の勘定などもさつぱり頭腦が働かなかつた。勿論興味も感じないのであつたが、宋さんと言争ひなどしたときの逃避場所には、こんな處へでも立寄つて時間を消すより外爲方がなかつた。

「いやあ、こいつあ困つたな。三くだと思つたら、二くだつたか。一丁かはればな。」などと、佐久

間は札をあつち此方眺めた果に、札をそこへ投出すと同時に、葛代の方へ身を摺寄せて來た。

「どれ〜、己が見てやらう。」などと、彼は口髯をしごきながら、葛代の手を覗いた。

「駄目だわ、わたしこんな汚い手嫌ひだわ。」と葛代は甘えるやう、不平さうに言つた。「あなた私に悪い手ばかりつけるんですもの。」

「そんな馬鹿な奴があるものか。そんな悪い手ぢやない。それが悪くちや、好い手はない。そらそんな好い物があるぢやないか。それさへあれば可怕いものなした。遣るべし〜。」などと彼は使噓けるやうに言ふのであつた。

「さう。」と葛代も思はず乘氣になつて、はだけた膝頭の裾を掻合せながら、「ちや私も行つてよ、奥さん。」

「今度貴女にやられましたね。」と、細君はお挑らかすやうに言つた。

「おい、そんな事言つてゐないで、早くやらんか。」と、佐久間は邪慳さうに細君に劍突をくれて、「お前のやうにさう出が勝つちや爲様がないな。少しは慎重の態度を取れよ。」

そして彼は狡黠な目を光らせながら、苺をふかしはじめた。

「どうせ慰みぢやありませんか。どん／＼引かなげや損だわ。」そして彼女は、懐かな指頭から札を
手際よく棄てた。

「さあ、阿母さん何うです。それが有りますか。」

「無いですよ。向きつけられて私はづかしいわい。」と、隠居は洒落を言ひながら、棄てたりめくつ
たりした。

「それ／＼、阿母さん洒落どころぢやないぜ。こつちが待つてゐたんだ。坊主々々！」などと、佐久
間は蔦代のもつてゐる札のなから一枚抽取つてやつたりした。

蔦代はそれを前に並べながら、いくらか氣乗りがしたやうに、熱心に場と自分の手とを見比べて
ゐた。

そんな風に、佐久間は自分が落ちるたんびに蔦代の傍へ寄つて来て、世話をやいたが、結局その
一年では、彼女の成績が餘り悪くなかつたところから、思はず調子のはずんで、二年も三年も續け
さまに引くのであつた。

「なか／＼隅におけないな。それに君はめくりが甚く利くよ。今度は一つ後見なしで引いて見るん
だね。」佐久間は言つた。

「それあ然うですとも。能ある鷹は爪を隠すつていふことがありますからね。」細君が調子を合し
た。

「ぢや何うだ、餘り無駄つ花といふのも興味が薄いから、少しばかり賭けることにしちや。」

「え、それが可いわ。」蔦代は應じた。

佐久間がその額を決めたところで、その場の氣分が遽に緊張して來た。そして石が注意ぶかく銘
銘の策に分けられた。

びしツ／＼といふ札の音が、夜おそくまでしてゐた。

何んの彼んの言つて、ちよいちよい帯の間から出してはらつてゐるうちに蔦代はその晩多くもな
かつた小使をすつかり叩かされてしまつた。

三

蔦代が佐久間のところへ遊びに行くばかりでなく、佐久間もまた何うかすると、蔦代の家を見舞

つた。こゝは佐久間が以前赤坂にゐたときから知つてゐる家だと言ふので、實は佐久間が周旋した家なのだが、下は道具屋の店になつてゐて、古い安ものの陶器だとか、軸物だとか、鼻や耳のかけた木像があるかと思へば、五行や錦繪があつたり、根つけや緒締蟲眼鏡のやうなものが、ごちやごちやしてゐた。

葛代は宋さんと相談づくでか天井の低いこゝの二階へ来て、しばらく同棲することになつたのであつたが、何時ぞやのことに懲りてゐるので、宋さんがひどく恐れてゐるのを、葛代はとにかく宥めて連れて來たのであつた。彼は碌々學校へも通はないで、それ以來葛代の傍にばかりへばり着いてゐた。支那人仲間が、時々様子を見にくるやうになつたのは、それから大分たつてからであつたが、宋さんのところへは本國の姉から諫言の手紙が來たりして、彼はそれを讀むと、さすがに胸が迫つて、暗い悲しげな顔をして鬱いでゐた。葛代はそれを見ても一向意味がわからなかつたが、花柳……とか、折花何とかいふ文字だけは、自分のことを言つたものだと言ふ氣がした。宋さんはそれを見て獨りで沈吟に沈んでゐたが、でもやつぱり葛代から離れて行くことはできなかつた。「あなたのやうな意氣地なしなわ。」などと葛代は彼を嗤つた。

「楊さんでらんなさい。私のためにあんなにとつさりお國からお金を取寄せて、色んなものを買つてくれたぢやありませんか。それからお國から歸つてきた時も、指環や何か、高いものを澤山もつて來たちやありませんか。それも私、貴方のために、あの人の信用をなくして、一つも貰へなくなつてしまつたんだわ。わたし貴方のために眞實に好い運を取はづしてしまつて、酷い目に逢つたわ。」

さう云ふ風に、彼女はつけ／＼言ふのであつた。

宋さんは何一つ口を返すことができなかった。葛代にすまないと思ふだけであつた。勿論宋さんを葛代は餘り好いてもゐなかつたが、あの事件以來妙に棄てがたいやうな氣持ちになつて、いつまで引つ懸つてゐても爲様のないことは判つてゐながら、差當り彼によつて生活するより外なかつた。彼は學問をまるで忘れたやうに葛代の愛に溺れてゐた。葛代が嫌つて、彼を拒否するやうなことがあると、彼は悲しげな惱ましい表情をして、怨みを含んだ目に涙をためてゐた。しつこくされる

と葛代は彼を打つたりなどした。さすがに彼は怒つた。そして外へ飛び出した。下の店をやつてゐるお爺さんが佐久間の第二の父だといふことが一ト月も居るうちに段々わかつて來た。彼は比較的年の若い上さんをもつてゐたが、その女のために妻——佐久間の母とも一緒に

おられなくなつて、こんなところに道具屋を出してゐるのらしかつた。彼もさう卑しい人間ではなかつたが、蔦代たちがここで世帯の持ちたてには、色々な世帯道具を彼女に賣りつけた。七輪だの、釜だの、鐵瓶だの、又は火鉢、食卓、椀、皿といふやうなものまで、宋さんは蔦代に言はれて買はせられた。

そこへ佐久間もふらりと遊びに来るのであつたが、宋さんと三人でビールなど飲んだり、又は店から碁盤を持つて来て、黑白を争つたりして、夜おそくまで話込んで行つたりした。蔦代は家へ行つた時より、ずつと安易な我儘な氣持で彼と對合つてゐることができた。次第に佐久間の足がしげくなつた。そして時とすると泊りこんで行つたりした。寝ついてしまふと、死んだやうになつて一切何にも知らない宋さんの顔を覗き込みながら佐久間はそつと蔦代に話しかけたりした。

四

脂肪くさい蒲團のなかに、ぐつすり寝込んでしまつて、嵐が吹いたか雨が降つたか、傍にどんな事件が起りつゝあつたか、そんな事は少しも知らない宋さんは、朝目がさめても、佐久間といふ日

本人が、そこに寝てゐることに、何等の疑ひや嫉妬を感じないらしい風であつたが、それも表面で餘り好い氣持はしないらしかつた。勿論蔦代と佐久間とのあひだに、別に何のこともないのが當然だと思はれた。蔦代の口吻によつて見ても彼女の佐久間に對する氣持は、さう云ふ風のものではなかつた。寧ろそれとは反對に、異性として嫌惡の情をさへもつてゐたのであつた。

「あの男ほんたうにいけ好かない奴だよ。」誰にでも餘り好惡の感じの動かない蔦代も、蔦では佐久間をさう云ふ風に言つてゐた。

但だこの男に睨にらまれると、何彼に面倒だと云ふ氣が蔦代はしてゐた。いつどんなことで、又舊の巢窟へ逃込まなければならぬかも知れないので、そんな時に佐久間の崇りが残つては困ると云ふ意識が彼女の心に本能的に働いてゐた。そして又佐久間の氣分には、確かにさうした威壓的なところがあつた。

宋さんには殊にもそれが感じられた。たとひ蔦代と佐久間との接觸がどう云ふ風のものでないにしても、蔦代の後ろに佐久間の附いてゐることが、彼に取つて氣味のわるい脅威であることは争へなかつた。殊にそんな事が度重なると、どんな聯絡が二人に着いてゐるか判らないと云ふ氣がして

自然に神経質な猜疑の目を彼等のうへに働かせるのであつた。それに悪くすると手がさはつたり足がさはつたりするやうな位置に、二人はおかれてゐるのであつた。

佐久間は宋さんと蔦代とのあひだの、エロチックな問題について好奇心をもつてゐるらしく、蔦代に色々のことを訊くのであつたが、蔦代もそれには壓迫を感じてゐるので、宋さんを前において平氣で素破ぬいたりした。それに要求するだけの金が、本國から來ないので、一緒にゐても詰らないと云ふのであつた。宋さんはそんな詳細にわたつた二人の間の話などは解らなかつたが、佐久間がひどく煙つたいもののやうに思はれてならなかつた。

「昨夜は面白かつたね。已達が何を話してゐたか、君はちつとも知らないだらう。」などと佐久間は宋さんに訊いた。

「シツ。」と蔦代は佐久間に目配せした。

「君がこの人を自分のものにしておかうと云ふのなら、もつと澤山金を取寄せなくちや可かんよ。こんな貧乏暮しをさしておいぢや、可愛さうぢやないか。」佐久間は脅かすやうに言つた。

宋さんには微にその意味が解るらしかつたが、日本語はまだほんの簡短なことしか話せなかつた。

彼は惱ましげな表情をして二人の顔を見比べてゐた。

佐久間の態度は段々露骨になつて來た。そしてそれに對する蔦代の防禦は、彼が今のやうな役を勤めてゐるあひだは厭だといふことに過ぎなかつた。蔦代はそれ以外の口實を見出すことができなかった。

「何だか、可怖いぢやありませんか。」蔦代は言ふのであつた。「會社の勤人のやうな人私好きなの。お醫師も好いわ。」二人は宋さんの寢てゐる傍でそんな話をしてゐたのであつた。

「おれもさう思つてゐる。勿論こんな事を長くしてゐるつもりはない。」佐久間は應へてゐたが、しかし何かを求めなければ、飽足りないと云ふ風であつた。

蔦代はそれを禦ぐのが困難であつた。さう素氣なくしてばかりもゐられなかつた。

五

蔦代は佐久間のところへ遊びに行けば、きつと花が始つて引けば決つて某かの金を取られる、佐久間が宋さんの留守を覗つて遊びにすれば、きつと厭なことを言はれる上に、何うかすると脅かさ

れたりするので、何うかして彼の目の觸れないところへ體を隠してしまひたいと希つてゐた。それに下の爺さん夫婦と臺所が一つなので何彼に不便が多かつたのみならず、米や炭や醬油などを偷掠られるやうなことが不斷であつた。

「わたし厭になつちまふ。あんなに澤山あつたおしたじがもう無くなつてしまつた。」葛代は宋に言つたが、宋さんはその意味がわからなかつた。

「私隨分氣をつけてやつてゐるのに、するいお上さんね。」

然しそれはそれで我慢できるとしても段々寒さに向つて来て、水に手をつけたり、穢味噲を弄つたりすることは、彼女に取つて何よりも苦痛であつた。勿論、北の雪國産の彼女の肌理は細やかで滑らかで、比較的手の荒れる心配はなかつたが、毎日々々食事の支度をしたり、後片着をしたりすることは、可也煩はしい厭な仕事であつた。で、彼女はどんなに懐ろの淋しいときでも、宋さんを誘つて、外へ物を食べに行つたり、店屋物を取つてたべたりした。そんな習慣はもう長いあひだのことで、それができなければ、毎日々々生きてゐる空もないのであつた。それに宋さんも可也食意地の張つてゐる方であつた。

「私また舊の商賣をやらうか知ら。」葛代はいくら宋さんを責めたところで、叩いたところで、金を餘分に送つてもらへようもなかつたところで、時々そんなことを考へてゐた。

或日葛代は宋さんにも其事を明して、以前自分を最辰にしてくれた下町の家の上さんを訪ねて見た。そこでは一頃の寂れを取返して、そんな種類の女が水が低いところへ流れていくやうに集つてゐた。彼女は晝間だけ時々通つて来る契約を、この上さんと取替して来た。

「ね、晝間だけなら可いでせう、それもほんのお座敷へ出るだけよ。」

「それ私かまひません。」宋さんも承知の旨を答へた。

しかし晝間だけのつもりでも、つい話しこんだりしてゐるうちに他の客が上つてきたり、座敷が長くなつたりして、夜になることもあつたし、終ひには宋さんに悪い悪いと思ひながら、歸るのが臆劫になつりたした。それに外出が多くなると、貧乏くさい世帯が一層厭になつて、天井の低い二階を見るのも厭なやうであつた、宋さんもひどく不便を感じてゐた。

或時葛代たちはしばらく佐久間の足の遠退いたを幸ひに世帯をたゞんで、下宿へ移ることにした。佐久間は葛代にも失望してゐたし生活が贅澤な割に思ひのほか金の融通が利かないところから、最

初ほど、しげしげ足を運んでこなかった。

二二六

牛込は鬼門だつたし、神田も佐久間に睨まれてゐるやうで、ぞつとしなかつたが、それは又何うにでも胡魔化せると思つたところでわざと駿河臺の或下宿へ彼等はいきなり落着いた。そして其事を引越してからわざ／＼佐久間の家へ報告しに行つた。さうしておけば安心だと思つたからであつた。その場／＼を胡魔化することに、葛代は不思議な愛嬌と氣軽さをもつてゐた。

「經濟は何うするのかね。」佐久間は笑ひながら言つてゐたが、大概想像がついてゐるらしかつた。「おれの目のとどかない處だつたら、知らん顔でゐられるんだからね。」

そして彼女はいつとはなしに、祕密を守つてゐられなくなつてしまつた。

二階の男

一

翌年の晩春頃に宋さんは休みがちな學校の月謝なども滞つてゐたし、無論試験も駄目だつたのでひどく憂鬱に陥つてゐた。健康も優れなかつた。彼のために心配してくれてゐた二三の先輩も、葛代に溺れきつてゐる彼を何うすることも出来なかつた。醫師の診断によると彼は激しい神經衰弱に罹つてゐるのみならず呼吸器も餘り丈夫ではないと云ふのであつた。氣の弱い彼はすつかり減入込んでしまつて、連に本國を懐かしがつた。姉の方からも一旦歸國しろと云ふ手紙が、その頃と似たところで、彼はもう我慢ができなくなつてしまつた。で、或日彼はかつ／＼の旅費を懐ろにして、葛代と別れて東京を出發した。

葛代も實はそれを庶幾つてゐたのであつた。秀才だといはれてゐた彼も、家が餘り裕でなかつたのに、體も蒲柳の質であつた。あんな事件があつた爲めに、可哀さうになつたところへ、楊さんへの意氣張なども多少あつて、今までは一緒に暮して來たのであつたが、學校が駄目だといふことが

二二七

判つてみると、何も彼も絶望だといふ氣がした。いつまで關係しても際限がないと思はれた。「體が丈夫になつたら、また出ておいでなさいね。」と、葛代は姉への土産として、客からもらつてあつた紙入や伏紗ふしのやうなものを、惜げもなく彼に與へなどして、別れを惜んだ。宋さんからは、歸つたら斐翠を送るといふ約束になつたので、「斐翠を送ることを忘れないようにね。」と、葛代は汽車に乗つてからも言つてゐた。

本國の友人といつては誰一人彼を見送るものもなかつた。彼は逃げるやうにして窺さぐと東京を立つたのであつた。

葛代は彼が角袖の男に踏んだり蹴たりされたことなどを思ふと、別れ際の氣持は餘り好くはなかつた。それからすつと佐久間と二人して、自分も可也彼を窘こぢめて來たやうな咎とがめを感じないではゐられなかつた。それに最近では、外で夜更しをしたり、寢泊ねとまりをするやうなことが多くなつて、歸つて來ても、彼に辛く當つた。彼が姉の手紙を見て泣いてゐたりするのを見ると、氣の毒とは思ひながらも癢かゆにさはつて「意氣地なしだ」の、「薄野呂だ」といつて、罵らすにはゐられなかつた。自分の方が少し残酷で我儘だとは氣がついてゐながらも、つい侮蔑くわつてつと苛責かしゃくの辭ことばを浴せかけずにはゐられなかつた。

れなかつた。

その上彼女は、この頃同宿の一人の青年に目を惹かれてゐた。それは彼女の部屋を隔てた、向の二階にゐる早稻田の工科の學生だとかいふ二十三四の男であつたが、下の葛代の部屋にすわつてゐると廊縁の明るみへ机を据ゑて、毎日こつ／＼ノオトを筆記したり、本を讀んだりしてゐる彼の上半身が見るともなしに彼女の目に觸れるのであつた。勿論今でも其の第一印象が目にちらついてゐる新田のそのやうに、柔やわかみと優やさしみのある顔を、彼はもつてはゐなかつたが、寢ても起きても顔を見合つてゐる暗い宋さんとは、比べものにはならないくらいにの明るさがあつた。

初めは何の氣もなしにゐた。そして二階から不用意な亂次だんじのない自分の姿を見おろされてゐることに氣がついたりなぞすると、何とはなし淡い反感が起つて、「何だ、日本の女が支那人と一緒にゐるのがそんなに珍らしいのか。」と腹だたしさを感じて、わざとびしやりと障子を締めたりしたものであつたが、するうち彼女は少しづつ彼の印象が自分の頭腦に何ものかを刻み／＼して行くのを感じた。

洗面所などで、近く彼の體全體を見たりした。聲を聞くことも出來た。

宋さんが東京を立つてから大分たつて、蔦代は或日上海からの彼の電報を受取り、それから少したつてから、家へ落着いたと云ふ手紙を受取つたのであつた。電報では旅費が無くなつて動けなかつたと見えて、金を二十圓都合して送つてくれと言つて來た。蔦代は幾年もたつてから、時々その時の宋さんの窮迫を憶ひ出しては、都合すれば出來ないこともなかつたのを、わづか五圓ばかりしか送つてやらなかつた自分の其時の鄙吝な心を愧ぢ悔ゆるのであつたが、その時は年が少かつたので、それ程の思ひ遣りもなかつた。家から來た宋さんの手紙は、絶望的のものであつた。彼の健康状態や家庭の四圍の事情が、今まで蔦代に溺れてゐた彼の心を鞭つに十分であつた。これにも蔦代はその後時々感じたやうな悩みを、その時は感ずることはできなかつた。一緒にゐるあひだ彼を虐げたことを強ち心に咎めないではなかつたが、その代り自分のもつてゐる最も大切なものを、同胞が侮蔑する異邦人に割き與へたのだと思ふと、酬いられるところは甚だ鮮いのだと云ふ感じがした。勿論彼女のあわたゞしい生活は、そんな省察の餘裕を彼女に許しはしなかつた。一時も一所に停滯

してゐることを背じないのが、彼女の現實生活であつた。で、宋さんがあわたゞしい、遺瀾ない氣持で書いたらしいその手紙を見ても、淡い哀愁は感じながらも、それを深く考へてゐることは許されなかつた。

「宋さんも可哀さうだつた！」彼女はそれを考へようとする、暗い厭な氣持になるので強ひて忘れようとした。

晝でも夜分でも外へ出て人に接してゐる間は、何彼と氣が紛れてゐて格別思ひ出しもしないのであつたが、宿の部屋へ歸つて、彼の始終倚つてゐた机だとか、座蒲團だとか、又は彼の所持品のこま／＼した物などが目に觸れると、何となし氣が痛んだ。

ある日二日ばかり留守にしてゐた宿へ還つて來ると、彼の異那人特有の匂のまだ残つてゐる部屋のなか、ひどく空虚に寂しく思はれて爲方がなかつた。一體が日の目を見ない陰鬱な部屋で、窓の前には嚴重な煉瓦の高屏が、いつもじめ／＼してゐるのであつたが、今日は殊にも頭腦を壓れるやうな鬱陶しさを感じた。もう五月にもなつたので明るい外から歸つてくると、一層それが目に立つた。

葛代は酒を飲み過ぎたせゐか、頭腦が痛いので、今日は一日寝ようと思つて、着替をしながら、縁側へ出て汗ばんだ肌着などを干すべくそこにおいてある椅子のうへに擴げてゐると、ふと二階の手摺のところから、洗面器の水をこぼしてゐる、看護婦の姿が目に入った。

「はてな！」と、葛代はふと胸をどきつかせた。看護婦のゐるのは須崎といふ例の工科生の部屋であつた。

「須崎さんが病氣なんだ。きつと然うだ。それに、看護婦が入るくらゐだから、重いにきまつてゐる。」

葛代はさう思ひながらも、室内へ入つて晴着を疊んでゐたが、後で女中に聽いてみると、須崎が急性の盲腸で、一昨日の午後醫師を上げるやら、國へ電報をうつやら大騒ぎをしたといふのであつた。それで體を少しでも動かしては危険だといふので、病院へ入れることもできないで、あゝして看護婦をつけて、ちつと臥たきりになつてゐるのだといふのであつた。

「さう、あんな温順しい方がね。」と、葛代は呟いてゐたが、眠かつたので、その時はそれで床をしいて寝てしまつた。

三

葛代は蒲團のうへに腹這になつて、先刻歸りがけに買つて來た櫻實を摘みながら、連に食つてゐたが、そんな果實を食べるときには、きつと田舎のことを想ひ出してゐた。野田の庭に實つた巴旦杏や李、または自分の家の背戸にあつた梅などを、青いうちから竿でおとして、ぼり／＼食べたことなど、つい近頃まで彼女は青梅を店頭に見出すと、買つて食べずにはゐられなかつたが、今は可怖いやうな氣がして、ちよつと手が出なかつた。

櫻の實の種が、直に茶呑み茶碗に一杯になつたところで、ふと二階の男が盲腸に罹つてゐることに氣がついて、それと同時に何うやら横腹が痛いやうな感じがしたが、口でも始終さう言つてゐるとほりに、死といふことを人のおど／＼怖れてゐるのに、寧ろ反感を覺えるくらゐで、命を厭ひ大切にすることがひどく贅澤なことに思はれてゐた。宋さんが呼吸器が少し悪いといつて、鬱いでゐるのを見ても其事では別に同情も起らなかつた。寧ろ可笑しく思ふくらゐであつた。

「何だね、肺病なんか。死ぬのがこわくて生きてゐるもんですか。わたし死ぬことなんかちつとも

可怖いと思つてやしない。困れば何時だつて死んで見せるわ。」葛代は、口癖のやうにそんな事を言つてゐた。

でも、二階の須崎といふ男の病氣は、不思議に氣になつた。盲腸などと云ふ病氣が、既に彼女の體の纖弱な割に、これと云ふ病氣をしたことのない今迄の生活から見ると、何となく自分とは縁遠いもののやうに思へてゐたし、都會の人はとかく病氣を大業に考へて直ぐ醫師を呼んだり、看護婦を上げたりして騒ぐのが、餘計な誇張か外見のやうにさへ思はれてゐたので、須崎の病氣を、それほどの事とは實感的には何うしても思へないのであつたが、しかしあの愛らしい丸い顔をした温順な青年が、若い看護婦などに世話をやかかれて、臥たきりであるといふことが、何となく彼女の寂しい甘い氣分を咬つた。あの人がどんな顔をして寝てゐるだらうか、看護婦とどんな話をしてゐるだらうと、そんな事が考へられた。

葛代はそれでも、紙入にあつた寶丹を少し飲んで、其まゝ仰向きになつたが、疲れてゐたので、そのうちうと／＼と快い心持に眠れて來たが、目がさめた時はもう夜で、隅の方へ引張つた電氣が薄赤くついてゐた。そして其がひどく寢覺の彼女の氣分を減入らせた。何時だらうと、周圍の氣勢

に氣を配ると、下宿や外の人通りの様子で可也夜の更けてゐることが感ぜられた。で、咽喉の渴きに訴へたので、部屋を出て洗面所の方へ出て行くと、二階の看護婦がちやうど氷を入替へに來てゐて、物珍らしさうに彼女を眺めてゐた。

葛代もどんな看護婦かと思つたし、事によつたら須崎の見舞くらひ言ひたいと思つたので、此方からも彼女の様子を探つてゐたのであつたが、不思議なことには、その女が同じ町で一つ學校に出てゐたことのある娘であることに氣がついた。葛代よりは上級だつたので、勿論名前は忘れてしまつてゐたが、家はどこか昔の士族屋敷の多く荒廢したまゝに遺つてゐる町の方にあつたことだけは確かだ、葛代などから見ると、ずつと上等な階級に屬する勤め人であつた。葛代はその娘が看護婦になつてゐることを知ると、子供の時分畏れてゐた彼女の家も、案外與し易いものだといふ氣がした。

「あなた知つてゐますわ私……。」葛代はいきなり言葉をかけた。

「はあ、私も何だか知つた方だと思つてゐました。」彼女も葛代を凝視めた。

「貴女の名を何と仰しやつたか私覚えてゐませんのよ。ですけれど先刻から何だか見たやうなお顔だと思つてゐたんですよ。」そして葛代はコップをゆすいでゐた。

「私も貴女に見覚えがありますよ。貴女の姉さんも知つてゐますよ。私は安藤といふんですわ。」看護婦は砕いた氷を、少しづつ氷嚢に詰めながら答へた。

「姉も東京にゐますよ。」葛代は言つたが、自分の身の上を考へると、此女と口を利いたのが失策であつたやうに思へた。

「眞實に世のなかは廣いやうで狭いものですわ。」葛代は呟いた。

「眞實にね、何處にどんな人がゐるか判らないものね。貴女は失禮ですが、こゝの何なんですの。」私下宿人ですの。」葛代は應へたが、顔が紅くなつた。そして大切なことを忘れたといふ風で、「それで御病人は何うなんですの。」

「患者さんですか、まだ明白したことは判らないんですわ。多分手術の必要はあるまいと言ふんで

すがね。」

「手術ですつて。お腹を切るんですの？」

「盲腸は切らないと、生命にさはることがあるんですよ。でもあの方のはそんな心配はなささうですよ。此分なら安静を保つてさへゐれば、恢復するだらうつて、先生が仰しやるものですから、今日お晝に、お父さんも田舎へお歸んなすつたんです。あの方も、もう心配はないから居なくとも可いつてさう言つてね。」

「私ちつとも知らなかつたんですよ。須崎さん病氣だと聞いて、叱驚してしまつたわ。」

「御存じの方。」

「うゑ。」

看護婦の安藤は、氷を詰替へると、やがて「御免なさい。」と言つて、そのまゝ二階へ上つて行つたが、葛代は多分自分のことを須崎が女中に聞くだらうと思ふと、急に不安になつて、氣が痛んだ。勿論不斷から口留めはしてあるのではあつたが、安心はできなかつた。しかし其後から直ぐ知れるなら知れても介意やしないと、諦める氣になつて、深い悩みも感じなかつた。

その晩は、質屋へ少し利あげの用事などもあつたし、氣を紛らせようと思つて、小川町から神保町の方へ出て行つた。知つた支那人にも逢つて、下宿へ遊びに来るよろしいなどと戯れられたが、宋さんに少し懲りた後でもあつたし、下宿や佐久間の前もあるので、「また其のうちに。」と言つて色色の人の消息などを立談に聞いて別れた。楊さんのことなども聞いてみたが、近頃久しく逢はないけれど、眞面目に勉強してゐるさうですと、答へただけであつた。

その歸りがけに、蔦代はパン菓子の木ノ葉だの、何かえらくのついた安菓子などを一袋買つて安藤への土産とも病人の見舞ともつかず、須崎の部屋へ持つて行つた。

「御免なさいまし。」蔦代はそつと廊下から聲をかけた。

部屋の手前に立つてゐたので、須崎の寢床の裾の方が見えるだけで、顔はわからなかつたが、傍に本を讀んでゐる安藤は全身見えた。緒ら顔の、骨組の嚴重な中背の女であつたが、輪郭が割合に整つてゐるので、さうして坐つてゐる横顔は、ちよつと美人に見えるのであつた。彼女は蔦代の聲が耳に入ると、本から目を放して、廊下の方を見た。そして互につこり目笑した。

「入らつしやいな。」

「お寢み？」と、云ふ風に、蔦代は手枕の眞似をして、首を傾げて見せた。

安藤は軽く頷いて見せた。

「わたし貴女にお茶菓子をもつて来てよ。ほんとに失禮なものなの、須崎さんのお見舞と言つては……。」蔦代は部屋へ入つて、袂から袋を出した。

五

「そんな事をして戴いちや、濟まないわ。」安藤さんは小説本を伏せて、手を延ばして座蒲團を取つて、そこへ押遣りながら、「どうぞ。……お茶でもいれますわ。」

蔦代は安藤さんと同じ病床の側面に坐りながらなか／＼好い蒲團に寝てゐるのだなどとそんな事を考へながら、少し後向きになつてゐる病人を眺めてゐた。さう甚く衰弱してゐるとも見えなかつたが何となく痛々しく思へた。

「お寢つていらつしやるのね。」蔦代は微聲に言つた。

「は、今し方まで目をさましていらつたんですわ。」

「病氣つて好いものね。何だか私も病氣してみたいやうな氣がするわ。」葛代は笑ひながら。「貴女
それ小説？」と伏せてある本に目をやつた。

「は、須崎さんのですわ。面白いのよ。」

「私も小説好きよ。だけれど、何時讀んでも華族さまのお嬢さまだとか、金満家の息子さんとかばかりだから厭になつてしまふわ。小説家なんて、少しは私達のやうな女も書いたら可いちやありませんかね。」

「それあ又そのも有つてよ。」

「それ戀愛小説？」

「戀愛もあるのよ。それあ可哀さうなのよ。或女が相愛の男に棄てられて、それに同情してゐるその男の友人と段々戀愛關係に落ちていく徑路がね。」

そして彼女は熱心にその筋を語りだしたが、葛代には何だか空々しくて、同感する氣にもなれなかつた。小説なんて皆好い加減な嘘を書いてゐるに過ぎないのだと思はれた。

安藤さんは夫から色々の小説家や其の小説の作風などについて、熱心に話したが、葛代には

何の興味もなかつた。するうち須崎が目をさまして、少し此方へ顔を向けた。氷嚢が少しづらかつたところで、安藤さんは急いで其を直しながら。

「あの方が入らしつたわ。葛代さんが。さつき貴方に話したでせう。」

患者は心持ち寂しい微笑を浮べた。

「わたし貴方の御病氣のこと、些とも知りませんでしたわ。」

「イヤ、大したことないんです。」須崎は細い聲で言つて、「安藤さん、そこに水菓子があるから、

お上んなさい。」

机の下に、オレンジだの林檎だの櫻實、夏蜜柑などの一籠があつた。安藤さんは「有難う。」と言ひながら、其中からナイフと一緒に少しお盆に取出して、葛代の前へ差出した。

「あんたお食んなさい。」

「私水菓子好きですれど、先刻どつさり食べて、少しお腹が痛かつたのよ。」

「僕にオレンジを少し下さい。」須崎が要求した。「もう大丈夫でせう。」

「それあ少しくらゐはね。お汁だけ吸ふくらゐにして置きなさいね。」

「私判いてあげてよ。」そして葛代は軟かな手に、肉を袋から剥取りくして茶呑茶碗に入れた。

「あの支那人何うしました。」須崎はオレンヂの肉漿を少しづつ吸ひながら葛代に話しかけた。葛代は紅い顔をしたが、大して狼狽もしなかつた。

「貴方によろしくつて、お國へ歸りましたわ。私あの人嫌ひなの。人に瞞されて暫く一緒にゐたんですけれど、でも……。別に異りはないのよ。顔だつて何だつて。」

「毎日喧嘩してゐた様ですね。」須崎は微笑した。

「それあ甚い嫉妬やきななのよ。」安藤さんが餘り話して熱が出ても可けないと言ふので、須崎は黙つてしまつた。葛代も直に部屋を出てしまつた。

六

それが機縁となつて、葛代は時々二階の病室へ顔を出したが、安藤さんも病室が氣窮りになつて来ると、息をぬきに葛代の部屋へおりて来て、足を投出しなどして遊んで行つたり又は葛代の鏡臺の前に坐つて髪を取上げたりするのであつた。安藤さんの話によると、彼女は田舎で一度商人に

縁づいたのであつたが、姑が難かしいのと、商人が嫌ひなために其處を逃げ出して東京へ出て来た。産科がその目的であつたが、好い手廻もなく、學資もないので今は或看護婦會の世話になつてゐるといふのであつた。葛代も嘘と眞當と搗交せて、好い加減に自身の身のうへを話したが、所詮は何もかも洩け出してしまふことになるのであつた。安藤さんはその看護婦會のある附近の病院のことや、醫師のことを能く知つてゐた。須崎のところへ来る一病院の醫學士のことも能く知つてゐて、始終その噂をしてゐた。或時などはその先生を見に來いと言つてわざと葛代を呼びに來たりした。葛代はかういつた若い醫學士などを見ると、すぐ新田のことが想出せてならなかつた。そんな醫學士が何處かにゐないでせうかと言つて、安藤さんに其の風采を話して訊いてみたが、心當りもなからうであつた。するうち須崎の病氣は少しづつ快くなつて、七月の初めには床を離れて手摺ぎはへ出たり、廊下をぶら／＼歩くやうになつた。そして或日などは、自分の部屋に向き／＼したと云ふ風で、下へおりて来て中庭に面してゐる葛代の部屋を覗きに來た。狭い中庭には岩組の築山などがあつて、泉水に金魚が泳いでゐたが、楓が葛代の部屋の前に涼しさうな枝葉を繁らせてゐた。須崎はそこにあつた椅子に腰かけて、小さいながらにせい／＼した庭を眺めてゐた。長いあひだ二階に横

はつてゐて、偶に下座敷へおりてくると、何となく自然に返つたやうな安易な気分になるらしかつた。彼はまだ蒼い顔をしてゐたが、もう一兩日前に看護婦も返してしまつたのであつた。

葛代は安藤さんが、餘り吝なので、終には厭氣がさしてゐた。居るあひだ彼女は何でも自分の物をよく使つた。白粉でも香水でも、小遣ひの貸しなども少しは溜つてゐた。それに彼女は助産婦になることを畢生の目的にしてゐて、それを非常に偉いことか何ぞのやうに思つてゐた。一體に氣位が高くて、葛代などをひどく侮蔑してゐる様子が、親しむにつれて段々判つて來た。葛代はそれが厭で爲方がなかつた。

「わたし一生良人なんか持ちやしないわ。持つならうんと偉い人か名譽のある人。」安藤さんはそんな事を言つてゐた。

終ひに葛代は彼女が憎くなつて來たが、自分の身の上を田舎の人に話されても困ると思つて、それだけは口留めをしてゐた。

「そんなことを言つたつて、私の利益にも何にもなりやしないぢやありませんか。」安藤さんは笑つてゐた。

安藤さんは出て行くときにも、「早くそんな境涯から足を抜きなさい。若し貴女が眞面目な生活をするつもりなら、私いつでもお世話してよ。」と、そんな事を言つてゐた。そして彼女は須崎の寫眞などを荷物の中へ入れて行つたのであつたが、須崎は病褥にある間も、葛代が一日顔を出さないと何となく物足りない寂しさを感じるやうになつてゐたことを、彼女もよく知つてゐて、出る時分には餘り好い感じをもつてゐなかつた。

葛代はその日ちよつと外へ出ようと思つて、鏡臺の前に顔を作つてゐた。

「お化粧ですか。」須崎は物珍らしさうにそれを眺めてゐた。

七

葛代は須崎とはもう大分親しくなつてゐて、病氣の間も時とすると、散らかつた部屋を整理するとか、お粥を拵へるとか、又は牛乳を沸すとか、こま／＼した用事を達しなどして、何彼と親切に世話を焼いたのであつた。安藤もついてゐるには居たけれど、須崎は何彼につけ愛嬌のある彼女によつて慰められるところが多かつた。で、葛代があると何時でも機嫌が好かつた。しかし其だけに

葛代の方では気がおけるやうに思へて、いくらか堅くなるといふ風であつた。宋さんなどを相手にしてゐるやうな調子を成たけ見せまいとするのであつた。

「御免なさいよ須崎さん。」葛代は言つた。「ほんとに汚くしてますけれど、何うぞお入んなして。」
 「は、有難う。是からどこかへ行くんですか。」須崎は未だ何だか、大きな聲を出すと腹へ響きでもするやうに、低い、しかし澄んだ聲で言つた。

「いゝえ、何うして？」葛代はわざとらしく振顧つて、しほくくと微笑した。彼女は平顔のその顔に一番似合ふところの銀杏返しに結つて、潮色の浴衣を着てゐた。肩つきや腰のあたりがほつそりして鬢に櫛をいれてゐる節の暢々した眞白の手が、しなやかに動いてゐた。

須崎もその姿に魅せられたやうに、紅い顔をしてゐたが、葛代は鏡に映る自分の目や顔や頭髪を凝視めながら、須崎に背後から見られてゐるのだと思ふと、何となく胸が波立つた。それは新田の場合ほど一と向きな、そして餘裕のないものではなかつたにしても、その後多く見た男の誰にも感じたことのない、嬉しい惱ましい、一種の感情であつた。宋さんなどに抱いてゐた心持は、それに比べると餘りに潤ひの乏しい味のないものであつた。何うしてあんな人と、あんな長く一緒に暮し

たかと不思議に思ふくらゐであつた。それに又その他の場合にしたところで、自分のもつてゐる女らしい優しい幸福な感情は、體のどこからも少しも分泌しなかつたのであつた。勿論彼女はそれに満足してゐなかつた、始終遺瀨なさと物足りなさとの悲哀はあつた。彼女は唯毎日々々の浮いた氣分でそれを瞞して來たに過ぎなかつた。それには戀よりも其日々々の生活が女の心を絶えず焦躁させてゐたことも重なる原因であつた。甘い木實ばかりを擇んではゐられなかつた。

「安藤さんがゐなくなつて寂しいですわね。」葛代は少し間をおいてから言つたが、それと同時に、顔の薄化粧ができたところで、紙で手を拭きく此方に向いた。

須崎はにやつと寂しく微笑した。病氣をしたために、あの坊ちゃんくした顔が、いくらか老けて見えたが、それにつれて目の色などが深く沈み、鼻も輪郭がくつきりして、顔の道具の一つくの美しさを増したことに氣づかれるのであつた。別にさう綺麗な顔といふのではないにしても、優しくて柔かい感じであつた。

「安藤さん何うしたでせう。」

「何處かの病人についてゐるでせうね。年中あつちこつち遣られてゐるんですから。」

「あの人私に看護婦になれといふんですけれど……それは私も前に考へたことなんですの。」

「でも、患者に思はれて出世する人もあるといふぢやありませんか。」

「異性間のことですから、そんなローマンスもあるでせうね。」

「あの、お茶でもいれますから、此方へお入んなして。」

「は。この部屋いゝですな、涼しくて。」須崎はさう言ひながら、煉瓦塀に面した窓の方へ来て坐つた。

八

須崎は少し間をおいてから、初々しいうちにも、親しみのある口調で、急に想ひ出したやうに、「貴女出かけるんでせう。」と訊いた。

「いゝえ、可いのよ。」葛代は首をふつて、「用事はないのよ。」と答へたが、今自分が何處へ行く筈

であつたかに氣づくこと、ちよつと暗い感じがした。須崎が或は何もかも皆な知つてゐるかも知れないと云ふ氣もして、私と彼の顔色を覗つたが、彼は平氣な顔をしてゐた。しかし早晚知れることかも知れないから、話した方が氣が安まるかと思へたが、孰でもいゝと思つた。その事のために、輕蔑したり嫌つたりするやうな薄情な人間なら爲方がないのだと思つた。しかし須崎は坊ちゃんらしいから、自分を信じるだらうと考へられた。

「貴方温泉へ行きますせん。」葛代は訊いた。

「僕……行きます。二三日したら立たうと思つてゐます。」

「温泉何處？」

「さあ何處がいゝですか。湯ヶ島かどつか、餘り人の行かない處がいゝですな。僕寂しい處が好きなんですから。」須崎は答へて、「しかし餘り寂しいと悲しくなりますね。」

「え、私もさうよ。東京へ来る時なんか、それあ寂しかつたわ。だけれど、初めての旅でせう、どんな處かと思つて、早く東京へ着きたくもあるし、可怕くもあるし、それあ可笑しいのよ。それに私親兄弟は嫌ひですけれど、他人となら氣の合つた人は随分好きよ。私姉さんそこへなんか行つた

ことないけれど、些とも逢ひたいと思ひませんよ。」

「さうですか。僕はそんなでもないな。この夏は温泉へ少時行つてゐて、それから田舎へ歸らうと思ふんです。」

「田舎はどこですか。」

「兵庫縣ですが、それあ海岸の好いところですよ。大阪から直ですよ。」

「大阪！ あゝ、大阪は好いところですよ。」

「大阪は些とも好ありませんが、しかしあの邊には景色の好いところが澤山あるんですよ。京都だの奈良だの。それから僕るところから少し行くと須磨だの明石だの。」

「あゝ、須磨！」と、葛代は微に耳に挟んだことのある地名を見出して、空想的な目をしたが、どんな處だか一向空漠としたもので、想像にも浮ばなかつた。興味もなかつた。たゞ須崎の産れ育つた土地の近いといふだけに、淡い好奇心が動いただけであつた。

「あつちの人みんな優しいのね。男でも女でも。」

「さうですか。それあ言葉なんかはね。」

「それで貴方はいつ頃お歸んなして？」

「やつぱり九月ですね。」

「随分ゆつくりぢやありませんか。その時分には私こゝにゐるか居ないか判りやしませんわ。」葛代は悲しげな表情をした。

須崎は別に何とも言はなかつた。何か訊きたくても口が重さうであつた。葛代は張合がなくてじれつたく思つた。

「わたし貴方と一緒に温泉へ行かうか知ら。」葛代は紅い顔をした。

「いらつしやい。」と、須崎は言ひたげな目をしたが、やつぱり黙つた。

「私なんか行つちや悪いわね。貴方がお友達に會つたり何かした時に。でも其の温泉が餘り人の行かないところなら、途中だけね。」

「さうですね。」と須崎は紅い顔をしてゐた。

「私貴方と一緒に旅行してみたいわ。」葛代は笑ひながら言つて、俛いて煙管に苜をつめてゐたが、須崎も極り悪さうに目を伏せてしまつた。

それから葛代は色々の話のついでに、自分から時々外へ出かけていくことについて、それとなく説明した。それは下町の或家で、或男に逢ふため、言つてみれば妾といふやうな関係のものだが、自分は何時でもこんな生活をしようとは思はない。或大學生に誘惑されて欺かれた結果、さう云ふ風になつたままで、支那人と同棲したり何かしたのも其時の場合爲方がなかつたからであると、彼女は物をはつきり言つたり主張したりしない方だから、別に辯護的な態度ではなかつたにしても左に右そんな話をした。

「私その時分は眞實の田舎丸出しで、帯の締方一つ知らないやうな女でした。眞實にぼんやりだつたんですわね。それで新田といふ其の大學生に初めて逢つて親切な言葉をかけられたもんですから悉皆眞實にしてしまつたの。その人は厭に氣取つてゐたわよ。己こそ好い男だといふ風に。今なら思ふ存分言つてやるんだけど。」葛代は残念さうに言つた。

「その後逢はないんですか。何處にゐるか判らないんですか。」須崎は訊いた。

「え、私捜しても見ませんわ。あんな人駄目よ。私嫌ひよ。」

「でも第一印象でもものは、何時までも残るもんぢやないんですか。それ程に貴女が愛してゐたんなら。」

「さうでせうか。あゝ云ふのは眞實に惚れたといふんでせうか。私には何だかわからないわ。」葛代は首を傾げてゐたが、「私あの人に限らず、二三度逢つた人は、何う云ふ人でも愛することができるのよ。半襟一掛くれたやうな人でも其の人のことは忘れないのよ。可笑しい性質ね。」

「ぢや僕も何か上げませうか。色々世話してもらつたお禮に。」

「貴方には何をもらはうとも思つてやしないわ。貴方學生さんですもの。その代り學校をお出になつたら澤山戴くわ。だけれどその時分は奥さんをお貰ひして、家庭をお持ちなさるから、やつぱり駄目ね。」

「そんな事ないですよ。」須崎は笑つた。

「それでも私安藤さんに感謝しても可いと思つてゐるわ。あの人があなかつたら、私と貴方とは何時までも他人ね。今だつてそれあ他人だけれど、お友達になることができたんですもの。」そして彼

女は涙含しいやうな目をして、「男と女で可笑しなものね。そんなに好きでもない人でも関係があると打釋うちとけけてしまつて、どんな好きな人でも、関係がないと、何時までも他人でゐなくちゃならないのね。」

「さうかな。そんな事ないでせう。」須崎は笑つてゐたが、「僕そんな経験ないけれど、友人のなかには女と同棲してゐる奴もありますよ。そして其奴は幸福さうに遣つてゐますよ。或男なぞは、始終女を取替へて、夫から夫へと移つて行くんですが、何だか不思議ですね。僕も病氣をして寝てゐるうちに、かう云ふ時に細君のある奴は幸福だと思ひましたよ。」

「え、それあ宋さんなんか、世帯をもつた方が一人で下宿にゐるより、どのくらゐ經濟だか知れないつて、さう言つてましたわ。」

「僕も來年は妹が東京の學校へ入ることになるかも知れないから、さうすると一軒家をもつかも知れないんです。」

「貴方妹さんあるの。」葛代は紅い顔をした。

「妹も弟もあるんです。」

「貴方の妹さんなら、きつと美人でせう。」

「え、それあ僕よりかいくらか優よしですけど、田舎ものですから。」

「ちや田舎もの同士で好いちやありませんか、でも私學問ないから駄目よ。」そして彼女は急に氣をかへて、「貴方旅行しなしたら、お手紙を下さいね。私人から手紙もらふこと大好き。私も上げますけれど、字が下手ですから極まりがわるい。」

「僕も下手です。」

旅から

一五六

間もなく須崎は旅に出ることになった。豫定よりは大分遅れてゐたが、それは立つ間際になつて二人の心が興奮状態にあつたからで、歸つたら一緒に家をもたうと云ふ事まで、雙方で決めてしまつたのであつた。

或晩二人は、田舎への土産ものなどを買調へるために一緒に通りの方へ出て行つた。須崎は葛代とそんな關係に落ちたことを、宿の上さんなどに知られることを慚⁺ぢてゐたし、たとひ歸つてから同棲生活を始めるにしても、誰にも知られたくないといふ羞恥心から、可成それを顔色に現はさないやうにしてゐたが、葛代が始終部屋へ來て話込んで行くので同宿の人からも、妙な目を擲⁺けられるやうになつてゐた。勿論葛代も何か邪魔でも入つては困ると云ふ不安もあつたので、女中などにもそんな素振^{そぶり}は成たけ見せないやうにしてゐる積りだつたが、心に溢れる歡喜を包むことはできなかった。それと同時に、今迄經驗したことの無い惱みもあつた。手觸りのいかにも柔かい、ぼやつ

とした須崎の心が頼りなく思へて爲^し方がなかつた。あんなことを言つてゐても、それは嘘ではないにしても、いつ氣が變るかも知れないと云ふ氣がした。況⁺して田舎へ歸つてしまへば、周圍はみな堅氣の人ばかりだから、たとひ普通の素人^{しょうとん}同士の戀愛關係にしたところで、故障や反對が出がちなのに自分のやうな暗い經歷をもつたものが、巧く成功するか何うかは疑はしい。

で、葛代は寫眞や何かも、顔には餘り移らないのを承知でわざと束髮に結つたところを撮^とつたりなどして、須崎の荷物のなかへ入れるやうにした。

「私貴方について行かうか知ら。何だか心配で爲^し様がないわ。貴方が歸つて顔を見るまで私氣が落着かないわ。どんなに待遠しいか知れやしない。」葛代は買ひものに出て途々こんな事を言つた。

須崎はたゞ笑つてゐたが、彼も同じやうに淡^あい不安は感じてゐた。

須崎の話によると、母の異^いつた彼の兄は家で農業をやつてゐた。それが先づ財産を取ることになつてゐて、其代り自分は學問をさせてもらふので、學校さへ出れば、絶對の自由が自分に許されてある。何をしようと儘だ。誰と結婚しようとか、干涉の出る氣遣ひはないと、さう言ふのであつた。そして葛代の身分さへ巧^うく胡麻化しておけば、誰からも故障の出る氣遣ひはないと明言してゐた。

須崎は妹や弟へ文房具や本を買ひ、自分が温泉場で飲む葡萄酒や菓子なども買込んだが、葛代は妹へ半襟などを、自分の見立で買った。

その邊の學生は、歸省や避暑に行つたあとで、大分疎になつてゐたが、でも暑苦しい家を出てぶら／＼歩いてゐる人で、明い通りは可也賑つてゐた。で、二人は買ひものをしてしまつた處で、レストオランへ入つて、氷菓子などを食べてから九時過に宿へ歸つて來たが、須崎は出入を見られるのを憚つて、別々に間をおいて上つた。

須崎は何となく疲れてゐた。

「翌朝は何うしても立たなけあ。」彼は出立のおくれたことが、急に氣にかゝつて來たやうに惱ましげな目をして言つた

「家へは月半に歸るつて言つてやつてあるんだからね。温泉に一週間ゐるとすれば、歸るのは二十六七日頃になつてしまふ。温泉にゐる日目が段々縮まつてしまふ勘定だからね。」

「さう。ぢや翌朝！」と、葛代は半襟を出して見直してゐたが、そんな風にして歸省する彼の幸福な身の上が羨ましく思へた。

「私なんか眞實につまらない。」葛代は沈んだ聲で呟いてゐた。

「貴方が行つてしまふと、私ほんたうに寂しくなるわ。」

二

それから葛代は荷造の手傳ひなどして、夜おそくまで須崎の部屋にゐたのであつたが、須崎が病氣の癒つたとき撮つた寫眞は、その時貰つてもつてゐたが、もつと健康なときのをもう一枚どこからかみつけどして、帯の間に仕舞込んでゐた。須崎の荷物は、田舎で洗濯してもらはなければならぬ冬物が一梱、それは直接家へ送る筈のもので他に鞆が一箇にバスケットがあつたが、そんな物を開けたり閉めたり、途中で思ひ出して又詰め直したりしてゐる須崎の嬉しさうな様子が、葛代には一層寂しい感じを與へた。

「それは可けない。一枚しかないんだから。」と、須崎は一年も前に撮つたその寫眞を取戻さうとすると、葛代はあわてゝ其手を抑へて、わざと怒つたやうに、

「いゝぢやありませんか。何うせ私が持つてゐれば貴方がもつてゐるも同じですもの。」

「いけないな。僕その寫真大嫌ひなんだ。」須崎は言ひながら、強ひて争はうともしなかつた。

「でもこれ可い男よ。学校の帽子なんか冠つて。私大事に仕舞つといて上げてよ。私姉さんそこへ見せに行くのに、この方が眞面目でいゝわ。」

「おや〜。」と、須崎は困惑らしいうちにも其を許してゐるやうな調子で、顔を赭らめてゐた。

「私姉さんとこへ一切行くまいと思つてゐたけれど、これを持つて行けば大威張よ。それ見たかと言つてやるわ。」

「そんな事はもつと後のことにした方がいゝやうですね。」

「何うしてです。」葛代は不安の色を浮べて、「貴方のお家の方が決らないから？」

「いや、それあ大概……。」と、須崎はちよつと首を傾げたが、「僕に自信があるんです。母の氣にさへ入れば。母は大概のことなら、自由を許してくれるんです。」

「何だか心配だな。」と、葛代は田舎丸出の調子で、「それも貴方の態度一つよ。貴方が何々しても然うしてくれないぢやあ厭だと言張るんでなくちや。」

で、須崎は別にその事について葛代を眞實に安心させるやうな、何等斷定的な答は與へなかつた

が、人の好きさうに思はれる彼は母にすつかり甘えてゐるらしいので、其はさう喧しく須崎を責める必要のない事だとは思はれた。

翌日葛代は七時頃に目をさました。二階へ行つてみると須崎はまだ床のなかにもぞくぞくしてゐた。病氣以來彼はひどく床離れが悪くなつてゐた。それに昨夜は一時頃まで、結婚問題について同じやうな事を繰返し〜相談してゐて、疲れてゐながら興奮してゐた。須崎の心は幸福に充ちてゐた。田舎の家のことなどを際限もなく話してゐた。勿論財産家ではなかつたが、何うか慙うか須崎と妹くらゐの教育費は續きさうであつた。で、學校を出るまでは、お互に苦勞もしなければならぬ。少しは送金の増額を要求して見るつもりだけれど異腹の子にかゝつてゐるといふ地位にある母が可哀さうだから、さう心配はかけたくないと云ふ心持を彼は洩らしてゐた。甚くしんみりした話に陥ちて行つたのであつた。葛代はそんな話は餘り好かなかつたけれど家の關係が不思議にもひどく類似してゐるので、話がよく合ふのであつた。勿論須崎の場合は須崎の母が兄の母の妹だといふ關係にあるのと、物がいくらかあるのとで家庭は平和に行つてゐるらしかつた。

「いよ〜立つねね。私今日から寂しくなるわ。」葛代は枕頭で卷蓆に火をつけて、一服吸つてから

彼に渡しながら、「不思議なものね、宋さんの時なんか、何とも思はなかつたけれど。」
そして彼女は支度を手傳つたが出るときは一足先に電車で行つた。

三

須崎をステーションに送ると、彼女は何か初めて、自分の置かれてゐる地位が明かになつたやうな気がした。今まで彼女は今日のやうな軽い氣持でこのステーションの中へ入つたことはなかつた。左に右あんな青年と夫婦約束までしてしまふやうな關係になつたことは、自分の生立や經歷から考へて見て氣の咎めるやうな好運であつた。勿論そんな事は、たゞぼんやりとではあるが、始終空想してゐた。田舎を出るときから、臆げな幻を彼女は心に描いてゐた。それは別に飛びつくやうな躍かしいものだとも思はれなかつたが、つい自分の手近に、彼が待つてゐようとは思はなかつた。「人間の運でもものは何處にあるか判りやしない。」葛代はステーションを出がけに、そんな事を考へてゐた。

「それにしても宋さんは、あれから何うしたらうか。肺でも進んだんぢやないだらうか。」葛代は彼

の飛出たやうな、あの動きのない目を思出した。彼の執着がまだ自分に絡はりついてゐるやうに思はれた。それに比べると須崎は都てが純で明るい感じであつたが、それだけにまた彼女としては氣兼ね遠慮もあつた。母親や兄や弟妹のある男だと思ふと、尙更であつた。そんな人の承認を得なければ、二人が一緒になれないのかと思ふと莫迦々々しいやうな氣がした。

「でも可いわ、須崎さんのお母さんや兄弟なら。」葛代は自分の姉たちよりも、懐かしく思はれた。其にはそんな他人の方が、反つて機嫌が取りいゝと云ふ自信もあつた。

須崎はステーションでも、葛代に寄添はれるのを、ひどく極を悪がつてゐた。それが葛代には不思議でならなかつた。相手が普通の女でもあんなにするんだらうか、それとも私だから可慚しく思ふのだらうか。さうだとすると、何だか水くさく思はれなくないこともない。一緒になつてからもあんなにされなければならぬとすると、そして其が普通日本人の心持だとすると、自分は始終そんな氣兼ねから脱れることができない。

「でも昨夜買物に出たときにはあの人案外平氣だつたぢやないの、その前の散歩の時だつて、散歩はそれは何時でも夜だつたけれど……夜と晝とで、そんなに氣持がちがふのか知ら。」

しかし蔦代はそれも、ほんの些つと不快に思つただけで、其以上深く考へようとはしなかつた。妾のやうな事情で、人の世話になつてゐると言つたから、多分その男にでも見つかつては、大變だとも思つて、用心してゐたのかも知れない。蔦代はさうも思つた。とにかく然う拘つて考へる必要は感じなかつたが、一度佐久間が來た時、「あれは貴女の世話になつてゐる人だらう。」と言つたので曖昧な返辭をしておいたが彼はつきり然うだと思つてゐるらしいのであつた。部長を知人に持つてゐることを明せば、そこからさう云ふ男と知合になつた動機が知れてくるかも知れないと云ふ不安が、彼女の胸にあつた。

佐久間は久しく來なかつたが、宋さんのまだ立たないうちにも一度來たし、立つたことを知つてからも一度來て、附絡つた。蔦代は一寸のがれに、「下町の家だつたらゆつくりお話できるんですけど……」と、さう言つてうつかり其の家を教へてしまつたことを、後でひどく後悔した。勿論さうでもない、彼はなか／＼追窮の手を弛めないものであつた。佐久間の言ふのでは、嘘か眞實か判らないけれど、もうあの職は罷めてしまつたと云ふのであつた。そして其も蔦代の何時かの言葉を信じて、そのためにはかりに今迄の勤めで贏ち得た地位を投出してしまつたといふのであつた。

「今度須崎さんが歸つてくるまでに、あの男を何とか巧く片着けておかなくちや。」蔦代は電車のなかで、そんな事も考へてゐた。

四

その佐久間が或日また遣つて來たのは、蔦代が須崎を送つてから四五日も経つてからであつた。伊豆の海寄の或る温泉にゐる須崎からの繪葉書や手紙を受取つたところで、彼女はその時その返辭を書くために、頭腦を悩ましてゐるころであつた。

そんな處へまだ一度も旅行したことのない蔦代には、その邊の自然の美しいことを、書いてよこした須崎の手紙だけでは、須崎が今どんなところにゐるのか、一向想像もつかなかつたが、一人で海邊や山などを歩いてゐる須崎の寂しい姿は、臆げにも想像することが出來た。一人で何處の海を見に行つたとか、一人で何處の山へ登つたとか云ふことが其の手紙に書かれてあつた。二人でこんなところを歩いたら、どんなに楽しいだらうと云ふことも書いてあつた。しかし今のところそんな自由は、二人のあひだにはまだ許されてはゐない。自分はまだ學生の身のうへだと、そんな事も書

いてあつた。

その手紙を見ると、葛代には彼の卒業が、待遠しいやうに思はれてならなかつた。今度歸つたら多分同棲することにはなるだらうと思はれたが、色々考へてみると、今迄の學資だけではいくら儉約にしても葛代の想つてゐるやうな生活は難しいかも知れなかつた。勿論今までの不檢束な生活は思ひ切つて更めなければならぬ。須崎と結婚することさへできれば學校を出るまでは、どんなに貧しく暮しても可いのだと葛代は自分にも考へ、須崎にも言つたのであつたが、其の問題についてはさう實際的に考察して見た譯でもなかつた。

「わたし是でもなか／＼經濟が巧いよ。宋さんにだつて、わたし餘計なお金は少しも費はせなかつた。」葛代は須崎にさう言つて話したのであつた。

「私外で物を食べる癖さへ更めれば、小遣も何にもいりやしないよ。」

「下宿生活をしてゐるうちは誰でもさうだよ。」須崎は笑つてゐたのであつた。

とにかく早く家をもつやうにしなければならぬ。學校を出るまで、そんな自由が許されてゐないといふ須崎の手紙は、その文句だけで見れば、立つ前と氣持も大分違つてゐるやうにも思へて、

別に然う氣にする程のことでもなかつたけれど、それも言つてやらなければ……と、葛代は須崎に別れてからの自分の毎日々々の生活について、彼の悦びさうな事を、秩序もなく書きならべてゐるところへ、佐久間が詰衿姿でいきなり入つて來たのであつた。

葛代はぎよつとした。

「何だつてこの人は、人の部屋へ無斷でなぞ上りこんで來るんだらう。」葛代はさう思つて、肚が立つた。

「相變らず暑いぢやないか。今ちよつと此邊まで來たもんだからね。」佐久間は葛代の振顧つた暗い顔を見て、そんな事を言つて、側へ來て胡坐をかいた。

「何といふ失禮な人だらう。厭な奴！」葛代はさう思つたが、然う思つただけで、素氣ない様子はやつぱり爲てゐられなかつた。

「いらつしやい。私吃驚しましたわ。」

「何だ、長い手紙など書いて、どこの色男にやるんだ。」佐久間は胸をはたけて、手帕で太い頸などを拭きながら、ちよつと暗い眼をしてゐた。

葛代は目元と口元に、「ふむ」と笑つたが、わざと落着いて手紙を捲きはじめた。

「わたし書かう／＼と思つてる手紙が、澤山たまつてゐるんですよ。」

「そんなに澤山どこへやるんだ。」そして佐久間は大きい手を出して、「ちよつとお見せ、字がうまいぢやないか。」

葛代はあわて、横の方へ引込めた。

五

「何だ、己なら見ても可いぢやないか。ちよつと見るだけなんだ。」といふ風に、佐久間は葛代の左の手をぐつと壓へて、右の手の半分捲きかけた手紙を取りあげようとした。

「あゝ、いけない可けない。」と、葛代は右の手を背後へまはしたり高く差上げたりして争つたが、男の力には敵はなかつた。眞紅になつて、しかし持前の笑顔を放さずに悶腕もんわんいてゐるうち、彼のこわい顎髯が唇にふれさうになつたり、細い體を締めつけられさうになつたりした果に、到頭手紙も皺くちやになつて、そのうへ裂けてしまつて、葛代は腹立たしげに、その幾分を帯のあひだへ挿ん

だまゝ、すつくと壁際に立ち上つた。目に涙をためてゐた。

「何だ、また誰かと世帯をもつんだつて。」と、佐久間は切れ／＼になつた手紙の一部を擴げて、他の部分を寄せはじめた。

「早いな。それから其へと喰物を捜していくお手際は實に巧妙なもんだね。そんな可愛らしい顔をして。」と佐久間は興味ありげに手紙を読みはじめようとした。

「何にも書いてありやしないぢやありませんか。」葛代はさう言ひながら、もう何うでもいゝと云ふ風で、べつたり其處にすわつた。骨ばつた佐久間の横頬をびし／＼打つてもやりたいくらいであつた。

「はゝ。」と、佐久間は手紙から放した目を葛代にむけて、「何でもありやせんぢやないか、こんなもの己に讀まれたつて。だが巧いことを言つてるぜ。」

「ちつとも巧いことなんか言つてやしないわ。私手紙を書くのがほんたうに下手なんですから。」葛代は紅い顔をして、少し機嫌を直して來た。いつまでも怒つてゐることは、彼女には迎もできない藝當であつた。

「とにかく可^{おそ}恐しく機敏だよ。宋さんが歸つたと思ふと、すぐ後釜を拵へるなんて。えい。」佐久間は咽でへらく笑ひながら、「學校を出るのが待遠だなんて、これあ一體どこの學生だね。」
それだけは斷じて言へないと、蔦代は思つた。

「何處の學生だつていゝぢやないの。私もよくは知らないのよ。」

「しかし是が眞實なら大變いゝぢやないか。先は金持の坊ちやんらしいね。」佐久間は媚びるやうに言つた。

「それあ然うさ。」蔦代は得意さうな鼻を蠢かして、「私だつて、さう何時までも支那人ばかり相手にしてゐやしないわよ。」

「いやに大きく出たね。先は君の素姓を知つてゐるのかい。」

「それあ然うですとも。私そんな瞞すやうなことしないわよ。それに後になつてそんな事知れると悪いでせう。だから何もかも言つて……」と、蔦代は得意と歡喜のこぼれるやうな目をしほくさせながら、「それあ可愛い好い男なのよ。」と呟いてゐた。

「莫迦にしてゐるね、己を前において……」と、佐久間は苦笑をもらして、「事によると其の男の方

が一枚方上かも知れんね。神田邊の學生はなか／＼油斷ができんぞ。女學生や何かを引かけるのを商賣にしてゐる色魔が多いから。」

「そんなぢやないわ。それこそ眞實の幼^{うぶ}だわよ。憚りながらそんな見分けのつかないやうな蔦代さんぢやないんですからね。」そして蔦代はじれつたさうに、櫛で頭髮をかきながら、「こんなに壞してしまつたわよ。結立の髪を……。」

佐久間はそこへ横になつてほれ／＼と蔦代を眺めてゐたが想出したやうに、

「お茶ぐらゐくれてもいゝだらう。それとも麥酒か。さうだ麥酒がいゝ。麥酒取らう。君も麥酒好きだらう。」

「こゝは駄目よ。」

六

蔦代はこゝで麥酒を飲まれると長くなつて困ると思つたが、佐久間がかまはず呼鈴を推して、女中に麥酒を命じた。蔦代も爲方なしに、「それから水菓子^{しみかた}をさう言つて下さいね。」と吩咐けたのであ

つたが、麥酒は素より彼女も好きだったので、二人で三本ほど直に飲んでしまった。

葛代はいつか燥いだやうな激越したやうな氣持になつて來たが、それと同時に佐久間を用心することを忘れなかつた。

「今度その人と一緒になれば、私お酒なんかぶつり止めてしまつて、それこそ眞實の堅氣にならうと思ふの。」葛代は彼と成るべく距離を取るやうに坐つて、そんな事を言つた。佐久間もさう強い酒ではないので可也酔つてゐた。

「さう云ふ好い話なら己も早速相談に乗つて上げてもらへがね。しかし眞實に然うなんかね。此方でさう云ふ風に決めてゐても、先は何うだかな。」佐久間はさう言つて、非をつけようとした。

そして彼はこの頃勤めることになつた或る土木の會社に於ける自分の地位や仕事や収入のことなどを話した。

「おれがあつた役をやめさへすれば己の言ふことを聴くと言つたらう。え、もう忘れたかい、忘れやしないだらう。」

「それあ貴方があんなことをしてゐると、可怕くて爲方がないから。いつ、何をされるかと思つて

さ」葛代は笑つてゐた。

「だから、もう可いぢやないか。もう可怕くはないだらう。」

「でも、私あの人に言はれたんですもの。己が歸るまで、濫順しくしてゐてくれろつて……だから私もその積りで、毎日お仕事なんかしてゐるのよ。」

「何だか怪しいもんだな。その男がほんとに約束を履行するか何うかね。學校にゐるうちは、其方が安揚がりだから、一緒に世帯をもつとしても、その男だつて卒業すれば世のなかへ出るだらうから、何う氣が滲るかわからんよ。男の心つてそんなもんだよ。」

「貴方はさうだかもしれないけれど……貴方こそ立派な奥さんがありながら、そんな氣紛れを出すんですもの。」

「あんなものは出さうと思へば、何時だつて出せるんだからな。同郷の先輩に押つけられて、爲方なし貰つたんだが、子供はなし、何でもないさ。」

そして佐久間は自分の細君が、同じ官吏をしてゐた人の娘で先輩の家に世話になつてゐて、再縁だといふことを話した。

「そんな薄情な人わたし嫌ひよ。」などと、葛代はほんのり蔷薇色になつた目元に微笑を浮べながら冷笑つたが、佐久間はいつかそこに寝そべつて、彼女の膝へ寄りかゝらうとしてゐた。その目が野性的な慾望に燃えてゐた。

「駄目です、駄目です。」葛代は體をはづすやうにして、「こゝは私ほんたうに綺麗にしてゐるんですから。そんな事は吠にも出さないやうにね。」

「そんな事を言つたつて、己は初めつからのことを、何でも知つてゐるんだからな。」佐久間は彼女の手を強くおさへてゐながら、「己の目が光つてゐるうちは、好きな眞似はさせやせんからな。」

「いゝぢやないか。支那の留學生なんか。それもお前が可愛いからだよ。」

葛代は爲方なし、一寸のがれに彼をすかして外へ連出すことにした。ほんたうに蛇のやうな男だと思つた。

七

葛代は別に何處へ行くといふ當てもなかつたが、佐久間をはづすにはやつぱり下町の家へでも行くより外ないと思つた。で、其の事を佐久間に話すと、佐久間はそれを水臭いとも思つたらしかつたが、好奇心に釣られて一緒に下宿を出た。

しかし葛代は、彼と一緒に歩くのが厭でならなかつた。白い綿リネン詰襟にパナマを冠つた、肩幅などひどく不恰好に濶い、顎骨の角張つた彼と、一緒に電車に乗つて、話などしかけられては堪まらないと思つた。

「佐久間さん。」悄々歩いてゐた彼女は、電車の停留場へ來たとき後から萎れた聲で呼びかけた。

「何うしたね。」佐久間は振返つた。

「わたし途中でちよつと用事があるのよ。」

「どこにね。」と佐久間は怪訝さうに、「ぢや其處へ一緒に行かうぢやないか。どこか此邊かね。」

「いゝえ、然うぢやないのよ。」と葛代はじれつたさうに響め面をして急に思ひついたやうに、「私貴方に言はなかつたけれど體がわるいのよ。何うしても今日診てもらひに行かなければならない事があるのよ。」

「さうして其れはどこね。」

「牛込なんですもの。」蔦代は困惑の色を浮かべて、「私先日からふつり忘れてゐたの。外へ出て電車に乗ることを考へたら、急に思ひ出せて來たの。ほんとに心配なことがあるんですからね。」そして彼女はいら／＼しさうに停留場の時計などを見あげた。熱い残炎ざんえんがその邊の路傍樹に燃えてゐた。

「己をまかうと言ふんぢやないね。」佐久間はさう言つた不安な目をして、彼女を凝視みつめた。

「それに、一緒に歩いぢや見つともないぢやありませんか。」蔦代は、氣捷きせつこく蔽冠おつかかぶせるやうに言つた。

佐久間は狼狽ろうたへたやうな表情をした。

「だから然う言つてるぢやありませんか。私一足後から行きますわ。そして若しよかつたら……ね、いゝでせう、だから貴方先へ行つててぢやうだい。」

佐久間はその處を詳しく蔦代に教はつて、そこから電車に乗ることにした。

「ぢや眞實ほんじつに來るね。きつとだね、何時間ほどたつたら？」

「それあ行きませすさ。え、さうね一時間半ばかりかゝつてよ。」

「ぢや己も、ちよつと下谷の方に用事があるから、それを済ましてから行かう。」

蔦代はぶら／＼通りをあるいてゐたが、別に好い思案も湧かなかつた。自分の體がさう綺麗なものだとは思へなかつたが、それでなくてさへも自分の所有もつか何ぞのやうに思つてゐる佐久間が、そのために長い執拗な執着を残されては實に遣り切れないと思つた。そんな事から須崎に厭氣たげを起させるやうな事があつては、自分は生涯浮ぶ瀬がないだらうと云ふ氣がした。しかし後の祟たぐりもあるだらうし、突外つぎはらすことはこの場合却つて不得策だと思はれた。

その晩佐久間は少しおくれれて來たが、蔦代は上さんの援助を假りたりなぞして、醫師の診断によつて體の悪いことが明かになつたのを口實に、とにかく其の場を脱れることだけは出來た。

佐久間は上さんなどのお酌で、大分酔つてゐた。そして酒に弱い彼は、そのまゝ其處に仆れてしまつた。

蔦代は後で知つたのであつたが、佐久間は別に選ばれた一人の女と半夜をすごして、夜おそく歸つたと云ふのであつた。

その翌日、葛代は牛込の姉を訪づれて、須崎の眞寫などを見せてそんな人と一緒になることを誇つた。

一七八

八

九月に入つてから須崎が旅から歸つて来たときには、葛代は牛込の姉のところに住ることになつてゐた。

勿論駿河臺から直ぐそこへ移つた譯ではないので、下町の方にも少時潜んでゐたし、時には下宿へ来てゐたこともあつたが、佐久間がこわいので表面は牛込にゐることにしてゐた。須崎は事によると妹をつれて来るかも知れないと言つてゐたが、神戸の女學校へ一先入ることになつたと言つて自分一人で歸つて来たが、海で魚釣ばかりやつてゐたさうで、顔がひどく日に焼けて目ばかり光つてゐた。

「随分遅かつたわね。私昨日も今日もこゝへ来て待つてゐたの。」葛代は彼の鞆を両手で部屋へ運び入れながら、さも懐かしさうであつた。

それが朝の九時頃のこと、彼女はまだ漸く顔を洗つたばかりの所であつた。朝晩はいくらか涼氣が立つて、二階の部屋から見ると空がいかに初秋らしい青さに澄んでゐた。須崎は昨夜何時とかの夜汽車に乗つたが、ひどく込んでゐて、徹宵幾んど眠られなかつたとか言つて充血した目をしてゐた。そして猿股一つになつて、洗面所で顔や頭髮を洗つたり、體を拭いたりしてから、漸といくらかせい／＼したやうな顔をして、二階へ上つて来た。葛代は汗ばんだ襦袢、埃のついた袴などを手摺にかけて、彼のためにサイダを抜いたりした。蟬の聲がどこかで聞えてゐた。

「東京はやつぱり暑いな。」

と彼は今まで親しんでゐた廣い大きな、何處を見ても水と草の色で蒼々して居る自然に馴れた目には、此二階の一室がいかに狭若しくて爲方がないと云ふ風に、どこか落着かない様子をしてゐたが、しかし居眠んだこの部屋も何となく懐かしく眺められた。簾ごしに見える庭木の埃ぶかい梢、縁の隅においてある藤椅子、それから主を待ちがほな、きちんと取片着けられた机——そして、夏の初めに病氣をして葛代と親しくなつてから今度の歸省の三月弱のあひだとかく遠ざかりがちになつてゐた學課のことなども急に思出されて、淡い悩みと不安が胸を掠めるやうに入染してゐた。

それに須崎は、葛代に恚うしていそ／＼した風で迎へられると、何となし胸が痛んだ。彼女が自分を待つてゐてくれることは眞實に嬉しいことには違ひなかつたけれど、しかし彼はこの歸省のあひだ、彼女のことを一度だつて母の前に打明けたことはなかつた。その機會を何うしても捉へることはできなかつた。勿論葛代から二度ばかり手紙が来て、一度などは、始終郵便の來る時刻を見計つて氣をつけてゐたにもかゝらず妹の手にわたつて、あはや祕密が發覺されさうになつたのであつたが、まだそんな事に何の興味をもたない、ぼんやりした妹は、たゞいくらか怪訝な顔をしただけで深く氣を留めようもしなかつた。

「田舎ものは間拔で爲様がない。」須崎はさうも思つて、それを飽足りなく感じたくらゐであつたがしかし知られることは矢張厭であつた。

で、須崎はいつか折があつたら母の耳へだけは入れておかうと思ひながら、差向ひになるといつい何時でも氣が沮はんで、口まで出てはそれ限かになつて了ふのであつた。

するうち日がたつて、八月といふ月も盡きてしまつて、九月になつてしまつた。須崎は寧ろ何にも話さないで、そのまゝ上京した方が安易やすだと感ずるやうになつた。到頭彼はそんなことは素振そぶりに

も見せないで、衆あんなに別れたのであつた。

「何といふ臆病な男なんだらう。」彼は汽車に乗つてから、さう思つて苦笑した。

九

そんな事情から、須崎は葛代の悦はび燥はいでゐる様子を見ると、氣の毒のやうな氣がしたが、それを色に出すことも出来ないで、成るだけ平氣らしい顔をしてゐた。そして神戸で買つて來た牛肉のつくだ煮だの、昆布の菓子だの、水菓子だの、さう云つたこま／＼した食物の桶かや罐かんをバスケットや行李のなかから取出したり、夏中調べるつもりで持つていつたノオトや参考書のやうなものをそこへ取出してゐる間に、葛代は葛代で着物や何かの始末をしたり、鞆たもとを干したりしてゐた。

「そんな事したら駄目や。蓋が反つてしまふやないか。」須崎は上方訛で言つた。

「それから此のつくだ煮な、これ早う食べんと可かんぜ。」須崎はいくらか煮汁しんじの沁出しみだしてゐるその桶をそつと新聞紙の上におきながら、「貴女あなたの部屋が涼しくて可いやないか。あの茶棚ちやだのなかがね。」
「あゝ然うね。」と葛代はいつの間に、そんな細かいところへ氣がつくやうになつたのかと、ちよつ

と其の顔を見たが、そんな事によく頭腦を働くのが彼方の人の氣習だといふことを、それから同棲生活のあひだに學ぶことができた。

そんな事をしてゐるうちに、直にお晝になつた。須崎も蔦代も朝飯といふほどのものを食べないで、土産の菓子やバスケットから出たバナナなどを、むしや／＼食べながら、須崎は海濱の釣の愉快なことや、あの邊で漁れる烏賊の作りの旨いことなども語つた。

蔦代は蔦代で、また北海の荒海でとれる魚の味のいゝことや漁獲の豊富なことを話した。それから此處の下宿人の噂、女中が代つたことなど。

「わたし貴方の顔を見たら、直ぐ話しようと思つてゐたことがあるのよ。」蔦代は言出した。

「ほう、どんな事？」

「あの佐久間ね、私が世話になつたと言つた……あの人と私此頃喧嘩してしまつたのよ。」

そして蔦代は、佐久間が二人のなかを感じていたから、皆な話してしまつたといふ事や、事による何か因縁をつけるかも知れないから、何うしても其の目を避れるために、一日も早く何處か遠いところに家を捜さなければならぬと云ふことを話した。

「わたし此間から、姉さんにもその事を明して、あの邊をそつち此方捜してゐるのよ。どんな狭い家でもいゝから一軒借りるやうにね。それでないと、何かに煩くて爲方がないのよ。間借や何かではね第一勝手元が自分の自由に使ふことできないでせう。それが不便で困りますのよ。」

須崎は聞いてはゐたが、その事が痛切には耳へは入らなかつた。そして碌々返辭もしずに、そこに横になつて、肱枕をしてゐた。何うやら彼は眠氣がさして來たやうであつた。

「どうなしたの。お眠いの。」

「あゝ。」と、須崎はだるさうな聲を出して、「何だか體がふらくしよる。」

「あゝ、長いあひだ汽車に乗ると誰でもよ。お寝みなしたら可いでせう。」

そして蔦代は枕を出して、彼の頭に當がつた。

「可いんだよ／＼。」須崎はふつと跳起きて、「何だか己は今海を見てゐたんだよ。海が目にしみついてゐるよつて。ほんたうに貴女に見せたいやうな美しい海だつせ。」

「さう、そんなに綺麗なの。」蔦代は應へて、「それで家どうするんです。」

「家なぞ何でもえいやないか。」須崎は子供らしく笑つてゐた。

彼等は久しぶりで晝飯を一緒に食べた。」

森の家

姉の方で、早稻田の奥よりに見つけてくれた一軒の家へ、須崎と蔦代は間もなく移つて行くことになつた。

姉からその話を聞いたとき、蔦代は一緒にその家を見に行つたのであつたが、そこは漸く最近に開けたばかりの森や草原の多いところで、赭い羽目板の眞新しい粗造の建築が、多分出來てゐた。道路も悪かつたし、水道や瓦斯などもまだ來てゐなかつたが、二階一室に、下が形ばかりの玄關を入れて六疊と四疊半といふ新建の一つが切拓きりひらかれた森の蔭に明いてゐた。商賣屋などのある通りからも、さう遠くはなかつた。季節の野菜や蜀黍たろもろこしなどの作られた畑地も多かつた。そして其それがひどく蔦代を悦ばせた。

「ほんとに好い家だけれど、少し廣すぎるわ。家賃だつてもつと安いところではなくちや。」蔦代は失望的な口吻を洩らしてゐたが、とにかく須崎に勧めて見たいと思つた。

須崎はその翌日、學校の歸りにそれを見て來たのであつたが、成算が立ちかねるやうな氣がした。土地に落着きのないのにも、何だか頭腦を搔亂されはしないかと云ふ心配があつた。

「何だか己は厭だな。」須崎は歸つてから葛代に言つた。そんな場末の新開地へなぞ移ることが、何の理由もなしに悲しかった。

「何うしてさ、あれ好いぢやないの。建つたばかりでどんなに氣持がいゝか。」葛代は言つた。

「それに田圃がみえるのが、私何より好きさ。森の傍だから涼しくて靜かで、貴方の勉強にもつて來いぢやありませんか。」

しかし空氣の平明な西に育つた須崎には、武藏野の荒い森や野は寧ろ暗鬱すぎるほど原始的な氣分であつた。それに彼は學生にふさはしい下宿生活から一足飛びに女と同棲の世帯に移るのが、また何となく不安でならなかつた。勿論友人のなかには、そんな事にかけては甚く早熟で、夙くから戀人を見つけて來て、家庭の眞似事みたやうな生活を樂んでゐるものもあつて、一應は美ましいやうにも思へるのであつたが、しかし愈々葛代と一緒に、そんな世帯などをもつのだと思ふと、恥かしくもあり責任も加はつて來るやうな氣がして、下宿生活の方がやつぱり氣樂だと感じた。それだと

言つて決して厭ではなかつた。遊びなどの逆も出來さうには思へない自分としては、今のうちさう云ふ風に好きな異性と小さい祕密な楽しい家庭を作つて、悪い交友などを避けつつ、靜かに勉強した方がどんなに自然で愉快だか知れないと思はれた。

それにしても二階の六疊だけ、餘分なやうな氣がした。

「わたし巧いことを考へた。」葛代は思ひ出したやうに言つた。

「貴方にはまだお話しなかつたけれど、好いことがあるのよ。」葛代は一人で燥いだ調子になりながら、「私國のお友達が一人あるのよ。男のさ。あの人を二階においてやらうか知ら。」

そして彼女は、野田が外國語學校を卒業して、この頃何か本屋の仕事などしてゐることを話した。

「君のラブぢやないか。」

「ううん、そんなんぢやないの。それこそ綺麗なく、關係なの。」葛代は胡散な目に笑ひをたゞへながら、「それあ可笑しいの。誰でもさう思ふんですけれど、小さい時分から知つてゐる同士は、却つて何うにもならないのね。その人だつて私嫌ひぢやないんだけど、そんな氣は何うしても出ない

須崎は多くを追求しなかつた。さうして左に右そこへ一旦引移ることに決めた。で、葛代は翌日姉にその事を話して、借りることにして、家の掃除に一日働いた。

二

葛代はそこで初めて姉を須崎に紹介した。其はちやうど其の翌日で、須崎と葛代で二人して、下宿から荷車に一臺運んで来た荷物を取込んでゐるところへ、姉が子供をつれて様子を見に来たのであつた。様子などを一向かまはない彼女は、それで葛代の體がさういふ風に決つたことを、甚く悦んでゐるらしく、更まつて須崎に挨拶をした。

「こんな我儘もので、何ですか一向お役にも立たないでせうけれど何分どうぞ宜しく。」彼女は葛代よりはどこかごつい氣のする其の顔を紅くして、出来るだけ丁寧に言ふのであつた。

須崎はそんな世間的な辭令には一向馴れないので、「あ、あ。」といふつて、たゞお辭儀をするだけであつた。

彼は洋服の下袴一つになつて、本箱や机や行李や、そんなものを葛代に手傳はせて六疊の座敷へ取込んでゐたが、さうして、貧弱なものでも何か飾りつけてみると、どこかに落着きが出て来て、自分の書齋だといふ安定な感じがするのであつた。南受の縁側から疊の上へ暑い午後の日が森の梢越しに差してゐた。その森の蔭からも新築の二階屋が見えた。やつぱり若い學生か學校出の勤め人か、でなければ青年藝術家夫婦でも住つてゐるらしく、縁には籐椅子などがあつて、室内に卓子が散らかつてゐるのが見透かされた。労働者か何かの貧しい家も、少し低いところの畑中に幾軒も立駢んでゐた。須崎たちの家は少し高いところになつてゐたので風がよく通るのであつた。

「こゝへ簾もかけなげやあならないし、手洗鉢も買つて來なげあ。」葛代は呟いてゐた。

「ね貴方、今夜買ひに行きませうね。」

姉は子供を負つて、赤土まじりの凸凹した庭をあちこち歩いてゐた。彼女にはもう次の赤坊ができて、それがもう二つになつてゐた。

「こゝへ花でも植ゑると可ござんすね。」と、彼女は須崎にお愛相を言つた。

「あゝさうですな。」と、須崎は笑つてゐた。

「わたし野菜を作るのよ。」葛代は楽しさうに言ふのであつた。

一九〇

「須崎さん、勉強なさる目の先へ、そんなもの作つて何うするんでせう。お前さんの悪戯ならあの邊がいちやないか。南瓜でも何でもね。それに今歳はもう遅いわよ。」姉は縁に腰かけながら言つてゐた。

「来年こゝにゐるか何うかわからないわ。この人が卒業すれば、もつと好い家へ行くわよ。」葛代は思ひあたつたやうな口吻で言つた。

やがて荷物が片着いたところで縁側でお茶が始まつた。葛代はまた木香の新しい臺所で、宋さん時代から持越しの自分の長火鉢で火をおこして、湯を沸したのであつたが、あの佐久間の父親の道具屋に買はせられたものは大抵棄賣にして今は、この火鉢と鐵瓶に、茶棚くらゐのものであつた。

姉はさうした長いあひだの妹の生活の細かいことについては、一向知らなかつた。勿論支那人と一緒にゐたことなどは想像もしなかつた。何うでも勝手にするがいと彼女は諦めてゐた。そこへ須崎と一緒にゐるといふ報告をもつて二年ごしに葛代が訪ねて來たのであつた。彼女はすつかり大人ぶつてゐた。昔もあの頃から見ると、いくらか伸びたやうであつた。

「ほんたうに此處いらで身を固めなけあ、一生ぶら／＼しなけあなりませんよ。」姉はしみ／＼意見ををした。

葛代もそれは然うだと思つて聽いてゐた。これ迄の暗い放肆な生活を振顧ると、ぞつとするやうな氣がした。しかし又そんな處を経たからこそ、こんな道へ出てこられたのだと云ふ氣がした。

「あゝいふ温順しい人だから、葛代さんも今迄のやうに我儘ぢや駄目ですよ。」
葛代は笑つてゐた。

先刻から獨りで森のなかへ入つてゐた須崎は、その時のこゝと出て來て、此方へやつて來た。

三

葛代は姉にお蕎麥かすしでも食べさせて還さうと思つたが、通りへ出てもちよつと蕎麥屋もすし屋も見つからなかつたので、肴の切味や、お汁種のやうなものを買つて來た。それに米も早速さう言はなければならかつたし、醤油や砂糖も直ぐ必要であつた。彼女は無上に忙しかつた。赤阪で部屋をかりた時には、下の上さんがこま／＼した用事を達してくれた。今考へると、彼等もさう薄情